

2026 大学院案内

学習院大学大学院

Gakushuin University Graduate School



CONTENTS

学長からのメッセージ	1
法学研究科	2
政治学研究科	8
経済学研究科	14
経営学研究科	20
人文科学研究科	26
哲学専攻	28
美術史学専攻	30
史学専攻	32
日本語日本文学専攻	35
英語英米文学専攻	39
ドイツ語ドイツ文学専攻	42
フランス文学専攻	44
心理学専攻	46
臨床心理学専攻	49
教育学専攻	52
アーカイブズ学専攻	55
身体表象文化学専攻	58
自然科学研究科	60
物理学専攻	62
化学専攻	64
数学専攻	66
生命科学専攻	68
国際社会科学研究科※1	70
国際文化交流研究科※2	74
教育研究施設	80
大学院の概要	84
奨学金	85
学位授与数	86
教員免許状	88
入学者受入れの方針(アドミッション・ポリシー)	88
インフォメーション	

掲載内容は発行時点(2025年5月)のものであり、今後変更となる場合があります。

※1 国際社会科学研究科は設置届出中であり、今後、計画が変更になる可能性があります。

※2 国際文化交流研究科は設置認可申請中であり、今後、計画が変更になる可能性があります。

学長からのメッセージ

学長 遠藤 久夫

皆さんは学部での勉強を通じて学問の面白さ、奥深さに触れ、大学院でより専門を深めたいと考えている方々だと思います。輝かしい未来を期待した21世紀でしたが、四半世紀を過ぎようとする現在、少子高齢化の進展や人口減少、経済成長の鈍化や経済格差の拡大、温暖化・環境問題の高まり、新興感染症のまん延、戦争の勃発、大地震などの大規模災害の不安、生成AIの登場など、私たちの社会の不確実性は大きく高まっています。これらの課題を解決する上で、人間がこれまで蓄積してきた学問から導き出される叡智は非常に有効です。その意味で、未来を生きる皆さんの学問を深めようとする志を心より応援します。

学習院大学大学院は法学研究科、政治学研究科、経済学研究科、経営学研究科、人文科学研究科(12専攻)、自然科学研究科(4専攻)、国際社会科学研究科^{※1}、国際文化交流研究科^{※2}で構成されます。各研究科でどのようなことが学べ、どのような研究が行われているのかは大学院案内に記されていますので、進路選択の手掛かりにしてください。

学習院大学大学院の特徴は、優れた教員が少人数教育を行っていることです。その結果、優れた研究者やプロフェッションを育てきました。研究に対する国の補助金として科学研究費助成事業(科研費)がありますが、この採択状況は研究の活発さを示す一つの指標となります。採択件数では大規模な大学や教員・研究者の多い理系(特に医学系)大学が多くなる傾向にあるので、中規模で文科系の比率の高い学習院大学は件数ではこれらの大学にはかないません。しかし、採択率(=新規採択件数/新規応募件数)では令和3年度、4年度、5年度は私立大学中1位、令和6年度は同2位と本学の研究力の高さが表れています。

また、令和6年度に本学の大学院生が、優れた研究を行っている大学院生を顕彰する「日本学術振興会育志賞」を受賞しました。全国の著名大学から推薦された177名の中から19名が選ばれた快挙です。

学問の道は決して楽ではありませんが、学習院大学大学院の高い学問風土の下で、志ある皆さんが充実した学究生活を送れるよう心から願っています。

掲載内容は発行時点(2025年5月)のものであり、今後変更となる場合があります。

※1 国際社会科学研究科は設置届出中であり、今後、計画が変更になる可能性があります。

※2 国際文化交流研究科は設置認可申請中であり、今後、計画が変更になる可能性があります。

法学研究科

Graduate School of Law

法律学専攻

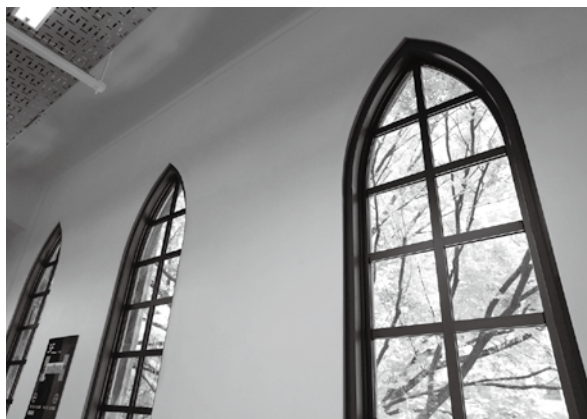
法学研究科

法律学専攻

授与する学位

博士前期課程：修士（法学）

博士後期課程：博士（法学）



▶ 法学研究科の特長

法学研究科は、法律学に関するさわめて高度な専門知識と幅広い素養を備え、自立して研究活動を遂行する能力を有する人材および高度な法律知識を習得し、実務で活躍する専門的職業人を養成することを目的としています。

本研究科は、1972年に修士課程（後の博士前期課程）として発足し、その後、1986年に博士課程（後の博士後期課程）が置かれました。2004年に法科大学院が設置されたことに伴い、博士前期課程が廃止されましたが、2016年4月から、博士前期課程を再開しました。

本研究科の入学定員は博士前期課程10名（収容定員は20名）、博士後期課程3名（収容定員は9名）であり、文字通り少人数の優秀な学生を、約30名の一流の教員が手厚く指導するのが本研究科の特長です。本研究科博士後期課程の修了者数は決して多くありませんが、大学教員その他の研究職に就き、活躍しています。

法律学について高度な研究を志す者又は高度な専門職業人を志す者の入学を歓迎します。

▶ 法律学専攻の概要

本大学院法学研究科法律学専攻は、優秀な研究者、高度の専門知識をもった職業人の育成につとめ、本学設立の目的使命の達成を完からしめようとして、開設されたものです。今日までの修了者をみると、大学での研究者や企業での職業人となっている者のほか、裁判官、弁護士として法曹界に所属し活躍する者が少なくありません。

▶ 修了後の主な進路（最近10年間）

■博士後期課程

学習院大学東洋文化研究所、みずほ信託銀行(株)、日本大学法学部など。

設置科目
（博士前期課程）

法学基礎研究	労働法演習
憲法特殊研究ⅠⅡⅢ	経済法特殊研究
憲法演習ⅠⅡⅢ	経済法演習
国際法特殊研究	知的財産法特殊研究
国際法演習	知的財産法演習
行政法特殊研究ⅠⅡⅢ	租税法特殊研究
行政法演習ⅠⅡⅢ	租税法演習
民法特殊研究Ⅰ～Ⅳ	国際私法特殊研究
民法演習Ⅰ～Ⅳ	国際私法演習
商法特殊研究ⅠⅡⅢ	英米法特殊研究
商法演習ⅠⅡⅢ	英米法演習
刑法特殊研究ⅠⅡ	ドイツ法特殊研究
刑法演習ⅠⅡ	ドイツ法演習
刑事訴訟法特殊研究	法哲学特殊研究
刑事訴訟法演習	法哲学演習
民事訴訟法特殊研究ⅠⅡ	研究指導
民事訴訟法演習ⅠⅡ	法学研究科特殊研究Ⅰ～Ⅴ
労働法特殊研究	

設置科目
（博士後期課程）

憲法特別研究	刑事学特別研究
憲法演習	刑事学演習
国際法特別研究	租税法特別研究
国際法演習	租税法演習
行政法特別研究	環境法特別研究
行政法演習	環境法演習
民法特別研究	西洋法制史特別研究
民法演習	西洋法制史演習
商法特別研究	国際私法特別研究
商法演習	国際私法演習
刑法特別研究	英米法特別研究
刑法演習	英米法演習
刑事訴訟法特別研究	ドイツ法特別研究
刑事訴訟法演習	ドイツ法演習
民事訴訟法特別研究	フランス法特別研究
民事訴訟法演習	フランス法演習
労働法特別研究	法哲学特別研究
労働法演習	法哲学演習
経済法特別研究	比較信託法特別研究 1
経済法演習	比較信託法特別研究 2
知的財産法特別研究	法学研究科特殊研究
知的財産法演習	

指導教員および研究分野など

青井 未帆 教授

憲法

■研究テーマ

憲法訴訟論、憲法 9 条論

主な研究分野は、憲法訴訟論と憲法 9 条論です。

論文として、「憲法判断の対象と範囲について」成城法学 79 号（2010 年）41 頁以下、「三段階審査・審査の基準・審査基準論」ジュリ 1400 号（2010 年）68 頁以下、「大規模災害時における実力組織の役割——自衛隊・消防隊・警察・在日米軍」公法研究 76 号（2014 年）89 頁以下など。



阿部 克則 教授

国際法

■研究テーマ

国際経済法、国際紛争解決手続

国際法の中でも、経済分野と紛争解決に関する研究を主に行っています。WTO 協定や FTA、国際投資協定などの条約と、国際紛争処理手続が研究対象です。最近では、WTO や投資協定の紛争解決手続と ICJ・ITLOS とを比較分析する研究プロジェクトを行っています。近著は、阿部克則・関根豪政編著『国際貿易紛争処理の法的課題』（信山社、2019 年）です。



大久保 直樹 教授

経済法

■研究テーマ

独占禁止法、反トラスト法、EU 競争法、事業法

反トラスト法では、ここ 10 年弱、これまで主流であった考え方に対する批判の声が大きくなっています。そうした声を受けて、個々の事件についてこれまでとは違った判断が示されるのが注目されるのですが、主流の考え方に批判的な立場の人々は、これまでとは違った組織に主導権を委ねようとしています。その点に興味を持ち、法律時報 2022 年 04 月号に「反トラスト法は「私人による公益の実現」を貫くのか」という論文を公表し、引き続き状況をウォッチしています。



大橋 洋一 教授

行政法

■研究テーマ

行政法の比較実証研究

最近公刊しました著書のうち、『行政法 I 現代行政過程論〔第 5 版〕』（有斐閣、2023 年）は、行政と市民との協働、対話型行政を基本的視点として、現代行政法の基礎理論の再構築を狙った著作です。また、『行政法 II 現代行政救済論〔第 5 版〕』（有斐閣、2025 年）は、行政救済法の基本書であり、現代的事例を素材に、「法を使う」ことに重点を置いたものです。



大村 敦志 教授

民法

■研究テーマ

民法総論、家族法、法社会史

解釈論・立法論のほかに基礎理論について研究しています。当面の課題は、『民法総論』（岩波書店、2001 年）、『家族法』（有斐閣、第 3 版、2010 年）を全面改訂して新著を刊行することですが、将来の目標は、平成期（1989-2019）と民権期（1871-92）の日本につき、社会と法の関係の関係を明らかにすることです。東アジア比較法、法教育、日本民法学史にも関心を持っています。



尾形 健 教授

憲法

■研究テーマ

福祉国家と憲法、比較憲法研究（日米比較）

福祉国家における法的現象を、憲法の観点から捉えることを中心に研究してきました。福祉国家下の法的システムには、国民の生活保障を支える社会保障法制はもちろん、経済活動の規制や労働者保護法制など、さまざまな法領域が関係しますが、これらを比較憲法の観点から考察することを研究課題と位置付けています。関連して、現代国家における司法審査論への関心も深めたいと思っています。



小山田 朋子 教授

英米法

■研究テーマ

AI と法、医事法、信託法

現代アメリカ法の上記分野を中心に研究をしている。FDA の AI 医療機器規制の動向について『雑誌アメリカ法 2023-2』（2024 年）所収の論文、アメリカ信託法の分散投資義務について『現代の信託法 アメリカと日本』（共著、弘文堂、2018 年）所収の論文、アメリカの医療と利益相反の近年の動きについて『法学志林 120 巻第 1 号』（2022 年）所収の論文紹介がある。



神前 禎 教授

国際私法

■研究テーマ

国際私法、国際民事手続法

性質決定、連結点の確定、そして準拠法の特定といった国際私法における準拠法決定過程に関して、総論的に行われている議論と各論における具体的解釈論との整合性について研究を進めている。また、消費者契約・労働契約といった弱者保護が要請される契約類型についての国際裁判管轄および準拠法決定についても関心がある。近著は『プレップ国際私法』（弘文堂）。



神作 裕之 教授

商法

■研究テーマ

会社法、金融商品取引法、金融法、商事信託法
上場会社に適用される規制について、会社法と金融
商品取引法を中心に、さらには取引所や証券業協会の自主規制も視野に
入れて、研究をしています。特に、上場会社を中核とする企業グループの
管理・内部統制や、役員指名・報酬面からのガバナンスのあり方、非財
務情報の開示の意義と限界等に関心を持っています。



小塚 莊一郎 教授

商法

■研究テーマ

商取引法、会社法、宇宙法

「商法」の分野を、会社法と商取引法の両面にわたっ
て研究しています。研究のアプローチとしては、一方では法ルールの機能
を重視するとともに、他方では、国際的なルール形成の動向をフォローして、
制度の統一化と多様化の動態を把握しようとしてきました。近年では、後者
の問題関心から、社会における私法（民事法）の役割とは何か、といっ
た私法の基礎理論にも関心を持っています。



櫻井 敬子 教授

行政法

■研究テーマ

現代行政法の課題

行政実務で課題となっている個別問題に関心を持ち
続けている。教科書としては『行政法第6版』（共著・弘文堂・2019年）
があるほか、『行政法講座1、2』（第一法規・2010年、2016年）、『行
政法のエッセンス第一次改訂版』（学陽書房・2015年）、『行政救済法
のエッセンス』（同・2016年）がある。近時の論文として、「法治主義の
現代の変容」『法執行システムと行政訴訟』（弘文堂・2020年）がある。



佐瀬 裕史 教授

民事訴訟法

■研究テーマ

民事訴訟法

民事訴訟制度における上訴についての規律、そこから
派生して、審理の基本原則である直接主義や口頭主義の現代的な意義
について考察することを主要な研究テーマとしています。具体的な研究手
法としては、現在の規律の有していたもとの意義とその変遷を検討したう
えて、外国法（ドイツ法、英米法）における知見・議論を参照して、議論
を進める方法をとっています。



鎮目 征樹 教授

刑法

■研究テーマ

刑法、経済刑法、アメリカ刑法

専門分野は、伝統的な刑法解釈論ですが、特に、
国家・企業・団体などの組織体の活動と刑法の役割・機能という現代的
課題について、立法論を視野に入れつつ、研究しています。たとえば、組
織体の不作為によって生じた法益侵害について組織の構成員たる個人が
刑事責任を負う根拠と限界、組織体の活動に対して向けられた種々の妨
害行為について成立しうる罪をめぐる理論的課題などです。



竹中 悟人 教授

民法

■研究テーマ

契約法、法律行為法、契約の基礎理論

主に、契約法、および契約の基礎理論を専門として
います。ここ数十年の間に急速に進展しつつある、国際的な民法改正の
動向も視野に入れながら、契約法を支える思想や秩序についての国際比
較も試みようと思っています。



常岡 孝好 教授

行政法

■研究テーマ

行政手続法、弁護士懲戒手続、環境行政法、アメ
リカ行政法

最近では、行政法、行政手続法の見地から、弁護士会及び日本弁護士連
合会による弁護士に対する懲戒処分の実体や手続に関して、アメリカ行政
法の知見を踏まえて再検討している。



津村 政孝 教授

刑事訴訟法

■研究テーマ

証拠法

実務家が受け入れることのできる議論であるために
は、捜査についての研究には微妙なバランス感覚を必要とする若きころか
ら思っていて、研究テーマとしては、そうした感覚に乏しいわたしは捜査に
は近づかないようにしてきました。その結果、伝聞法則、推定・挙証責任
の転換などの証拠法がメインとなりました。また、刑事訴訟をめぐる心理学
的研究などにも興味があります。



長戸 貴之 教授

租税法

■研究テーマ

租税法と企業法

租税法は私法と密接な関わりを有する。特に、取引や企業活動・企業統治と租税法との相互関係を主な題材に、立法政策論まで意識した研究をしている。また、最近では国際的な企業活動の展開に伴い、国際課税にも関心を抱いている。著書に、『事業再生と課税—コーポレート・ファイナンスと法政策論の日米比較』（東京大学出版会、2017年）がある。



橋本 陽子 教授

労働法

■研究テーマ

労働者概念、労働契約の諸問題、非正規雇用法制
主な研究テーマとして、労働法の適用対象者である

「労働者」の定義について、長年研究しています。日本では、最近、フランチャイジーであるコンビニ店長が労働組合法上の労働者であるかが争われたほか、イギリスやフランスでは、自家用車を用いて、配車サービスを行うUberの運転手の労働者性が認められた最上級審の判決が出ており、新しい働き方に労働法が適用されるのかという問題は今後ますます重要になってくると思います。



長谷部 由起子 教授

民事訴訟法

■研究テーマ

証拠法、集合的権利保護、倒産法、民事保全
上記の研究テーマに関する著書としては、以下のものがあります。

『破産法・民事再生法概論』（共著、商事法務、2012年）
『集团的消費者利益の実現と法の役割』（共編著、商事法務、2014年）
『民事手続原則の限界』（有斐閣、2016年）
『民事訴訟法 第3版』（岩波書店、2020年）
『民事執行・保全法 第6版』（共著、有斐閣、2020年）



早川 咲耶 准教授

商法

■研究テーマ

商法、会社法、信託法

会社法の中でも特に同族会社に興味を持っています。日本では所有と経営が実質的に一致している閉鎖的な企業も、公開会社を前提とした会社法で規律されています。そのことによって生じる矛盾は、とても興味深いと思います。論文として、「会社債権者に対する会社役員の責任(1)～(6・完)」法学協会雑誌139巻(2022)・140巻(2023)。



マシヤド・ダニエル 准教授

民法

■研究テーマ

家族法、民法総論、英語による法学教育

同性婚をはじめとして家族の多様化を中心に比較家族法を研究してきました。現在は婚姻法における性のあり方を再検討していますが、家族の多様化の延長線上にある問題として、家族法上のペットの地位に関しても関心を持っています。また、近年は外国語（特に英語）による日本法教育の理論と実務に関する研究に携わり、リーガルトランスレーションをめぐる諸問題についても関心があります。



松下 淳一 教授

民事訴訟法

■研究テーマ

倒産法

民事手続法の中でも倒産法を中心に研究しています。経済的に破綻しそうな、あるいは破綻した企業や個人の経済活動を解体清算し、あるいは再建を図るための手続的な規律及び実体的なルールを検討しています。単著として『民事再生法入門〔第2版〕』（有斐閣、2014年）、共著として伊藤真他著『条解破産法〔第3版〕』（弘文堂、2020年）があります。



水野 謙 教授

民法

■研究テーマ

不法行為法

原因と結果との間の「因果関係」とはそもそも何か。

人の「人格」は人が主体的に作り上げていくものなのか、それとも他者との共同によってのみ形成されるのか。不法行為帰責論にかかわる、このような基礎的な諸問題について検討を重ねています。近年出版された『新注釈民法(15)〔第2版〕』（共著、有斐閣、2024年）の中では、名誉毀損やプライバシー侵害等について、社会学の知見なども参照しながら考察しました。



村山 健太郎 教授

研究科委員長

憲法、比較憲法

■研究テーマ

デュー・プロセス論、第1修正論

合衆国との比較という視点から違憲審査について研究している。合衆国の審査基準を学説主体に概観したものとして『アメリカの憲法問題と司法審査』（共著、成文堂）所収の論文がある。他方、判例分析主体の論考として、第1修正論について『続・アメリカ憲法判例』（共著、有斐閣）、デュー・プロセス論について『現代立憲主義の諸相』（共著、有斐閣）所収の諸論文がある。



森田 修 教授

民法

■研究テーマ

契約法、民法と労働法との関係、債権回収法
第1のテーマは、契約における当事者の合意の意義です。(森田修『契約規範の法学的構造』[2016]、同『契約の法性決定』[2020])。最近はそこから民法と労働法との関係に検討対象を特定して研究しています。

第2のテーマは、債権回収法です(森田修『債権回収法講義』[2011])。近時の法改正の債権回収へのインパクトを分析しています。



山下 純司 教授

民法・信託法

■研究テーマ

契約法、消費者法、信託法、法教育

消費者取引や金融取引における消費者や投資家の保護の問題や、非婚姻カップルの法的保護の問題などを研究してきました。背景には、人と人が合意によって法律関係が形成する自由やそれを規制する根拠といった点への関心があります。他方で、市民教育の一環としての法教育の在り方など、法学全般に関わる部分にも関心を持っています。近著として『法解釈入門』(共著・有斐閣)。



横山 久芳 教授

知的財産法

■研究テーマ

職務発明制度、著作権の保護客体論、著作権法における間接侵害規制のあり方

近著として、知的財産法学習者向けに執筆した『特許法入門』(共著・有斐閣)、『著作権法入門』(共著・有斐閣)、『知的財産法判例集(第2版)』(共著・有斐閣)、知的財産法の国際的側面を研究した『現代知的財産法講座Ⅲ知的財産法の国際的交錯』(共編著・日本評論社)がある。



若松 良樹 教授

法哲学

■研究テーマ

正義論、法と経済学

専門は法哲学ですが、もともと根無し草なので、経済学や心理学と関連づけながら、個人の選択の自由やパターナリズムという概念を中心に研究しています。その成果としては、『センの正義論』、『自由放任主義の乗り越え方』(ともに勁草書房)などがあります。最近では、人々の選択の実際を探るため、友人たちと実験をしています。



政治学研究科

Graduate School of Political Studies

政治学専攻

政治学専攻

授与する学位

博士前期課程：修士（政治学）

博士後期課程：博士（政治学）



▶ 政治学研究科の役割と性格

政治学研究科は「日本政治・政策研究」「国際関係・地域研究」「社会・公共領域研究」という3種類のコースに分かれ、それぞれ大学院生としての分析・研究の能力を訓練します。国際公務員など、修士号あるいはそれ以上の学位を持っているのが普通である職種もあれば、創造性が求められ、より高い学位が役立つ職種もあります。本研究科は、高等教育に対する社会的要請に対応しており、実務研修や海外での英語研修、短期留学などのプログラムを利用して、大学院生が一人では実現しにくい新しい学習環境に身を置くことができます。少人数教育の中で訓練を受け、自分自身で問題を見つけ、それに独自の方法で解答を見出すことができるようになる大学院教育は、大きな意義を有します。

▶ 政治学専攻の概要

グローバル化した今日の社会において求められているのは、高度な専門知識、実践的な問題解決能力、アイデアを形にして他者に伝える技術を兼ね備えた人材です。本専攻・博士前期課程では、こうした人材を育成するためのカリキュラムを提供しています。学生は将来の活躍をめざすフィールドに従って、日本政治・政策研究コース、国際関係・地域研究コース、社会・公共領域研究コースのうちから一つを選択し、それぞれ「コース専門科目」、「政策・実務科目」などを受講し、さらに各コースが主催する研究会に参加し、最近の研究動向や社会の最前線からの報告に接することになります。その上で、個別的研究指導を定期的に受けた「タームペーパー」の作成を経て、特定課題研究（あるいは修士論文）を提出し、学位（「修士（政治学）」）を取得します。

博士後期課程は第一線の研究能力を育成することを目的としており、本研究科博士前期課程からの進学を希望する場合は修士論文の提出が義務づけられています。

▶ 修了後の主な進路

● 研究・教育職系

学習院大学／学習院女子大学／茨城大学／桜美林大学／大阪学院大学／北九州市立大学／京都外国語大学／駒澤大学／静岡県立大学／鳥根県立大学／高崎経済大学／拓殖大学／中央大学／中部大学／筑波大学／東京経済大学／広島修道大学／広島市立大学／法政大学／山形県立米沢女子短期大学／明治大学／宮崎公立大学／独立行政法人大学入試センター研究開発部／学習院中等科

● 実務系

【官公庁・国際機関など】外務省／経済産業省／防衛省／国立国会図書館／衆議院事務局／衆議院議員政策秘書／自由民主党本部／東京都庁／横須賀市役所／横浜市役所／千葉県市町村（除千葉市）／茨城県市町村／UNHCR（国連難民高等弁務官事務所）

【財団・社団法人など】地方公共団体情報システム機構／独立行政法人国立特別支援教育総合研究所／国立大学法人東京大学（事務）／帝京大学（事務）／一般財団法人行政管理研究センター／一般社団法人輿論科学協会

【報道機関・出版社など】朝日新聞社／時事通信社／日本経済新聞社／日本放送協会（NHK）／読売新聞社／第一法規／都市出版／ベネッセコーポレーション【銀行など】日本政策金融公庫／三菱UFJ銀行／ゆうちょ銀行／北國銀行／横浜銀行／東京スター銀行

【一般企業】アイネス／アクセンチュア／アビームコンサルティング／茨城計算センター／NTTシステム開発／大塚商会／キッコーマン／共立印刷／光村印刷／小林製薬／コムテック／コングレ／佐藤工業／芝工業／松竹／信越化学工業／住友商事／電通／東海汽船／日本航空／バンダイ／日立システムズエンジニアリングサービス／富士通／博報堂プロダクツ／丸紅／みずほリサーチ＆テクノロジーズ／三井住友建設／三井物産／三井物産トレードサービス／三菱電機／メルセデス・ベンツ日本／郵船ロジスティクス／ヨドバシカメラ／楽天／わかもと製薬／ワークスアプリケーションズ／上海アジマス建设工程有限公司／ハイセンスジャパン

▶ 大学院生の研究テーマ

■ 博士前期課程

【日本政治・政策研究コース】

- ・日本における女性の政治参画による政策効果とは
- ・被災地のまちづくり
- ・日本の初等中等教育行政領域における地方自治体の自律性：公立中高一貫校を題材に
- ・都道府県庁所在地の市長選挙統計分析

【国際関係・地域研究コース】

- ・EU近隣政策における対外的な規範の構造—東方パートナーシップ（EaP）諸国を対象とした規範の類型と序列—
- ・中国ナショナリズムの官製ナショナリズムと大衆ナショナリズムの変容
- ・香港の司法機関の独立性を再考する
- ・中韓国交正常化の政治過程

【社会・公共領域研究コース】

- ・道徳性の非自発的な促進手段は倫理的に適切か？——モラルエンハンスメントとモラルナッジの検討
- ・ゼロコロナ政策に対する中国ネット世論の変化—「知乎」におけるテキストマイニングをもとに—
- ・中国における学校外教育が中学生の成績と高校進学に与える影響
- ・生活保護分野においても行政の透明性が確保できるのか—杉並区の行政事例を中心に—
- ・日本の運動部活動がもたらす教育的意義の再検討—シティズンシップ教育の「主体化の構想」の観点から—
- ・現代日本における新党の支持分析—立憲民主党・国民民主党・れいわ新選組の支持者は誰か—
- ・父子世帯の子どもが負う教育上の不利のメカニズム
- ・二十世紀初期における中国の「国語」ナショナリズムの創成—胡適の「国語」理念を中心に—
- ・コロナ下の中国の言論をめぐる緊張関係：コロナ対策から見える新たな統制モデル
- ・「公知」「小粉紅」と「陰陽怪気」の盛宴—現代中国のインターネット世論における政治表現について—
- ・中国におけるインターネット公共圏構築の可能性—ウェブ1.0時代とウェブ2.0時代の事件の対比を通して—
- ・現代日本の若者の進路選択問題
- ・中国既存メディアと新興メディアに対する中国共産党の管理体制の発展と相違
- ・「ポスト真実」環境における中国インターネット公共圏への再考—三つの原理から見直す
- ・中国ソーシャルメディア環境とネット世論の形成—反転の事例から見る個人メディアの役割と発展—

■ 博士後期課程

- ・デジタルメディアの世論形成
- ・日本における公共圏への参加意識の変遷に関する考察—現実社会からインターネット社会へ—

■課程博士

2013	笹部 真理子	「自民党型政治」の形成・確立・展開：分権的組織と県連の多様性
2014	長谷川 朋子	第一次世界大戦後における日本の会議外交の形成：ヤップ島問題を事例として
2018	金子 龍司	戦時下日本における娯楽統制の研究—音楽統制を中心に
	岡野 裕元	都道府県議会選挙の基盤的研究：選挙区構成と競合動態
2019	播磨 崇晃	明治期の報徳運動と町村自治—地方問題をめぐる官と民の競合—
2020	高嶋 由美子	難民問題とは何か？ アフガニスタン難民からの教訓

高度な実践能力を持った人材の育成をめざして

I 高度な実践的能力を持った人材の育成をめざして

大学院政治学研究科・博士前期課程では、現代社会の多様化、高度化、グローバル化に対応して、幅広い分野において調査・分析・政策立案などのすぐれた実践的能力を有し、将来指導的役割を果たすことのできる人材の育成を目的としています。

II カリキュラムの特色

1.3つの研究コース

学生は各自の目的・関心に応じて次の3つの研究コースのいずれかに所属して研究指導を受けます。所属するコースは入学時に登録を行います。2年次に進む際に変更することも可能です。

各研究コースにはそれぞれのコース専門科目が配置されており、学生は各自が所属するコースの専門科目を中心に履修することになります。一定の範囲で所属コース以外のコース専門科目を履修することも可能です。

●日本政治・政策研究コース

日本における政治・行政・政策過程の実態の分析を通じて、広い意味での政策決定・政策評価に必要とされる高度な知識・能力を身につけた人材の育成をめざします。行政とガバナンス、歴史政策論、公共政策論、計量政治分析、日本の統治構造、日本政治研究など、いずれも事例研究を重視した科目が設置されています。

●国際関係・地域研究コース

グローバル化が進展する今日の世界において、何らかの形で国際社会と深く関わりあう場で活躍する人材の育成をめざします。現代国際政治、国際政治経済論、国際開発協力論、現代アメリカ政治、現代ヨーロッパ政治、現代東アジア政治、現代中国政治などの科目を学びながら、国際社会における様々な問題の分析・解決能力を身につけます。

●社会・公共領域研究コース

グローバル化・ボーダーレス化が進む今日の社会・公共空間について、そこにはどのようなメカニズムが働いているのか、またそこにおける望ましいルールはどのようなものであるのかといったテーマに取り組み、これからの市民社会をリードしていく人材の育成をめざします。社会のメカニズムを学ぶための科目として社会情報学、社会階層論、政治行動論、公共領域のルールを探究する科目として公共哲学研究、公共思想史、日本政治思想研究などの科目が設置されています。

2.実践的な問題解決能力を養う「政策・実務科目」

実践的な問題解決能力を身につけるために、各コース共通の科目として「政策・実務科目」が設置されています。ここには、具体的なケースに基づいて課題の発見・政策の企画立案・執務上の諸問題などを学ぶ政策課題研究、中央と地方で実際に行われた政策評価活動の再分析を通じて様々な政策評価の手法を学ぶ政策評価演習、自治体・公的機関・民間団体・マスメディアなどの現場を経験することを通じて調査・分析や政策の企画立案・評価の実際に触れることを目的とした実務研修（インターンシップ）、さらに、これらの実践において不可欠な統計解析の手法を身につけるための統計分析I・IIなどの科目が含まれます。

3.必須の知識・スキルを身につけるための「共通科目」

将来どのような分野に進むにせよ、必ず必要となる基礎的な知識・教養やスキルがあります。こうした知識やスキルを身につけるために「共通科目」として基礎文献講読および共同基礎演習が設置されています。前者では邦語および英語の古典から最新のものに至る必読文献を読みこなして議論を行うことが求められ、また後者では議論の論理的構成やプレゼンテーションといった実践的なスキルの修得をめざします。

4.充実したスタッフによる密度の濃い研究指導

学生に対する研究指導には各コースの教員がグループとして当たります。すなわち、学生は集団的な指導体制の下で密度の濃い研究指導を受けることになります。そして在籍する4学期のうち3学期で「研究指導」を履修し、その3学期のそれぞれの終わりに「タームペーパー」（研究報告レポート）を提出しなければなりません。この「タームペーパー」の提出により、学位（「修士（政治学）」）を取得することができます。なお、研究者あるいはそれに相当する研究能力を得ることをめざして本学政治学研究科の後期課程に進学を希望する者は、4つの学期を通じて「研究指導」を履修したうえで、従来型の修士論文を提出しなければなりません。

5.主体的な研究活動への助成

大学院生の研究活動や学会発表には、一定の条件下で助成しています。

海外への短期の語学研修、長期の留学にもそれぞれ助成する制度を設けています。

政治学専攻の設置科目と カリキュラム

▶ 博士前期課程

● 共通科目(各2単位。上段5科目から4単位以上修得)

基礎文献講読Ⅰ 基礎文献講読Ⅱ 基礎文献講読Ⅲ

共同基礎演習Ⅰ 共同基礎演習Ⅱ

英語研究論文執筆演習 英語研究プレゼンテーション演習

● 専門科目(各2単位。コース専門科目6単位以上修得)

(1) 日本政治・政策研究コース

行政とガバナンス 日本の統治構造 日本政治研究

計量政治分析 歴史政策論 公共政策論

(2) 国際関係・地域研究コース

現代国際政治 国際政治経済論 国際開発協力論

現代アメリカ政治 現代中国政治 現代ヨーロッパ政治

現代東アジア政治

(3) 社会・公共領域研究コース

公共思想史 公共哲学研究 日本政治思想研究

社会階層論 社会情報学 政治行動論

● 政策・実務科目(各2単位。4単位以上修得)

統計分析Ⅰ 統計分析Ⅱ

政策課題研究 政策評価演習

実務研修

政策実務演習

● 研究指導(各2単位。6単位[修士論文執筆者は8単位]修得)

研究指導Ⅰ 研究指導Ⅱ

研究指導Ⅲ 研究指導Ⅳ

(注)前期課程修了に必要な単位は30単位。

【単位互換交流】(博士前期課程のみ)

成蹊大学大学院法学政治学研究科政治学専攻

中央大学大学院法学研究科政治学専攻

日本大学大学院法学研究科政治学専攻

法政大学大学院政治学研究科政治学専攻

明治大学大学院政治経済学研究科政治学専攻

立教大学大学院法学研究科法学政治学専攻

設置科目

基礎文献講読Ⅰ	公共思想史
基礎文献講読Ⅱ	公共哲学研究
基礎文献講読Ⅲ	日本政治思想研究
共同基礎演習Ⅰ	社会階層論
共同基礎演習Ⅱ	社会情報学
英語研究論文執筆演習	政治行動論
英語研究プレゼンテーション演習	政治学研究科演習
行政とガバナンス	政治学研究科特殊研究
日本の統治構造	統計分析Ⅰ
日本政治研究	統計分析Ⅱ
計量政治分析	政策課題研究
歴史政策論	政策評価演習
公共政策論	実務研修
現代国際政治	政策実務演習
国際政治経済論	研究指導Ⅰ
国際開発協力論	研究指導Ⅱ
現代アメリカ政治	研究指導Ⅲ
現代東アジア政治	研究指導Ⅳ
現代中国政治	政治学基本研究
現代ヨーロッパ政治	

▶ 博士後期課程

大学院政治学研究科では高度な研究能力の育成を目的とした博士後期課程を設置しています。日本政治・行政研究、国際関係・地域研究、政治理論・思想史研究、社会学・政治心理学・メディア研究といった広範な分野にわたる充実したスタッフの研究指導を受けながら、学生は「博士(政治学)」の学位の取得をめざします。

設置科目

政治学特殊研究	アメリカ政治演習
政治学演習	東アジア政治特殊研究
社会学特殊研究	中国政治特殊研究
社会学演習	共同基礎演習
行政学演習	共同特別演習
公共政策論演習	
公共哲学特殊研究	
国際政治特殊研究	
国際政治演習	
国際開発協力論演習	
社会心理学演習	
西洋政治思想史特殊研究	
日本政治外交史特殊研究	
ヨーロッパ政治史特殊研究	
日本政治過程論特殊研究	
日本政治思想史演習	

※「演習」か「特殊研究」かは変更されることがあります。

飯田 芳弘 教授

現代ヨーロッパ政治

■研究テーマ

19世紀以降のヨーロッパの政治史を研究している。狭義の専門であるドイツ政治史の分野では、『指導者なきドイツ帝国』（1999年）と『想像のドイツ帝国』（2013年）に続く帝政ドイツ史三部作の最終作を準備している。ヨーロッパ政治史の分野では、『忘却する戦後ヨーロッパ』（2018年）という書物を刊行したの続き、さらに比較政治学的観点を変えた20世紀のヨーロッパ政治に関する書物を執筆予定である。また、『新訂ヨーロッパ政治史』（2010年）の次の、新しいヨーロッパ政治史の通史を書くための作業を重ねている。



磯崎 典世 教授

現代東アジア政治

■研究テーマ

比較政治の観点から、急速な経済成長や政治体制を経験してきた韓国の政治にアプローチしています。近年の比較研究の成果は、『Emerging States at Crossroads』（共著、Springer Nature, 2019）や『アジアの脱植民地化と体制変動』（共著、白水社、2022年）で公開しています。また、国際関係の中で韓国政治を捉え直す研究も進めており、それらは『戦後日韓関係史』（共著、有斐閣、2017年）、『朝鮮半島と東アジア』（共著、岩波書店、2015年）などにまとめられています。



伊藤 修一郎 教授

公共政策論

■研究テーマ

地方自治体の政策過程を研究しています。アジェンダ設定段階、政策決定段階を扱ってきて、最近では実施段階を調査しています。主に都市景観や屋外広告を分析対象としているため、コモンズ論や法規制に関する理論にも興味をもっています。主な著書は、『自治体政策過程の動態』（慶應義塾大学出版会、2002年）、『自治体発の政策革新：景観条例から景観法へ』（木鐸社、2006年）、『政策リサーチ入門』（東京大学出版会、2011年）、『政策実施の組織とガバナンス』（東京大学出版会、2020年）。



井上 寿一 教授

歴史政策論

■研究テーマ

〈関心のあるテーマ〉過去の歴史的事例を今の政策に活かすためにはどうすべきかを追究しています。〈近著の紹介〉『政友会と民政党』（中公分新書、2012年）、『理想だらけの戦時下日本』（ちくま新書、2013年）、『第1次世界大戦と日本』（講談社現代新書、2014年）、『終戦後史—1945-1955—』（講談社選書メチエ、2015年）。



上神 貴佳 教授

日本政治研究

■研究テーマ

政党や選挙制度など、代議制民主主義の中核に位置する組織や制度を主要な研究対象としてきました。近年では、大規模データベース（PPDB）を用いた政党組織の国際共同研究やアジアの政党政治の比較研究に取り組んでいます。また、日本の地方選挙にも関心があり、人口減少・高齢化が進む地方自治体の議会について考察しています。



江藤 名保子 教授

現代中国政治

■研究テーマ

現代中国の政治と外交を研究しています。もともと日本と中国の間で政治摩擦が生じるメカニズムに関心があり、そこから内政と外交のリンケージや中国ナショナリズムなどに考察が広がって、中国の政治構造を様々な観点から論じるようになりました。近年は東アジアにおける中国の影響力について、経済と安全保障の重複する領域を検討しています。



古城 毅 教授

公共思想史

■研究テーマ

商業社会化・グローバル化の進行がデモクラシーの存立にとっていかなる意味をもつのか、未来のデモクラシーにおいて、宗教、公教育、知識人、メディアの役割はどのように位置づけられるべきなのかを、欧米の過去の事例や思想を参照しながら考えています。近著は、19世紀フランスの政教関係を主題とした『社会統合と宗教的なもの』（共著、白水社、2012年）、『商業社会と代表制、多神教とデモクラシー—バンジャマン・コンスタンの近代世界論とフランス革命論（一）〜（五）』、『国家学会雑誌』第127巻3/4号〜11/12号、2014年。



阪口 功 教授

研究科委員長

国際政治経済論

■研究テーマ

主な研究分野は地球環境ガバナンスです。現在取り組んでいるのは、環境・水産外交、サステナビリティ分野の認証制度、水産資源管理、地域漁業管理機関、ラムサール条約などの研究です。近著は、『日本の水産資源管理』（慶応義塾大学出版会、2019年）、“Japan’s environmental diplomacy and the future of Asia-Pacific environmental cooperation”（IRAP, 2021）、“Japan’s Fisheries Management Policy”（MHM, 2025）、『序論 地球環境ガバナンス研究の最先端』（『国際政治』214号、2025年）などです。



周東 美材 教授

社会情報学

■研究テーマ

専門は、メディア論、文化社会学です。メディア文化、特に近現代日本の音楽文化を対象にして、メディア・テクノロジーと社会の関係を考察しています。このテーマを考えるにあたり、家族やジェンダー、グローバル化やアジアという視点を重視しています。主な著書に『「未熟さ」の系譜——宝塚からジャニーズまで』（新潮社）、『童謡の近代——メディアの変容と子ども文化』（岩波書店）、『吉見俊哉論』（共編著・東京大学出版会）などがあります。



庄司 香 教授

現代アメリカ政治

■研究テーマ

アメリカの選挙にかかわる様々な制度の発達・変革の歴史とその背景分析を研究テーマにしています。たとえば、19世紀後半から20世紀初頭にかけて実現した直接予備選挙の普及には政党対立や地域の発展がどう関係していたのか、1970年代以降各州で次々と導入された自動車免許更新と有権者登録を合体させる制度改革に抵抗した勢力は誰か、といった謎解きに、歴史的アプローチや統計学など多面的な手法で挑みます。



玉手 慎太郎 教授

公共哲学研究

■研究テーマ

大きく二つのテーマをもって研究しています。一つは政治や社会制度の望ましいあり方をめぐる哲学的研究で、特にリベラリズムという思想的立場の精緻化を試みています。もう一つはそのような理論研究の応用として、公衆衛生政策のあり方について倫理的な観点から検討しています。近年の業績として、前者に関しては共編著『政治において正しいとはどういうことか』（勁草書房 2019）が、また後者に関しては単著『公衆衛生の倫理学』（筑摩書房 2022）があります。



中田 喜万 教授

日本政治思想研究

■研究テーマ

(1) 新井白石を基点として、近世日本における歴史認識とそれにともなう国家秩序観の転回を跡づけようと試みています。「公方」「大君」や「天皇」といった称号の問題もこれに関わります。(2) その予備作業として、儒学の想定する秩序像が、近世日本の現実の中でいかに解釈され、利用されたか、を考察してきました（「近世武士と儒学「学校の政」の理念」。また「封建」「郡県」の議論）。そのほか派生的に、(3) 近世と近代の「武士道」論（の幻影）、(4) 「日本」のいくつかの表象（国号・国旗・国歌など）にも関心があります。



野中 尚人 教授

日本の統治構造

■研究テーマ

日本政治の特殊性と普遍性について、他の先進民主主義国との比較を通じて論じています。特に、議会（国会）がどのような成り立ちの経緯をたどり、いかなる特質を持つようになったのか。また、日本における行政官僚制の形成過程にはどのような特質が見られるのかについて注目しています。



平野 浩 教授

政治心理学

■研究テーマ

人々が政治についてどのように考え、感じ、行動しているかに関する理論的、実証的な研究を行っています。理論的には主として政治心理学や行動経済学のモデルについての研究を、また実証的には大規模世論調査のデータに基づく統計的分析を行っています。このうち有権者の投票行動に関する実証的研究の成果は、『変容する日本の社会と投票行動』（木鐸社、2007 年）『有権者の選択』（木鐸社、2015 年）として公開されました。



藤田 由紀子 教授

行政とガバナンス

■研究テーマ

拙著『公務員制度と専門性』（専修大学出版局、2008 年）公開以降も、行政における専門性の問題に関心を持っています。近年は英国の公務員制度改革の研究に取り組み、「英国公務員制度改革における『専門職化』の意義」（2014 年）、「政策的助言・政策形成の専門性はどこまで定式化できるか?」（2015 年）、「府省横断型ネットワークの導入は英国公務員制に何をもたらしたか」（2023 年）などにこれまでの成果をまとめています。



三輪 洋文 教授

計量政治分析

■研究テーマ

現代政治におけるイデオロギーの役割や起源について、主に日本の場合に焦点を当てて研究しています。また、他にも日本政治に関する様々な問題について計量分析を行っています。近著に「Detecting Voter Understanding of Ideological Labels Using a Conjoint Experiment」（Political Behavior、共著）、「Assessing the Conservative Nature of the Supreme Court of Japan via Ideal Point Estimation of Justices」（Journal of Empirical Legal Studies）があります。



麦山 亮太 准教授

社会階層論

■研究テーマ

専門は社会学・社会階層論です。とくに日本の労働市場における不平等の実態およびそのメカニズムについて、社会調査データの計量分析を主たる方法として研究しています。最近では、学歴間の地位達成格差の趨勢、雇用形態による格差の原因と帰結、家族形成とキャリアの関係のジェンダーによる差異、性別職域分離、職業（職種）と不平等の関係性といった問題に取り組んでいます。



村主 道美 教授

現代国際政治

■研究テーマ

(1) 戦争や戦争に至らない武力の行使などのさまざまな紛争の要因。内戦に至る国内の政治過程。紛争に対する外部社会の対処。中部アフリカ。中東、南、東南アジア。(2) 日本および日本の近隣諸国の安全保障政策。日米安保条約。(3) 20 世紀の集団殺害の要因、背景、その展開、将来において可能な防止方法。(4) 中国と発展途上国との相互関係。(5) ミャンマーの変化とそのロヒンギャ問題。



元田 結花 教授

国際開発協力論

■研究テーマ

開発援助の理論的な根拠や政策内容・介入方法、およびその対象社会への影響を分析し、ある国が政策という形で援助を供与する意味を考えてきました。「開発」の名の下に、途上国において、個人々のあり方から、社会の構成原理、国家の枠組みまでもが、欧米由来の議論の影響を強く受けている現状の分析・解明に取り組んでいます。同時に、新興国の台頭に示されるような、西洋中心主義に挑戦する近年の動きが、今後の国際開発のあり方をどう変えていくのかについても、注目しています。



横山 智哉 教授

政治行動論

■研究テーマ

社会心理学を専門とし、特に政治に関する人々の意見や態度形成、あるいは意思決定に関するメカニズムの解明を研究しています。このうち、人々が主に親密圏で交わす政治的会話や、公共圏で交わす政治的議論の効果を明らかにした実証研究が『「政治の話」とデモクラシー：規範的效果の実証分析』（有斐閣、2023）として公開されました。



経済学研究科

Graduate School of Economics

経済学専攻

授与する学位

博士前期課程：修士（経済学）

博士後期課程：博士（経済学）



▶ 経済学研究科の特長

現代は、経済の仕組みがいよいよ高度化・複雑化している時代です。それに伴い、新たな問題が次々に現れ、経済学が取り扱う領域はますます広がり、併せて社会に対し果たすべき責任も増えています。

そのような中で、経済人として社会で一層活躍するためには、学部で修得した知識の上に蓄積される新たな学問的付加価値が、強く求められます。本研究科では、このような観点を踏まえ、広く深い視野から経済学を理論的・実証的に学び、経済現象のよりの確な理解に迫ります。

2008年度より、従来の研究者養成コースに加えて高度な専門職業人の養成を目的とする専修コースを導入しました。専修コースでは修士論文を課さず、特定課題研究としています。

▶ 経済学専攻の概要

近年、内外の経済は、技術革新や国際化の急激な進展、ならびに、超高齢社会の到来などに伴って、新たな、解決困難な課題に直面しています。こうした諸問題に対処するために、経済学は、これまで展開されてきた理論ならびに実証分析のさらなる深化と新たな研究が要請されるとともに、国際間における学術交流のより一層の進展ならびに隣接諸科学との学際的研究が強く求められています。

こうした中、経済学の研究においては、内外で大きな前進が見られつつあります。例えば、経済主体の行動をその相互依存関係や情報の非対称性を考慮して分析する情報の経済理論が飛躍的に進歩しました。情報の経済学は日本の企業間関係、雇用契約形態、さらに貿易政策などの分析にも応用され、わが国の経済制度や慣行の特徴を体系的に分析し、欧米のそれと比較する試みもなされるようになっていきます。また、不確実性下の経済行動を人間の心理的側面を取り入れた期待形成を考察して分析する研究など、経済学には新たな展開を進めつつある研究分野が多くあります。これらの最新研究の動向を踏まえて、経済学研究科は、問題解決能力を身につけた人材を社会に送り出すことを責務と考え、すでに経済社会で活躍している社会人への教育も含め、経済環境の変化を見据えたより本質的な能力開発の機会を提供する教育機関となるべく、より優れた教育環境の整備に努めています。本研究科経済学専攻は、経済社会に貢献できる高度な専門能力を備えた経済学研究者および社会人を育成するという大学院教育に課せられた社会的要請に応えることを目指しています。

▶ 修了後の主な進路

- 2006年 日本学術振興会PD
- 2008年 GEM客員所員2名(内1名は現在東洋大学)、自営
- 2009年 首都大学東京博士後期課程、研究員
- 2010年 GEM客員所員
- 2011年 中国中央テレビビジネスチャンネル、労働組合電機連合
- 2012年 ㈱銭高組、㈱SJI、水戸証券㈱
- 2013年 ㈱クロスキャット
- 2014年 ㈱レイヤーズ・コンサルティング、㈱日比谷コンピュータシステム
- 2015年 ㈱ラディアントソリューションズ、EMCジャパン、日本アイビーエム・ソリューション・サービス㈱、㈱常陽銀行
- 2016年 自動車関連会社、上海政府系機関
- 2017年 アルプス システム インテグレーション㈱、安永(EY) (会計関連会社)
- 2018年 ㈱NTTデータ・チャイナ・アウトソーシング、KDDI㈱、三井物産㈱
- 2019年 楽天㈱、㈱Noz、警視庁、日本大学
- 2021年 ティービーケー・システムズ㈱
- 2022年 方正㈱
- 2023年 ㈱ビックカメラ、イオンマーケット㈱、JPモルガン、淑徳大学
- 2024年 ニッカ電測㈱、マークライنز㈱、㈱ヒロケイ

▶ 大学院生の研究テーマ

■博士後期課程

- Essays on Statistical Analysis in Revenue Management and Selecting Populations for Dependent Data (レベニューマネジメントにおける統計的分析および従属データの母集団選択問題の研究)
- CSR活動の経済分析
—環境パフォーマンスの評価・要因分析を中心として—
- 銀行業の破綻リスクに関する実証的研究—中国の銀行を中心として—
- 新興国のクロスボーダー取引における通貨の選択—人民元国際化への含意—
- 対内直接投資と日本企業の生産性・事業所別にみた間接効果の分析

■博士前期課程

- 同時方程式トビットモデルを用いた為替介入効果の検証
- 人民元改革の考察—通貨バスケット制の実証分析—
- 民営化と混合寡占の経済分析
- 従業員発明者に対する最適報奨契約の設計
- 中国の物価と為替レートのパスルー
—輸入、生産者、消費者物価による検証—
- 中国の医療訴訟の経済分析
- 教育NPO創設時における活動資金取得の多段階ゲームモデル分析
- 中小企業の取引関係について
—「取引費用の経済学」の観点からの実地調査—
- 直接投資と企業の利益率、生産性、中国電子情報産業の実証分析
- 日本の金融政策イベントが株式市場の高頻度リターンとボラティリティに及ぼす影響
- 借入制約、法人税およびミスアロケーション
- 証券市場のマルチファクターモデルにおける長期記憶性の影響
- インターネットの発展が二国間貿易に与える影響について—先進国と発展途上国の視点から見—
- Privacy and Click probability investment in platform competition
- 新幹線が沿線地域のイノベーションに及ぼす影響について
- 中国銀行業の信用リスクに関する分析
- 外資企業の参入と日本の製造業の生産性(都道府県別、事業所別、産業内スピルオーバーの分析)
- 中国における太陽光発電政策の効果検証
- 半導体産業におけるクラスター政策と企業のイノベーション創出への効果
日本、中国、台湾の国際比較分析
- デジタルビジネスがサービス貿易に与える影響

専門性をより高める 「専修コース」

■「研究者養成コース」と「専修コース」

既存の「研究者養成コース」に加えて、「専修コース」を2008年度より導入しました。従来から、学習院大学経済学研究科では社会人入試を行い、博士前期課程修了後は社会で活躍することを想定する教育を行っています。「専修コース」は、これを拡大し、社会人以外の入学者にも広く適用することを目指しています。「専修コース」修了後は、2年間の教育で得た知識を生かし、公務員としてあるいは実業界で働くことが期待されています。コース修了後、社会で活躍する人を対象としているので、「専修コース」から博士後期課程への内部進学はできません。内部進学を希望する場合は、「研究者養成コース」にコース変更する必要があります。入学後のコース変更の機会が設けられています。

■リサーチ・ペーパー

「専修コース」では修士論文に代わるものとして、「特定の課題についての研究の成果(リサーチ・ペーパー)」を課します。リサーチ・ペーパーには以下のような具体例が挙げられます。

サーベイ論文	内外の先行研究を取りまとめ、対象となるテーマについて、より広い視点から理解を深める。
実証分析	先行研究の手法を応用し、対象となる時期や、対象となる変数やデータを変えることで、従来の結果の妥当性を検証したり、拡張したりする。
フィールドワーク	先行研究に基づき、それに関連する事例を調べ、ケース・スタディーとして考察を加える。

多様な入試方式

▶ 経済学研究科博士前期課程の受験について

本研究科の受験に関しては、1)一般受験、2)社会人入試、3)学内推薦、4)学内推薦(早期卒業)、5)卒業生向け推薦入試の5種類があります。募集定員としては経済学研究科の博士前期課程で約10名です。

一般受験、社会人入試、学内推薦、卒業生向け推薦入試には2回受験機会(A日程9月、B日程2月)があります。

1)一般受験について

一般受験には、筆記試験方式とERE方式の2種類があります。両方式とも9月と2月に行われます。どちらの方式でも、学力試験である筆記試験またはERE試験に加えて、面接試験、出身大学の学業成績および研究計画書によって選考が行われます。

ERE方式では、EREミクロ・マクロでのB+以上を取っていることを前提に、筆記試験が免除されます。詳細はアドミッションセンターに問い合わせください。

2)社会人入試について

社会人が自らの専門的能力を向上させるために勉学しようとする場合に応え、学習院大学経済学研究科では社会人のための特別な入試を行っています。これによって入学した人は、修士号を取得後、社会に再び戻り、新たに得た知識を使って活躍されることが期待されています。社会人入試で入学した場合、入学時には専修コースに所属します(なお、課程修了までに、コース変更の機会が2回設けられています)。

3)学内推薦について

学習院大学経済学部から経済学研究科に進学しようとするときは、筆記試験が免除されます。これを学内推薦といいます。また学習院大学国際社会科学部から推薦で経済学研究科に進学することもできます。この場合は英語の試験が免除されます。出願、試験、合格発表日程は9月頃(A日程)と2月(B日程)があります。

4)学内推薦(早期卒業)について

経済学科における早期卒業は大学院進学(他大学大学院も含む)が条件です。特に、学習院大学経済学部で早期卒業見込み者が経済学研究科を受験した場合には、筆記試験は免除され、面接により、9月(A日程)と2月(B日程)に試験が行われます。この制度を利用すれば5年間で学士と修士の取得が可能です。実際の出願に当たっては、詳細をアドミッションセンターに問い合わせください。なお、早期卒業できない場合には、入学も取り消されます。

5)卒業生向け推薦入試について

書類審査および面接で可否を決定します。いったん卒業してから、大学院に入りたいと考えた時に、学習院大学経済学部(経済学科/経営学科)に在籍時に一定以上の成績を修めていれば、出願することができます。

▶ 設置科目

博士前期課程授業科目

経済数学特論Ⅰ	産業組織論特殊研究
経済数学特論Ⅱ	産業組織論演習
マクロ経済学特論Ⅰ	日本経済論特殊研究
マクロ経済学特論Ⅱ	日本経済論演習
ミクロ経済学特論Ⅰ	規制の経済学特殊研究
ミクロ経済学特論Ⅱ	規制の経済学演習
ゲーム理論特論Ⅰ	数量経済分析特殊研究
ゲーム理論特論Ⅱ	数量経済分析演習
計量経済学特論Ⅰ	数理計画論特殊研究
計量経済学特論Ⅱ	数理計画論演習
国際経済学特論Ⅰ	財政学特殊研究
国際経済学特論Ⅱ	財政学演習
日本経済史特論Ⅰ	金融論特殊研究
日本経済史特論Ⅱ	金融論演習
経済政策特論Ⅰ	国際金融論特殊研究
経済政策特論Ⅱ	国際金融論演習
産業組織論特論Ⅰ	統計学特殊研究
産業組織論特論Ⅱ	統計学演習
日本経済論特論Ⅰ	空間経済学特殊研究
日本経済論特論Ⅱ	空間経済学演習
財政学特論Ⅰ	開発経済学特殊研究
財政学特論Ⅱ	開発経済学演習
統計学特論Ⅰ	労働経済学特殊研究
統計学特論Ⅱ	労働経済学演習
労働経済学特論Ⅰ	社会保障論特殊研究
労働経済学特論Ⅱ	社会保障論演習
社会保障論特論Ⅰ	公共経済学特殊研究
社会保障論特論Ⅱ	公共経済学演習
公共経済学特論Ⅰ	ミクロ経済学特殊研究
公共経済学特論Ⅱ	ミクロ経済学演習
現代金融論特論Ⅰ	景気循環論特殊研究
現代金融論特論Ⅱ	景気循環論演習
一般経済史特論Ⅰ	経済成長論特殊研究
一般経済史特論Ⅱ	経済成長論演習
開発経済学特論Ⅰ	理論経済学特殊研究
開発経済学特論Ⅱ	理論経済学演習
ゲーム理論特殊研究	応用経済学特殊研究
ゲーム理論演習	応用経済学演習
計量経済学特殊研究	時系列分析特殊研究
計量経済学演習	時系列分析演習
国際貿易論特殊研究	データサイエンス特殊研究
国際貿易論演習	データサイエンス演習
日本経済史特殊研究	経済学研究科特殊研究Ⅰ
日本経済史演習	経済学研究科特殊研究Ⅱ
西洋経済史特殊研究	経済学研究科特殊研究Ⅲ
西洋経済史演習	経済学研究科特殊研究Ⅳ
経済政策特殊研究	国際金融論特論Ⅰ
経済政策演習	国際金融論特論Ⅱ

博士後期課程授業科目

経済数学特論Ⅰ	経済政策特殊研究
経済数学特論Ⅱ	経済政策演習
マクロ経済学特論Ⅰ	産業組織論特殊研究
マクロ経済学特論Ⅱ	産業組織論演習
ミクロ経済学特論Ⅰ	日本経済論特殊研究
ミクロ経済学特論Ⅱ	日本経済論演習
ゲーム理論特論Ⅰ	規制の経済学特殊研究
ゲーム理論特論Ⅱ	規制の経済学演習
計量経済学特論Ⅰ	数量経済分析特殊研究
計量経済学特論Ⅱ	数量経済分析演習
国際経済学特論Ⅰ	数理計画論特殊研究
国際経済学特論Ⅱ	数理計画論演習
日本経済史特論Ⅰ	財政学特殊研究
日本経済史特論Ⅱ	財政学演習
経済政策特論Ⅰ	金融論特殊研究
経済政策特論Ⅱ	金融論演習
産業組織論特論Ⅰ	国際金融論特殊研究
産業組織論特論Ⅱ	国際金融論演習
日本経済論特論Ⅰ	統計学特殊研究
日本経済論特論Ⅱ	統計学演習
財政学特論Ⅰ	空間経済学特殊研究
財政学特論Ⅱ	空間経済学演習
統計学特論Ⅰ	開発経済学特殊研究
統計学特論Ⅱ	開発経済学演習
労働経済学特論Ⅰ	労働経済学特殊研究
労働経済学特論Ⅱ	労働経済学演習
社会保障論特論Ⅰ	社会保障論特殊研究
社会保障論特論Ⅱ	社会保障論演習
公共経済学特論Ⅰ	公共経済学特殊研究
公共経済学特論Ⅱ	公共経済学演習
現代金融論特論Ⅰ	ミクロ経済学特殊研究
現代金融論特論Ⅱ	ミクロ経済学演習
一般経済史特論Ⅰ	景気循環論特殊研究
一般経済史特論Ⅱ	景気循環論演習
開発経済学特論Ⅰ	経済成長論特殊研究
開発経済学特論Ⅱ	経済成長論演習
ゲーム理論特殊研究	理論経済学特殊研究
ゲーム理論演習	理論経済学演習
計量経済学特殊研究	応用経済学特殊研究
計量経済学演習	応用経済学演習
国際貿易論特殊研究	時系列分析特殊研究
国際貿易論演習	時系列分析演習
日本経済史特殊研究	データサイエンス特殊研究
日本経済史演習	データサイエンス演習
西洋経済史特殊研究	国際金融論特論Ⅰ
西洋経済史演習	国際金融論特論Ⅱ

赤司 健太郎 教授

計量経済学

■研究テーマ

パネルデータ分析、特に動学的パネル、同時方程式モデル、質的変量モデルの理論と応用を研究しています。

計量経済学の発祥の理念は“Theory and Measurement”にあると云われます。大学院ではより精緻な理論を学べると同時に、現実経済への説得的な計測分析が期待されますが、こうした専門性を高められるよう指導に努めたいと思います。



五十嵐 岳 教授

統計学

■研究テーマ

ノンパラメトリック推定という、弱い仮定の下でも機能する推定手法に関する研究を行っています。ノンパラメトリックな確率密度推定の1つであるカーネル密度推定では、確率密度の台の境界（確率分布の端）で偏り（バイアス）があるという境界問題が知られていて、その対処法の1つに非対称カーネル密度推定があります。現在はその非対称カーネル密度推定を応用して、確率密度の比の推定と、確率密度比推定を利用した仮説検定に関する研究を行っています。



石井 晋 教授

日本経済史(近現代)

■研究テーマ

経済と社会の歴史、産業と技術の歴史、政策とインフラ形成の歴史など。

経済システムは、複雑な社会構造の中に埋め込まれているが、同時にさわめて自律的に、それ自体の論理で作用している。人類の歴史は、経済システムの作用を時に抑圧し、時に励起させながら、展開してきた。歴史をたどることにより、一見自明に見える経済システムの作用とはいったい何であるのか、常に問い直しながら研究しています。



神戸 伸輔 教授

ミクロ経済学、ゲーム理論、
契約および交渉の経済分析

■研究テーマ

ゲーム理論を使った経済現象のミクロ的分析が研究の中心。中でも、契約の理論と交渉の理論に注目している。契約の理論では、限られた資源と情報の中でどのような組織を作ったら最適かということ、情報の経済学の観点から分析している。交渉の理論は、ゲーム理論の重要なテーマのひとつで、経済学の観点からは分配に関する分析という意味がある。ゲーム理論の手法で定式化することで、交渉で何が起るかを理論的に研究している。



清水 順子 教授

国際金融論、外国為替

■研究テーマ

(1) アジアの通貨制度、域内金融協力と共通通貨バスケット構想、均衡為替相場の推計 (2) 日本企業の貿易建値通貨の選択と為替リスク管理 (3) 産業別の実効為替相場の計算、為替と株価の関係 (4) その他為替相場に関する実証分析。



清水 大昌 教授

応用ミクロ経済学、産業組織、競争政策、
空間経済学

■研究テーマ

産業組織・ゲーム理論的手法を用いた均衡分析や厚生分析に取り組んでいる。現在は、(1) 寡占産業における企業の立地と供給戦略の相互関係、特に立地が企業の参入タイミングに与える影響について (2) 製品差別化された逆需要関数を使い、製品差別化の度合いが企業の逐次合併を行うインセンティブに与える影響について (3) 混合寡占において部分民営化の程度が (2) の結果に与える影響について、それぞれ分析を行っている。



鈴木 亘 教授

社会保障論、医療経済学、福祉の経済学

■研究テーマ

医療保険・介護保険改革の政策評価、レセプトデータ・検診データの解析、喫煙・肥満の経済学、年金数理シミュレーション、医療・介護財政シミュレーション、ホームレス・生活保護受給者の実態調査、保育所改革の実証分析、教育改革の実証分析、仮想市場法による福祉政策評価、マイクロシミュレーション、GIS データによる空間計量経済分析、貧困地域再生のフィールドワーク



滝澤 美帆 教授

マクロ経済学、データ分析

■研究テーマ

マクロ・産業・ミクロ（企業や事業所）の各レベルでデータを構築し、生産性計測及び生産性の決定要因に関する実証分析を行っている。生産性を正確に計測することと共に、資源配分、AI や ICT といった新技術、企業の働き方に関する施策や従業員満足等と生産性に関する研究に取り組んでいる。また、労働経済学者や国際経済学者とも共同研究を行い、最低賃金の引上げといった政策や直接投資など企業の活動が企業ダイナミクスに与える影響の多面的な理解を深めることも研究目的としている。



西村 淳一 教授

産業組織論、イノベーションの経済学

■研究テーマ

ミクロ経済学の理論を応用して実証分析に取り組んでいる。イノベーションの経済分析に関心があり、どのような要因がイノベーションを促進しているのか、データ分析に基づく提言を行っている。現在は、(1) 国や地方自治体におけるマルチレベルの研究開発支援策に関する政策評価、(2) 産学官連携とその効果、(3) 高等教育（研究室教育）と博士研究者の育成、(4) 医薬品の経済効果、などを主なテーマとして研究に取り組んでいる。



深井 大洋 准教授

労働経済学、応用ミクロ計量経済学

■研究テーマ

これまでは育児休業制度や保育施設の整備といった家族政策の政策効果について日本の政府統計などのミクロデータを用いた実証分析を中心に研究を進めてきました。現在は、これまでの研究テーマに加えて家族形成と労働供給や、教育や社会保障分野における労働市場について関心を持って研究を進めています。



福地 純一郎 教授



統計学、計量経済学

■研究テーマ

統計学の方法論と応用について研究している。現在は、(1) 連続型トリートメントの因果推論、(2) リサンプリング法（ブートストラップ、サブサンプリング）、(3) 合成コントロール法による因果推論、などを主なテーマとして研究を行っている。

細野 薫 教授

研究科委員長



マクロ経済学、金融論

■研究テーマ

異質な経済主体の存在する動学的一般均衡モデルに基づく理論・実証研究と、自然実験を利用した実証研究を通じて、主に、制度変更と資本市場の不完全性が企業ダイナミクスと資源配分の効率性に及ぼす影響について研究している。具体的には (1) 不確実性と資源配分、(2) 無形資産投資と企業の資金調達・現金保有、(3) 中小企業政策・税制の企業ダイナミクスと資源配分への影響、(4) バブルと設備投資・資源配分、(5) 金融ショックと輸出・海外直接投資など。

眞嶋 史叙 教授



グローバル経済史、比較消費文化論

■研究テーマ

数量的実証研究と文化史や文化人類学的な問題意識を融合したグローバル経済史研究。イギリスとその旧植民地を中心に、世界各地で進展してきた市場経済化とグローバル化の現象をミクロレベルの行動原理から捉え直し、経済発展の地理的かつ歴史的な側面から研究している。具体的には (1) 近世から現代までのイギリス繊維産業とファッションの歴史研究、(2) マレーシア島嶼部における内陸交易路の発展に関する研究、(3) 第2次世界大戦期シンガポールの経済発展に関する研究など。

増田 一八 准教授



開発経済学、教育経済学、医療経済学

■研究テーマ

これまでは各個人による人的資本（主に教育と健康）の形成がどのような要因で決まっているか、及び、その蓄積によって、どのような結果をその個人や社会にもたらすのか、という問いに関心を持って研究を進めてきました。

現在は、主に戦後期の日本を文脈とした以下のプロジェクトが進行中です。

1. 個人に対する中等教育の普及が、その健康や生存期間にもたらす長期的効果の探索
2. 慢性的な感染症の治療に対する公費負担の導入が、医療市場、及び、個人の人的資本にもたらす効果の研究

三井 清 教授



公共経済学、財政学

■研究テーマ

(1) 生産関数を用いた分野別社会資本の地域間整備に関する政策評価、(2) 地価関数と税収関数を用いた生活基盤型を含む分野別社会資本の地域間整備に関する政策評価、(3) 社会資本整備に関する民営化手法（PFIやPPPなど）の政策評価、(4) 地域間財政調整（地方交付税など）の政策評価、(5) 需要関数の積分可能性と（Slutsky 代替項を用いた死荷重の近似式を用いた）厚生評価。

宮川 努 教授



マクロ経済学、国際マクロ経済学、日本経済論

■研究テーマ

生産性の要因分析および国際比較、日本の景気循環分析

最近では日本の無形資産投資額を計測し、それが企業や経済全体に与える影響を分析しています。

※宮川教授は2026年度入学生の指導は担当しない。

椋 寛 教授



国際経済学(国際貿易)

■研究テーマ

「WTOと自由貿易協定」、「企業の経済活動のグローバル化」についての理論的・実証的研究。国際経済学を学びつつ、学んだ手法を用いて現実の国際問題を分析し、政策議論を行うことが主なテーマ。「商品貿易の分析」から、「海外直接投資」、「国家間の通商摩擦」や「地域経済統合の進展」など、国際経済に関わるトピックを幅広く扱う。具体的な近年の研究テーマとして、「耐久財と中古品に対する貿易政策の理論分析」や「FTAの価格効果の分析」が挙げられる。

村瀬 英彰 教授



経済政策論、金融論、マクロ経済学、日本経済論

■研究テーマ

(1) 民主主義体制の下で採用される経済政策の効率性および非効率性、(2) 非民主主義体制の下で採用される経済政策の効率性および非効率性、(3) 政治体制の内生的選択の可能性とその可能性がもたらす経済政策の採用への影響、(4) 金融システムおよび企業統治システムの差異が各国のマクロ経済パフォーマンスに与える効果、(5) ステークホルダーが戦略的に行動する環境下での企業価値および不動産価値の評価法

和光 純 教授



ゲーム理論、数理経済学

■研究テーマ

ゲーム理論による市場経済分析。市場均衡の性質をゲーム理論的観点から分析する。経済主体間の取引交渉の過程が導く結果を協力ゲーム理論を適応して分析する。また、研修医マッチングを実例とするジョブ・マッチングの研究も行っている。

経営学研究科

Graduate School of Management

経営学専攻

授与する学位

博士前期課程：修士（経営学）

博士後期課程：博士（経営学）



▶ 経営学専攻の理念・目的

社会環境の大きな変化に対応して、企業はその組織や機能・活動など、全ての面においてイノベーションを常に行っていく必要があります。このような環境変化を先取りするための企業経営のあり方を究明するためには、組織人の自己実現を含めたインセンティブのようなミクロ問題から、社会貢献のような企業にとってのマクロ課題まで、多層的な理解と分析の手段が必要となります。経営学研究科では、このような課題に応えるために、理論と現実との相互浸透を強く意識しつつ、従来の経営学研究の枠組みを超えて行う「学際化」、日本の経営を世界的視点から捉え、かつ人材や研究成果の国際交流を目指す「国際化」、そして情報通信技術面での動向を経営学研究に結びつける「情報化」の3つを研究・教育の柱として、次代を担う経営学の研究者および高度専門職業人を養成することを教育上の目標としています。

▶ 経営学研究科の特長

経営学研究科の特色を一言で言えば、真に少人数の環境において教員の緊密な指導を受け、専門性を深めることができるということです。本研究科は、マーケティング系、経営組織・管理系、経営戦略系、会計・財務系、経営科学・情報系、経営史系、複合・国際系という経営学の諸分野をバランス良く、かつ高度な水準で備えています。この優位性を生かして、専門性を深めるだけでなく、関連分野への知識を得るような仕掛けを作っています。そして、恵まれた大学院生専用の研究室環境が実現しており、教員からは入学初年度より密接な個別研究指導を受けることとなります。職業訓練を意識した大規模校における環境に比べ、学問の基礎を尊重し、大学院生のイニシアティブによる研究を可能とする徹底した少人数教育の思想を貫いています。

▶ 経営学研究科の多様な研究分野

経営学研究科では、次のような代表的な履修・研究分野を用意しています。経営学は多様な隣接科学を応用する学際的な学問であり、特定分野の専門知識を深めつつ研究を進めることが期待されますが、同時に関連分野について学び、複合的に思考力を身につけていく利益もあります。本研究科は、教員による緊密かつ柔軟な個別指導をとりわけ重視しており、従来の学問の枠組みに縛られない研究テーマ設定も可能となっています。膨大な学問の蓄積について学びつつ、深くイノベティブな研究活動への橋渡しをすることが、経営学研究科のカリキュラムの共通目標となっています。

マーケティング系

マーケティング系では、「売れる」そして「売れ続ける」仕組みづくりとしてのマーケティングの様々な現場について、主として「消費者行動についての理論」、「データ分析」、「マーケティング戦略」という三つの側面から迫っていきます。

経営組織・管理系

経営組織・管理系では、企業目標の達成に向けた効果的な組織マネジメントのあり方について、主として「組織構造」、「人材マネジメント施策」、「従業員意識・行動」の3側面から検討をしていきます。

経営戦略系

製品・サービスのイノベーションおよび競争戦略・ビジネスモデルや、起業メカニズム、それらに伴う企業組織管理等について研究します。経営戦略など主要な理論ツールと、実証に必要な計量分析手法を身につけ、高度な応用ができるようになります。

会計・財務系

会計・財務系では、企業会計の情報開示や企業経営について、「財務報告に関する理論研究」、「コーポレート・ガバナンスの経済分析と国際比較」、「会計・税務に関する実証研究および事例研究」等の研究を行います。

経営科学・情報系

(1) 数量・統計分析による意思決定支援、(2) モデル分析による企業の意思決定支援、(3) 生産管理、サプライチェーンマネジメント、ビジネス・プロセスの統合的計画・評価、(4) インダストリー4.0のための情報システム構築と人工知能化、(5) ビジネス・プロセスの見える化、等のテーマで研究し、実践的なスキル養成を行います。

経営史系

経営史系では、日本の経営の内実や外国企業の発展を、各国固有の歴史的背景を踏まえた特徴と欧米先進工業国の歴史的経験との比較を通じて理解することを目標としています。

複合・国際系

新興国・途上国も含めた企業の国際的活動について研究するためには、進出先国での販売方法、バリューチェーン各段階の組織管理、全世界的な市場戦略、資金調達、サプライチェーン管理など様々な分析視角を必要とします。このような専門知識と、横断的かつ実践的な分析力を身につけた国際的な専門職業人を養成します。

▶ 経営学研究科・博士前期課程の入試について

経営学研究科の博士前期課程には、学内推薦のほか、広く学外の方に一般入試および社会人入試の2種類が用意されており、それぞれA日程(9月)とB日程(2月)の2回の受験機会があります。専門科目の筆記試験は1科目で、マーケティング、会計学、経営科学、経営史、経営学(経営組織・管理系)、経営学(企業戦略・企業経済系)の6科目中から1つを選択することができます。このほかに外国語試験と面接試験があります。

▶ 修了後の主な進路(最近5年間)

■博士前期課程

(株)日立コンサルティング、DHLサプライチェーン(株)、デンソー(広州)、アサツーディ・ケイ、アビームコンサルティング(株)、(株)シーネット、(株)ニトリ、みずほ銀行、CTRP(上海)、(株)大和システムクリエイト、新宿ワシントンホテル、信金中央金庫、華夏楽遊、日本アイ・ピー・エム システムズ・エンジニアリング(株)、(株)ブルーオーシャン、(株)日立システムズ、知日塾、網易娛樂(株)、ステート・ストリート信託銀行(株)、KPMG税理士法人、アビーム・コンサルティング、富士通(株)、McKEN Group、(株)丸井グループ、日本アイ・ピー・エムデジタルサービス(株)、リファインホールディングス(株)

■博士後期課程

青山学院大学大学院会計プロフェッション研究科、あずさ監査法人、東京経済大学経営学部、東洋学園大学現代経営学部

▶ 大学院生の研究テーマ(例)

- 消費者行動研究における情報過負担の発生要因に関する探索的研究
- Impact of Heterogeneity of Market and Absorptive Capacity of the Firm on Reverse Innovation
- Analysis of strategic patterns and performance in supply chain management
- オンライン・ブランド・コミュニティにおけるエンゲージメント概念に関する一考察
- ブランド・パーソナリティに関する一考察
- 消費者とブランドの関係性規範に関する一考察
- 研究開発志向型中小企業のオープン・イノベーションに関する研究：アウトラウンド型オープン・イノベーションと知的財産管理を中心に
- 女性モバイルゲームユーザーに関する一考察
- コンテンツ業界におけるユーザー・イノベーションに関する研究
- オムニチャネル戦略に求められる物流管理システムの要件定義
- マイクロインフルエンサーの類似性効果に関する研究
- これからの寺院経営について―首都圏における都市型寺院の未来像―
- 中小企業におけるオープン・イノベーションと企業業績の関係に関する研究
- ブランド構築組織に関する一考察
- ロイヤルティプログラムの成果への影響要因に関する一考察
- イベントへの消費者の参加意欲に関する研究
- 感覚マーケティングにおけるパッケージデザインに関する研究
- ユーザー・イノベーションがゲームおよびプラットフォームに与える経済効果：Dota2およびSteamの事例
- 口コミが顧客満足と企業ロイヤリティに及ぼす影響について
- ハイ・インボルブメントHRMは、従業員の創造的活動を促進するか―ポジティブ効果およびネガティブ効果を考慮して―
- 概念フレームワークにおける検証可能性の意義
- 製品訴求メッセージと製品価格における「ラウンド価格効果」に関する検討―制御焦点理論に基づいて―

- 原産国イメージが消費者の購買意欲に及ぼす影響―中国消費者を対象に―
- 越境ECで知覚リスクがオンライン購買意欲に及ぼす影響―中国人消費者を対象に―
- 口コミが消費者の再購買行動に及ぼす影響
- 競合企業との協調を通じた組織間学習―任天堂とテンセント(騰訊控股)の提携を中心に―
- サバイバル分析を用いたオンラインゲームの顧客維持要因の分析
- 中途採用者のオンボーディングにかんする探索的研究―ワークモチベーションに着目して―
- XGBoostを用いた代替燃料自動車市場における売上要因分析
- 消費者のライフスタイルがインフルエンサーの信頼性と購入意図に及ぼす影響
- 文化的知性が心理的ウェルビーイングが役割パフォーマンスに及ぼす影響
- COVID-19パンデミック拡大初期における世界的自動車製造業の株価変動クラスター分析
- 消費者のカテゴリー知識構造に関する実証分析
- 市場志向が企業業績に及ぼす影響に関する研究
- リサイクル素材を使った新製品の導入がブランド態度に及ぼす影響に関する研究
- 中国人消費者の知覚リスクの変化が越境EC利用意向に与える影響―日本商品を対象に―
- 物語広告を活用した広告戦略に関する研究
- 企業会計における実現概念と法人税法第22条4項における実現の検証
- 消費者コミュニティが企業のユーザー・イノベーションに与える影響
- 企業のエシカルな取り組みが消費者の購買行動に与える影響
- 「戦後復興期の八幡製鉄所―業績手当からみた我が国の賃金体系の特徴」―集団間の競争について―
- プラットフォームはいかに成長するのか―Amazonの事例のシステム思考による分析―
- 企業の社会的責任活動がイノベーションに及ぼす影響について
- コ・ブランディングが購買意図に与える影響に関する研究
- サブスクリプション・サービスにおける価格感度の法則性と顧客満足構造との関係
- 連結財務諸表におけるのれんのシナジー効果
- 夫婦の共同意思決定に関する一考察―知育玩具を事例として―
- 会計制度における無形資産の認識範囲―人的資源の検討―
- サッカークラブの持続可能性要因の探求―機械学習を用いた分析とフィールドワークによる包括的アプローチ―
- 脱・物質主義説の再検討―有形財のシェアリング・エコノミーに着目して―
- 税効果会計の利益認識―繰延税金資産の当初認識と再評価―

【相互履修制度】

上智大学経済学研究科 武蔵大学経済学研究科
 成城大学経済学研究科 成蹊大学経済学研究科
 成蹊大学経営学研究科

▶ 設置科目

博士前期課程授業科目

経営科学特殊研究Ⅰ
経営科学演習
経営科学特殊研究Ⅱ
経営データ分析特殊研究Ⅰ
経営データ分析特殊研究Ⅱ
経営データ分析演習
経営意思決定特殊研究Ⅰ
経営意思決定特殊研究Ⅱ
経営意思決定演習
経営統計特殊研究Ⅰ
経営統計特殊研究Ⅱ
マーケティングサイエンス特殊研究Ⅰ
マーケティングサイエンス演習
マーケティングサイエンス特殊研究Ⅱ
マーケティング・リサーチ特殊研究
経営学特殊研究Ⅰ
経営学特殊研究Ⅱ
経営学特殊研究Ⅲ
経営学特殊研究Ⅳ
経営学演習Ⅰ
経営学演習Ⅱ
戦略行動特殊研究Ⅰ
戦略行動特殊研究Ⅱ
戦略行動演習
イノベーション特殊研究Ⅰ
イノベーション特殊研究Ⅱ
イノベーション演習
経営組織論特殊研究Ⅰ
経営組織論特殊研究Ⅱ
経営組織論演習
組織行動論特殊研究
組織行動論演習
企業論特殊研究Ⅰ
企業論演習Ⅰ
企業論特殊研究Ⅱ
企業論演習Ⅱ
経営戦略特殊研究Ⅰ
経営戦略特殊研究Ⅱ
経営戦略演習
産業発展論特殊研究Ⅰ
産業発展論特殊研究Ⅱ
産業発展論演習
国際経営特殊研究Ⅰ
国際経営特殊研究Ⅱ
交通経営論特殊研究
交通経営論演習

経営労務論特殊研究
経営労務論演習
経営財務論特殊研究Ⅰ
経営財務論特殊研究Ⅱ
経営財務論演習
マーケティング特殊研究Ⅰ
マーケティング特殊研究Ⅱ
マーケティング特殊研究Ⅲ
マーケティング演習
消費者行動特殊研究Ⅰ
消費者行動特殊研究Ⅱ
消費者行動演習
会計学特殊研究
会計学演習
原価会計特殊研究
原価会計演習
会計監査論特殊研究Ⅰ
会計監査論特殊研究Ⅱ
会計監査論演習
管理会計特殊研究Ⅰ
管理会計特殊研究Ⅱ
管理会計演習
日本経営史特殊研究Ⅰ
日本経営史特殊研究Ⅱ
日本経営史演習
経営史特殊研究
経営史演習
経営学研究科特殊研究Ⅰ
経営学研究科特殊研究Ⅱ
経営学研究科特殊研究Ⅲ
経営学研究科特殊研究Ⅳ
経営学文献講読Ⅰ
経営学文献講読Ⅱ
経営学文献講読Ⅲ
経営学文献講読Ⅳ
ケース分析演習Ⅰ
ケース分析演習Ⅱ
ケース分析演習Ⅲ
ケース分析演習Ⅳ
データ解析演習Ⅰ
データ解析演習Ⅱ
データ解析演習Ⅲ
データ解析演習Ⅳ
研究指導Ⅰ
研究指導Ⅱ

博士後期課程授業科目

経営科学特殊研究Ⅰ
経営科学演習
経営科学特殊研究Ⅱ
経営データ分析特殊研究Ⅰ
経営データ分析特殊研究Ⅱ
経営データ分析演習
経営意思決定特殊研究Ⅰ
経営意思決定特殊研究Ⅱ
経営意思決定演習
経営統計特殊研究Ⅰ
経営統計特殊研究Ⅱ
マーケティングサイエンス特殊研究Ⅰ
マーケティングサイエンス演習
マーケティングサイエンス特殊研究Ⅱ
マーケティング・リサーチ特殊研究
経営学特殊研究Ⅰ
経営学特殊研究Ⅱ
経営学特殊研究Ⅲ
経営学特殊研究Ⅳ
経営学演習Ⅰ
経営学演習Ⅱ
戦略行動特殊研究Ⅰ
戦略行動特殊研究Ⅱ
戦略行動演習
イノベーション特殊研究Ⅰ
イノベーション特殊研究Ⅱ
イノベーション演習
経営組織論特殊研究Ⅰ
経営組織論特殊研究Ⅱ
経営組織論演習
組織行動論特殊研究
組織行動論演習
企業論特殊研究Ⅰ
企業論演習Ⅰ
企業論特殊研究Ⅱ
企業論演習Ⅱ
経営戦略特殊研究Ⅰ
経営戦略特殊研究Ⅱ
経営戦略演習
産業発展論特殊研究Ⅰ
産業発展論特殊研究Ⅱ
産業発展論演習
国際経営特殊研究Ⅰ
国際経営特殊研究Ⅱ
交通経営論特殊研究

交通経営論演習
経営労務論特殊研究
経営労務論演習
経営財務論特殊研究Ⅰ
経営財務論特殊研究Ⅱ
経営財務論演習
マーケティング特殊研究Ⅰ
マーケティング特殊研究Ⅱ
マーケティング特殊研究Ⅲ
マーケティング演習
消費者行動特殊研究Ⅰ
消費者行動特殊研究Ⅱ
消費者行動演習
会計学特殊研究
会計学演習
原価会計特殊研究
原価会計演習
会計監査論特殊研究Ⅰ
会計監査論特殊研究Ⅱ
会計監査論演習
管理会計特殊研究Ⅰ
管理会計特殊研究Ⅱ
管理会計演習
日本経営史特殊研究Ⅰ
日本経営史特殊研究Ⅱ
日本経営史演習
経営史特殊研究
経営史演習
経営学研究科特殊研究Ⅰ
経営学研究科特殊研究Ⅱ
経営学研究科特殊研究Ⅲ
経営学研究科特殊研究Ⅳ
経営学文献講読Ⅰ
経営学文献講読Ⅱ
経営学文献講読Ⅲ
経営学文献講読Ⅳ
ケース分析演習Ⅰ
ケース分析演習Ⅱ
ケース分析演習Ⅲ
ケース分析演習Ⅳ
データ解析演習Ⅰ
データ解析演習Ⅱ
データ解析演習Ⅲ
データ解析演習Ⅳ

青木 幸弘 教授

マーケティング

(特に消費者行動分析およびブランド論)

■研究テーマ

消費者行動論。特に、消費者の購買意思決定プロセスに関する認知科学的な研究。具体的には、消費者の情報処理プロセスに対する関与や知識の効果に関する研究、消費者のブランド知識構造に関する研究などを行ってきた。最近では、多様化する女性の「ライフコース」(就学、就業、結婚、出産といったライフイベントでの選択の結果としての人生行路)と消費との関係についても、パネル調査のデータなどを使って研究している。



宇野 舞 特別客員教授

マーケティング戦略

■研究テーマ

マーケティング領域における企業研究を行っています。これまでは主として business-to-business 市場において顧客の声を適切に取り入れ、新製品開発の成功に貢献する営業・販売組織の特徴と行動についての実証研究に取り組んできました。最近、営業・販売担当者個人の活動や能力に注目した研究や、緑茶のサプライチェーン全体(原料生産者、加工業者、卸売業者、小売業者)を対象とした研究に着手しています。



金田 直之 教授

会計学、税金と企業経営、
会計に関する実証研究

■研究テーマ

1) 組織再編やM&Aをめぐる経営手法に関する研究: MBOなど資本市場に関係する手法、企業再生、アメルバ経営など。2) 税制と企業経営をめぐる研究: 企業の税務戦略およびプランニングアプローチや諸国との比較による制度論。税制の変更による節税行動や現金保有などに関する実証研究。3) 会計に関する実証研究: 会計情報が市場や企業経営者に与えている影響についての研究。利益調整やアナリスト予想などを含む。



萱場 豊 教授

行動経済学、応用計量経済学

■研究テーマ

これまで、人々の様々な意思決定について、経済実験や現実のデータを通じて明らかにする実証研究に取り組んできました。最近、社会においてサステナビリティについての意識が高まっていることを踏まえて、自己の利益の追求だけでなく社会的インパクトも追求しようとする企業の活動や、社会的インパクトのある活動に取り組む市民の行動や動機に関心があり、それに関連した研究(例として、社会的インパクトのある事業へのクラウドファンディングに参加する動機)に着手している。



河合 亜矢子 教授

経営工学、経営情報学、生産システム

■研究テーマ

私の研究の目指すところは、持続可能なサプライチェーン・マネジメントの原理を追求することです。アプローチは、情報とモノの流れの相互作用に着目したモデルの数値分析やコンピュータあるいはゲーミングによるシミュレーションです。この研究結果の積み重ねが、今後私たちの社会が取り組んでいかなければならない、つながる工場、工場のスマート化を始めとする情報通信技術を用いた産業のネットワーク化・高度化には不可欠であるという使命感を持って、研究しています。



佐々木 康朗 教授

意思決定論、システム科学

■研究テーマ

「意思決定」にまつわる諸問題について、システム科学的なアプローチから、数理モデルやシミュレーション分析を用いて研究しています。最近の主なテーマとして、企業経営の諸場面における知識と意思決定の関係(例: 企業の競争環境の認識のしかたが戦略行動にどのように影響するか、企業内・企業間の知識共有や移転はどのように達成されるのか)を、ゲーム理論などを用いて研究しています。



白田 由香利 教授

経営情報学

■研究テーマ

AI(機械学習)分析による企業分析を行なっています。経営指標データで回帰分析し、結果をShapley値で解釈し、今後成長が期待できる企業の発見に役立てたり、株価や時価総額の時系列変化データをクラスターリングして、成長パターンを分類したりしています。対象分野は世界の自動車製造業から、インドのIT企業、Jリーグのサッカーチームまで広範囲です。



鈴木 健嗣 教授

コーポレート・ファイナンス、企業評価

■研究テーマ

企業価値を高めるためにいかなる意思決定を行うべきか。経営戦略の変更、投資先の選別、コーポレート・ガバナンス、株主構成、資金調達、ペイアウト、財務情報・非財務情報の開示といったコーポレート・ファイナンスに関する意思決定を中心に実証的に研究しています。最近、経営者の選出方法の違いや経営者交代のタイミングが企業価値や経営戦略の変更へ及ぼす影響を実証的な観点から研究しています。



武石 彰 教授

研究科委員長

経営戦略と組織、企業間関係

■研究テーマ

経営戦略と組織の関係について研究を行っています。特に、(1)事例研究に基づく、イノベーションを実現する組織過程と経営成果の関係の実証的分析、(2)自動車産業における取引データに基づく、競争優位に結びつく企業間関係のマネジメントの実証的研究、(3)歴史的データに基づく、音楽業界における技術革新、ビジネスシステム、コンテンツの関係の実証分析などを行っています。経営学が実務においてどのような意味で役に立ちうるのかという問題にも興味を持っています。



竹内 倫和 教授

組織行動論、組織心理学、キャリア論

■研究テーマ

企業の経営管理施策と従業員の態度・行動との関係について、組織行動論の視点から主として定量的な実証分析を用いて検討している。具体的には、(1)新卒採用者がいかに組織に適応していくのかを組織社会化論(organizational socialization)に基づいて検討する研究、(2)企業の人的資源管理施策と従業員態度・行動との関連について、戦略的人的資源管理論(strategic human resource management)に基づく研究を行っている。



竹原 有吾 教授

経営史

■研究テーマ

主に 16 ～ 19 世紀のベルリンのユダヤ教徒に、どのような企業家活動が見られたかを分析してきた。ユダヤ教徒は宗教的なマイノリティとして、ヨーロッパ社会で長い間、経済活動においてさまざまな制約を受けてきた。そのユダヤ教徒がどのようにマジョリティのキリスト教徒と協力してビジネスを展開するようになったのか。社会の歴史的な変化とビジネスの展開が、相互にどのように関係してきたかを明らかにしようと努めている。



松下 光司 教授

消費者行動論、マーケティング論

■研究テーマ

消費者の心理プロセスを、実験によって収集したデータを用いて研究しています。これまでは、企業のマーケティング・コミュニケーションやブランドを対象とした研究に取り組んできました。最近では、より多様なテーマに関心を広げています。たとえば、食に関わる消費者行動、サービス提供場面における他者の存在と消費者行動、マーケティングにおける新技術（たとえば、サービス・ロボット）と消費者行動などをテーマとしています。



本川 勝啓 教授

企業の情報開示、
会計学研究に用いる統計手法

■研究テーマ

企業の開示情報を対象とした実証研究をしています。具体的には、(1) 企業の従業員に関する情報開示行動とその影響、(2) キャッシュフロー情報の倒産予測への有用性、(3) コーポレートガバナンス情報と会計数値の関連性等についての研究課題に取り組んでいます。



守島 基博 教授

人材マネジメント論、人的資源管理論

■研究テーマ

研究テーマは大きく3つです。第1は人材と組織のマネジメントを通じて、企業がどう戦略目的を達成し、成果を上げるのかに関するもの。戦略的人材マネジメント論と呼ばれる領域です。第2が、企業が行う人材マネジメントが働く人に与える影響。モチベーション、公平性、エンゲージメント、成長等が主な関心となります。第3が働く人のニーズと企業ニーズの調整や葛藤解決です。労使関係論の一部ですが、今は、従業員の働き方やワークライフバランスなどにも拡張されています。



米山 茂美 教授

イノベーションの戦略と組織

■研究テーマ

イノベーションを有効に進めていくための戦略や組織のあり方について研究している。特に、技術の事業化、新市場の創造、競争優位の形成と維持に係る問題に関心がある。最近では、企業や大学等の外部組織との連携を通じたイノベーションへの取り組みや、海外現地法人で生まれた知識の日本の親会社への移転など、オープン、グローバルな文脈でのイノベーションのマネジメント、さらに知的財産を梃子にしたイノベーションからの収益化に関する研究に取り組んでいる。



和田 哲夫 教授

知的財産マネジメント、国際経営

■研究テーマ

知的財産権の取得・取引・訴訟に関する企業戦略と国際特許制度。

技術開発・技術利用において個別企業の枠を超えた戦略が重要なだけでなく、国の境界を越えた知的財産制度の利用や、経営学・経済学・法学等の学問境界をまたぐ研究がイノベーション研究で重要である。国際的な特許制度相互の関係、知的財産権ポートフォリオに関する企業戦略、司法コストと権利活用方法の関係、など分野横断的な開拓を目指しており、データベース開発を含む実証研究手法の改善にも取り組んでいる。

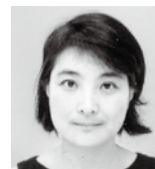


渡邊 真理子 教授

新興国企業の戦略の実証分析

■研究テーマ

中国の企業を中心にその戦略を経済学の枠組みで考えています。現場でのインタビューを通じて企業の戦略の概容を理解したうえで、ミクロ経済学の枠組みで整理し、計量的に分析します。差別化優位とコスト優位、持続的な競争優位や、人と人をつなぐマッチングを行うプラットフォーム企業つまりシェアリングエコノミーの分析、さらには中国独特の市場環境である国有企業、民営企業と外資系企業の非対称な競争条件が市場経済の質にもたらす影響を評価する分析などがテーマです。



人文科学研究科

Graduate School of Humanities

哲学専攻

美術史学専攻

史学専攻

日本語日本文学専攻

英語英米文学専攻

ドイツ語ドイツ文学専攻

フランス文学専攻

心理学専攻

臨床心理学専攻

教育学専攻

アーカイブズ学専攻

身体表象文化学専攻

人文科学研究科の特長

人文科学研究科では、個としての人間に関する深い考察を尊ぶとともに、現代社会の中で生起している文化活動にも注目した研究教育をおこなっています。過去の文化を批判的に検証しながら継承し、現在の文化や社会を見すえて、その上で未来の展望を切り開こうとしています。

哲学、美術史学、史学、日本語日本文学の各専攻では、日本、アジアそして世界の文化遺産に新たな解釈を加え、主として通時的対話を通して現代における人間存在の意味を問う研究をしています。英語英米文学、ドイツ語ドイツ文学、フランス文学の各専攻では、通時的に、また異文化理解を通して共時的に、現代に生きる我々の存在とは何であるのかを探索しています。心理学専攻、身体表象文化学専攻では、人間自身、あるいは人間の心理、行為そのものを研究の対象として、個々人の主体性に注目した考察をおこなっています。臨床心理学、教育学、アーカイブズ学の3専攻は、より密接に現代の社会システムに関わり、臨床心理士、教員、アーキビストという専門職を養成する役割も果たしています。

人文科学研究科で学んだ学生は、大学をはじめとする、さまざまな教育機関、博物館、美術館、図書館、文学館、史資料館、医療機関、福祉関連機関、企業などで、それぞれの領域のエキスパートとして活躍しています。

人文科学研究科共通科目

言語学特殊研究	国際文化学特殊研究
上級古典語（ギリシア語）	※教育学演習Ⅰ
上級古典語（ラテン語）	※教育学演習Ⅱ
ギリシア・ラテン文学特殊研究	※教育特殊研究Ⅰ
漢語原書講読	※教育特殊研究Ⅱ
アカデミック・ライティング	
比較文学特殊研究	（備考）※印は教職に関する科目である。



基本的分野を網羅する一方で、他大学には少ないユニークな専攻も。

本研究科の各専攻は人文科学の基本分野が網羅され、さまざまな研究に取り組むことが可能です。一方、知的情報資源としての記録の保存とアクセスを支えるアーカイブズ学や、演劇・映画・マンガ・アニメーションなどを対象とする身体表象文化学など、他大学には少ない専攻が置かれていることも特徴です。

充実した研究を進められる環境がととのっています。

前期課程ではグループによる演習や個別的指導、後期課程では専門度の高い博士論文を仕上げるための指導というように、個々に応じた指導体制のもとで研究を行えます。国費留学生・協定留学生として留学する学生も多くいます。また、専門図書・研究資料・大学院生専用の学習スペース・その他諸設備は、質量共に充実しています。

他大学との相互交流も盛んです。

慶應義塾大学大学院文学研究科・早稲田大学大学院文学研究科・中央大学大学院文学研究科・学習院女子大学大学院国際文化交流研究科との相互交流の協定を結んでおり、毎年かなりの数の学生が相互に科目を履修し、単位を修得しています。

人文科学研究科 特別研究費について

人文科学研究科に在籍する大学院生の研究を支援するため、博士前期課程では5万円、博士後期課程では20万円を、申請者全員に研究費として給付しています。

哲学専攻

授与する学位

博士前期課程：修士（哲学）

博士後期課程：博士（哲学）

▶ 専攻の特色

本専攻では、西洋および日本の哲学・思想史を専攻領域とし、専門的な研究と教育を行っています。

教授陣は、それぞれの大学院生の研究課題を尊重し、各人の研究を深化・発展させるために、講義や演習、個人面談、研究会などを通じて、懇切丁寧な研究指導を行います。大学院生諸君は、これらの大学での活動以外に、合宿や研究旅行に参加し、集中的な講読やディスカッションを行うこともできます。

近年は、特に博士論文の執筆へ向けてさまざまな指導がこころみられており、課程博士の取得者も増加しています。

▶ 専攻の構成

本専攻は博士前期課程（修士課程）と博士後期課程からなっています。前期課程では、本専攻および他大学の博士後期課程に進学する学生のほか、本課程での研究成果をふまえ、中学校・高等学校などの教育機関における教員を目指す学生、および、専門的な知識・経験を活かして、一般企業や自治体などへの就職を目指す学生がいます。

後期課程では、前期課程で修得した研究をさらに発展・深化させ、最終的には博士論文の提出を目指す学生が中心となります。また海外からの留学生も在籍しています。課程修了後は大学や短期大学などの研究教育機関における教員となることを目指します。

▶ カリキュラム

専任教授陣と学外非常勤講師による多彩で高度な内容の「特殊研究（講義）」と「演習」が用意され、自分の研究課題に沿った科目・単位の履修・修得が義務づけられています。各学生には指導教授（1人）と副指導教授（2人）を定め、研究課題に沿った指導を随時行うとともに、学年ごとに研究の進捗状況を報告するよう義務づけるなど、きめ細かな指導を特色としています。なお、慶應義塾大学、早稲田大学、中央大学各大学院とのあいだに単位互換に関する協定が結ばれています。

▶ 教員の構成と設備

学生の研究の多様化・高度化・専門化により適切に対応するために、実質的な指導に際しては、本専攻5名の専任教員のほか、本学他専攻や他大学の教員の参加も得ながら指導にあたることも珍しくありません。

本専攻の書庫、辞書室、閲覧室などには、哲学、西洋哲学史、日本思想史、宗教史などに関連する諸分野の貴重な専門研究書や学術雑誌を約3万冊所蔵しています。それらのほとんどは開架で閲覧することができます。

し、また一定期間借り出すこともできます。

大学院生専用の研究室が用意されており、個人的な思索や読書のほか、学生同士の各種討論会や研究会をはじめとするさまざまな研究活動に利用されています。

また外国人留学生に対しても、海外経験豊富な教授陣が適宜指導にあたっています。

▶ 修了後の進路

前期課程を修了し、一般企業や官庁に就職した人、中学・高等学校などの専任教員に採用された人、また後期課程を博士論文の執筆とともに修了し大学その他の専任教員に採用された人をはじめ学生の進路は多岐多様です。近年は、全音楽譜出版社、北海道放送、福島県庁、東京都庁、紀伊國屋書店、学校法人学習院、あるいは神田外語大学、倉敷作陽大学、郡山女子大学、帝京大学、札幌医科大学、杏林大学、成城大学、共立女子学園、学校法人船橋学園東葉高等学校、上海日本人学校浦東校、学習院女子高等科、獨協高等学校、学校法人開校学院日々輝学園高等学校等に就職しています。

また、さらに研鑽の機会を求めて海外へ長期留学する人、他大学大学院へ進学する人、より特殊な知識・技能、あるいは資格などの取得を求めて専門学校などへ入学する人もいます。

▶ 設置科目

博士前期課程授業科目

哲学特殊研究 哲学史特殊研究
思想史特殊研究 哲学演習
思想史演習 修士論文指導

博士後期課程授業科目

哲学特殊研究 哲学史特殊研究
思想史特殊研究 哲学演習
思想史演習 博士論文指導

▶ 大学院生の研究テーマ

【博士前期課程】

- ・アレントにおける『活動的生』と『精神の生活』の関連から見る悪と道德の問題
- ・道元の打ち返し表現から考える禅宗史
- ・プラトン『エウテュプロン』
- ・プラトン『バイドン』について
- ・ヒュームの道徳哲学は徳倫理学の一種か
- ・ハイデガー1932年夏講義におけるアナクシマンドロス断片の解釈
- ・ショーペンハウアー芸術論におけるイデー認識
- ・ベルクソンにおける生と持続 — 『創造的進化』を中心に—
- ・『饗宴』における小秘儀の再評価

【博士後期課程】

- ・道元と華嚴思想
- ・ミシェル・フーコーにおける「法」の問題の再解釈
- ・プラトン『クラテュロス』におけるプラトンの言語観
- ・プラトン『ポリテイア』における民衆と「同意」
- ・レヴィナスにおける言語について
- ・メルロ＝ポンティ哲学における「表現」をめぐる問題系について
- ・意志と表象としての身体—世界の現実としての身体論—

小島 和男 教授

ギリシア哲学(特にプラトン研究)

■研究テーマ

プラトンおよびアプレイウスの著作について主に研究しています。そのため、彼らの書いたギリシア語およびラテン語の厳密な読解を重視しています。そして、プラトンを読むということ、ひいては哲学のテキストを読むということとはどのようなことなのかについて考えています。そのため、おそらく自分をプラトン主義哲学者であると自認していたアプレイウスという2世紀の人物についても対象としているわけです。著書:『プラトンの描いたソクラテス』。共著:『西洋哲学の10冊』他。論文:「1964年のアレーテア」「プラトンは魅惑の歌を歌っているか」「プラトンの生とベネター」「おいしい武蔵野うどん」「アプレイウスによる哲学のすすめ」他。



澤田 和範 准教授

イギリス哲学を中心とする西洋近現代哲学
(とくにヒューム研究、哲学的自然主義)

■研究テーマ

ヒュームを中心にしたイギリス経験主義哲学や、それと関連する英米圏の現代哲学が専門です。「ヒュームは徹底的な自然主義者であり、かつ、徹底的な懐疑主義者である」という一見するとパラドキシカルなヒューム像を擁護するとともに、人間を徹底して自然の一部とみなす自然主義という思想に関心を持って研究を進めています。学生には古典的テキストを精密に読解する技術とともに、哲学者たちの主張に向き合うこと(つまり賛成や反対の態度をきちんと取ること)を学んでほしいと思っています。著書:『ヒュームの自然主義と懐疑主義』、論文:「ヒュームの人種差別主義の哲学的基礎」、「バーナード・ウィリアムズの『道徳的運』を取り戻す」他。



陶久 明日香 教授

ドイツ哲学を中心とする西洋近現代哲学
(特にハイデッガー研究)

■研究テーマ

ハイデッガーの現象学およびその影響を受けたドイツ系の哲学者の思索を中心に、ドイツ近現代哲学の展開について研究しています。とくに気分、情態性といった現象についての究明を主軸に据える仕方、世界、歴史、哲学すること、人間の有限性、技術などといった事象について考えています。演習では哲学者たちのテキストを厳密に読解することを通じ、そこに提示されている事象に可能な限り接近することを試みます。また研究書の読解、発表などを通じて、論文執筆に必要な発信力、分析力を高めていきます。著書:『Die Grundstimmung Japans – Ein Versuch mit Martin Heideggers Stimmungsphänomenologie』。共著:『ハイデッガー読本』他。「世界の意味喪失の経験は共有できるか?—ハイデッガーとバトチカを手引きとして—」、「逸脱という現象—退屈と遊戯の場合」他。



杉山 直樹 教授

フランス哲学を中心とする西洋近現代哲学
(特にベルクソン哲学)

■研究テーマ

ベルクソンを中心にして19世紀から20世紀のフランス思想の展開が研究課題です。その後には自明とされる思想ですら、一定の日付においてようやく生成してきたということ、後知恵ではそこに至る時間はただの迂路にしか見えないとしても、その躊躇の時間はやはり省略不可能だったのだということ、最近ではあらためて不思議に感じています。ゼミでは、広い視野を保ちながら、哲学者たちのテキストに直に向き合うことを重視します。著書:『ベルクソン 聴診する経験論』。訳書:ラヴェッソン『十九世紀フランス哲学』。共著:『Disséminations de l'Évolution créatrice de Bergson』、『西洋哲学史(講談社新書メチエ)』『西洋哲学の10冊』他。



松波 直弘 教授

日本思想史(特に鎌倉仏教思想)

■研究テーマ

鎌倉時代の禅宗を中心に、日本への禅宗の定着と展開を思想史の視点から読み解くことが中心になります。ただ、他の仏教諸宗派はもちろん、儒教や易学といった中国思想や、日本の神祇思想など、様々な要素が関わってくるため、禅宗のみにとどまる問題ではありません。鎌倉仏教に足を置きつつも、日本思想史として宗教、宗派や時代に垣根を設けない視野も必要と考えています。著書:『鎌倉期禅宗思想史の研究—〈日本禅宗〉の形成』。論文:「『正法嫡伝獅子一吼集』における〈仏記東漸論〉」、「江戸期曹洞宗における三教一致思想」他。



美術史学専攻

授与する学位

博士前期課程：修士（美術史学）

博士後期課程：博士（美術史学）

▶ 専攻の特色

本専攻では、日本東洋美術および西洋美術を対象とする美術史学を専攻領域として、専門的な研究と教育を行い、「専門的知識・見識を生かして美術（史）と人々を仲介する人材」の養成をめざしています。学生は学部レベルで培った知識や関心を土台として、教授陣の細やかな指導のもとに、さらに自身の研究を深めることができ、同時に専攻内の多様な研究活動に接して、広い視野を養うことができます。特に日本東洋美術史の領域では、自国におけるこの分野のエキスパートをめざす諸外国の留学生も学んでおり、国際性に富む環境となっています。

▶ 専攻の構成

本専攻は、博士前期課程と博士後期課程からなっています。前期課程では、美術史を学部レベルよりもさらに深く学びたいと希望する学生を広く受け入れており、学習院大学哲学科（美学・美術史系）からの進学者に加えて、他大学からの入学者や社会人としての経験を積んだ入学者もいます。前期課程の勉学の集大成として修士論文を書くこととなりますが、特に優れた成果があれば、美術史学会などで発表をすることもあります。

前期課程を修了した段階で一般企業に就職する学生もあり、美術館など専門を生かせる場に職を得る学生もありますが、さらに高度な研究活動を志す学生は博士後期課程に進み、諸学会での研究発表を重ねながら博士論文の作成をめざします。しかし、後期課程を中途退学して美術館学芸員となる、あるいは西洋美術史専攻の学生の場合、欧米の大学院に留学して博士論文を執筆するなど、関心に応じて多様な選択肢があります。

▶ カリキュラム

専任教授陣と外部からの非常勤講師による「特殊研究」（講義）と「演習」が用意され、教員は毎年度、自身の最新の専門的関心を学生と共有することを目指すとともに、学生が研究者として自立できる力の育成に努めています。学生は自分の研究領域の科目を、修了に必要な一定の単位数以上履修するとともに、研究課題に応じて定められた指導教授1名、副指導教授2名から日常的にきめ細かな指導・助言を受けながら研究を進め、その成果として、修士論文および博士論文を作成することになります。

▶ 教員の構成と設備

専任教授は日本東洋美術史の専門家3名、西洋美術史の専門家2名で、美術館学芸員、文化財研究所員としての経験も豊富な教員もいます。加えて、現役的美術館学芸員を非常勤講師として迎えており、さらに、相互履修協定校（慶應義塾大学大学院および早稲田大学大学院）との単位交換制度もあります。また、関連する他専攻科目の単位を修了に必要な単

位に算定することも認められ（協定校科目の場合と同様、単位数には制限あり）、ことに2008年度まで美術史学専攻がその一部を成していた哲学専攻とのあいだでは、学生の研究課題によっては、一方の専攻の教員が他方の学生の副指導教授となることもあります。

上述のような経緯から、本専攻の図書は哲学専攻と同一の図書室にあり、合わせて約4万5千冊の美術史と哲学の専門書や学術雑誌、各国語のレファレンス文献類はすべて開架式で閲覧に供され、両専攻の学生が自由に利用できます。また、コンピューターやスキャナーを備えた大学院生専用の共同研究室が用意されており、読書、インターネット検索、論文執筆、研究や発表に必要な視覚資料の作成などができるほか、学生同士の討論や研究会の場としても活用されています。

▶ 修了後の進路

哲学専攻の一部であった時期から、当専攻は多数の学生を美術館・博物館に送り出してきました。東京国立博物館、東京国立近代美術館、国立西洋美術館、東京都現代美術館、神奈川県立近代美術館、山梨県立美術館、福井県立美術館、板橋区立美術館、大阪市美術館、千葉市美術館、平塚市美術館、井原市立田中美術館、出光美術館、サントリー美術館、山種美術館、ブリヂストン美術館、鶴岡アートフォーラム、松濤美術館、中山道広重美術館、静嘉堂文庫美術館、永青文庫、東洋文庫ミュージアム、名古屋ボストン美術館、軽井沢ニューアートミュージアム、ハラミュージアムパーク、岡田美術館、テート・ブリテンほか数多くの国内外の国公立・私立美術館に採用されており、その他、修了者が勤務している全国各地の美術館・博物館はここには書ききれません。大学の専任教員としては、学習院大学、学習院女子大学、京都造形芸術大学、実践女子大学、千葉大学、中央大学、日本女子大学、大阪国際大学、広島大学、広島女学院大学、お茶の水女子大学、和歌山大学などに採用されており、非常勤として各大学で美術史を教える修了者もすでに相当数に上っています。美術館や大学以外にも、修了者が専門知識を生かしている就職先として、鹿島美術財団や徳川黎明会、浅草寺、日比谷図書文化館などが挙げられます。さらに、各国からの留学生は、帰国後、ハーバード大学、コロンビア大学、ハイデルベルク大学、ライデン大学などの教員になり、その国での日本東洋美術史研究の中心的存在として活躍しています。

▶ 大学院生の研究テーマ

【博士前期課程】

- ・19世紀イギリスの画家エドウィン・ランシアによる犬の表象について
- ・並河靖之および明治の七宝
- ・瀟湘八景と西湖十景から見る「実景」と「心象」
- ・青州駝山・雲門山石窟についての研究—観音菩薩を中心に—
- ・パピエ・コレの色彩表現について
- ・日本における二十八部衆図像の成立
- ・元禄期以降の肥前磁器における文様表現 —古伊万里金襴手を中心に—
- ・クロード・モネの画業初期の作品(1858-72年)における水面表現の変化
- ・河鍋曉斎の能・狂言画

【博士後期課程】

- ・鎌倉時代の俗人肖像画の研究
- ・オーギュスト・ルノワールによる劇場観客席の女性像
- ・近世初期歌仙絵の研究
- ・和田三造研究
- ・水野年方の歴史画（錦絵及び日本画）
- ・アルペール・マルケによるセーヌ河作品群—ドリュエ画廊との関わり—
- ・中世、近世初頭における稚児物語絵巻の制作と受容
- ・円山応挙の大画面作品における水墨表現の研究
- ・江戸幕府細工所の研究—江戸時代後期將軍家婚礼道具の文献・器物調査を中心に—
- ・20世紀初頭のアメリカ社会における中国美術
- ・川合玉堂研究
- ・19世紀末フランスにおける浮世絵受容と美術交流
- ・レンブラントとユダヤの関係について
- ・北宋後期における文人画の新動向—禅宗思想から受けた影響を中心に—
- ・明兆様式の白衣観音の成立と発展について

▶ 設置科目

博士前期課程授業科目

日本東洋美術史特殊研究	西洋美術史演習
西洋美術史特殊研究	芸術学演習
美術館学特殊研究	修士論文指導
日本東洋美術史演習	

博士後期課程授業科目

日本東洋美術史特殊研究	西洋美術史演習
西洋美術史特殊研究	芸術学演習
美術館学特殊研究	博士論文指導
日本東洋美術史演習	

指導教員および研究分野など

荒川 正明 教授

日本美術史・工芸史

■研究テーマ

やきもの（陶磁器）を中心とする工芸を研究分野としています。その造形やデザインへのアプローチを、絵画や漆器・金属器・染織など他の素材の作品との比較などを通じても行っています。さらにうつわが使われる場やその使われ方にも関心をもっており、例えば四季折々ハレの日に催された宴会から見た工芸史などを模索してみたいと考えています。著書：『やきものの見方』、『板谷波山の生涯』、『日本美術全集 10 巻 黄金とわび』など。



京谷 啓徳 教授

西洋美術史

■研究テーマ

イタリア・ルネサンス美術を中心として西洋美術史を研究しています。ルネサンス期の画家の仕事は多岐にわたり、祝祭で用いられる山車や仮設装飾等のデザイン・制作も手掛けていました。教会や宮殿を飾り後世にまで残る絵画や彫刻と、祝祭・儀礼で一時的に使用されては消えていく仮設の美術、それらの総体としてのルネサンス美術の実態を明らかにしていきたいと考えています。著書：『ボルソ・デステとスキファノイア壁画』『もっと知りたいボッティチェッリ』『凱旋門と活人画の風俗史 儚きスペクタクルの力』他。



近藤 壮 教授

日本美術史

■研究テーマ

日本美術史、とくに江戸時代の絵画を専門としていますが、近現代にいたるあらゆる視覚表象に関心があります。講義科目では、日本の美術の展開を軸として、東洋の美術の展開を見据えながら、造形的な分析とあわせて、作品が生み出された社会的・文化的背景について考えます。演習では、受講生による発表とディスカッションを中心としたゼミ形式で行います。内容は、日本美術史研究の方法、とくに美術作品の特徴や内容から、その意味や機能について考えます。著書：『東アジアの文人世界と野呂介石』（共著）、『日本美術全集 14 江戸時代Ⅲ 若冲、応挙、みやこの奇想』（共著）、『日本美術全集 6 東アジアのなかの日本美術』（共著）他。



皿井 舞 教授

日本美術史

■研究テーマ

古代・中世の仏像を中心とする仏教美術を専門としています。仏教美術というと、難しくわかりにくい印象をもたれるかもしれませんが、それをつくったのは人であり、そこには必ず願い（目的）がありました。その願いは、今も昔も、大きく違いはありません。仏像をつくらせる人（注文主）、つくる人（仏師）が、どのような関係を取り結び、形に実現したのかということに興味をもって研究をしています。



吉田 紀子 教授

西洋近代美術史、デザイン史

■研究テーマ

フランスを中心とする西洋近代美術史・デザイン史が私の専門研究分野です。19世紀末～20世紀初期、紙媒体のイメージが数を増やす時代と社会にあって、アーティストたちはこれとどう向かい合い、また美術行政や産業界はこれにどう関わっていったのでしょうか。アール・ヌーヴォー、アール・デコのポスターは、同時代言説も含めて、私の学術的関心の大切な部分を占めています。一方、近年ではより画家の側に立って、タブロー制作とポピュラーイメージ（ポスターや雑誌挿絵等の大衆向けイメージ群）の関係についても考察しています。著書：『Regards de critiques d'art. Autour de Roger Marx (1859-1913)』（共著、PUR、INHA、2008年）、『西洋近代の都市と芸術 3 パリⅡ—近代の相克』（共著、竹林舎、2015年）他。



史学専攻

授与する学位

博士前期課程：修士（史学）

博士後期課程：博士（史学）

▶ 日本史・東洋史・西洋史が同居

史学専攻は、学部卒業段階よりもいっそう進んだ専門的な歴史研究の手法を身につけてゆくための博士前期課程と、さらに専門度の高い歴史研究者・教育者としてのプロをめざす後期課程とで、構成されています。慶應義塾大学、早稲田大学、中央大学、学習院女子大学、それぞれの大学院との単位互換制度は本大学院他専攻と同様ですが、さらに国文学研究資料館によるアーカイブズカレッジ受講者の単位認定など、学外施設での研修も、おおいに推進しています。

本専攻の特色は、日本史、東洋史、西洋史の院生が同居していることです。もちろん各院生は、専門分野の特定の対象について、教員の指導のもとで、史料の探索利用や、研究の視点や方法について、レベルの高い研究をめざさなければなりません。しかし、あまりに専門に特化した「タコツボ」的な研究に終始しては困ります。歴史学の対象は広大ですし、近年の方法的な進化も多方面にかかわっています。自分が研究している分野とは異なる分野の教員や仲間との議論は、かならず刺激になるはずです。

▶ 研究の環境

院生は、自分の専門にあった指導教員の演習に出席するのはもちろんですが、それ以外の演習や特殊研究を選択して、研鑽を積むことができます。歴史の研究にとって史料は不可欠ですが、史学科研究室に所蔵されている図書・史料類は、すべて院生が直接利用できますし、本学の大学付属図書館、史料館、東洋文化研究所などに所蔵されている図書・史料にも、たいへん貴重なものがあります。パソコン、インターネット、コピー、マイクロリーダーなども、院生専用か史学科との共用で利用できます。こうした機器類は、さらに拡充の方向にあります。

▶ 史学会・サブゼミ・自主ゼミ

入学すると院生は、学部の学生、卒業生、そして教員とともに全員が、学習院大学史学会の会員になります。年1回の大会や会誌の発行、各種の研究会を中心になって運営しているのが、院生の皆さんです。院生室を利用した各分野でのサブゼミや自主ゼミ、読書会なども、活発に行われています。学習院の史学専攻・史学科では、院生・学生の自主的な学問への姿勢をたいへん重視しています。そうでなくては、自立した研究者、社会人になることは難しいでしょう。史学専攻・史学科では、教員と院生・学生の距離の近い付き合いも特色ですが、その十分な効果を生み出すにも、院生・学生の自主性が大切だと、私どもは考えているのです。

▶ 留学する院生

外国史を専攻している院生のなかには、留学する者もいます。中国、韓国といった隣国だけでなく、メキシコ、イタリア、アイルランド、ドイツなどの国費奨学生試験に合格して留学する院生もでています。本学では海外のいくつかの大学と交流協定がありますので、院生の自主的な留学挑戦をすすめながら、他方では研究交流も推進しています。

▶ 修士論文と博士論文

博士前期課程の院生には、修士論文を書いてもらいます。一次史料を駆使したオリジナルな論文が期待されています。また、教職資格を持っているものは、論文を書かなくとも規定単位を修得すれば、専修免許をえられます。後期課程の院生は、3年在籍して規定単位を修得すれば、博士課程単位取得満期退学ということになりますが、博士号をえるためには学位論文を提出しなければなりません。近年では、規定の年限のうちに学位論文を提出して博士号を取得することが、一般的になりつつあります。

▶ 修了後の進路

【大学・高専教員】

北海道大学・北海道教育大学・東北福祉大学・福島大学・茨城大学・流通経済大学・小山工業高専・駿河台大学・川村学園女子大学・学習院大学・学習院女子大学・公立女子短期大学・上智大学・専修大学・高千穂大学・玉川大学・東京音楽大学・東京学芸大学・東京国際大学・日本大学・明治大学・立教大学・関東学院大学・鶴見大学・東海大学・淑徳大学・新潟産業大学・静岡文化芸術大学・常葉大学・日本福祉大学・京都外国語大学・皇學館大学・ノートルダム清心女子大学・九州大学・別府大学・南開大学(中国)・北京大学(中国)・晩荘学院(中国)・国立メキシコ自治大学

【研究所・博物館・資料館など】

秋田県埋蔵文化財センター・秋田県立博物館・福島県立博物館・科学技術振興機構・国立歴史民俗博物館・江戸東京博物館・おれと切手の博物館・学習院大学史料館・学習院大学東洋文化研究所・貨幣博物館・宮内庁書陵部・国文学研究資料館アーカイブズ系・国立公文書館・国立国会図書館・渋沢史料館・白根記念渋谷区郷土博物館・千代田区立日比谷図書館・文化館・東京大学史料編纂所・東京文化会館音楽資料室・徳川林政史研究所・前田育徳会尊経閣文庫・物流博物館・三菱史料館・流山市学芸員・大磯郷土資料館・川崎市民ミュージアム・寒川町文書館・横浜市歴史博物館・高岡市万葉歴史館・小布施町文書館・姫路文学館・奈良県立万葉文化館・出雲弥生の森博物館・土佐山内家宝物資料館・佐伯市歴史資料館・今治市学芸員・三の丸尚蔵館・湖西市教育委員会・上野の森美術館・東京国立博物館

【高等学校】

山形県立高校・茨城県立高校・江戸川学園取手高校・群馬県立高校・埼玉県立高校・西武学園文理高校・千葉県立高校・東京都立高校・学習院高等科・学習院女子高等科・関東国際高校・國學院高校・駒場東邦高校・自由が丘学園高校・成城学園高校・青稜高校・東京女学館高校・東京成徳大学高校・豊島岡女子学園・横浜市立高校・神奈川学園高校・公文国際学園高校・慶應義塾高校・桐蔭学園高校・フェリス女学院高校・横浜共立学園高校・山梨英和学園高校・静岡学園高校・静岡雙葉学園高校・私立高田学園高校・須磨学園高校・早稲田中学校高等学校・筑波大学附属駒場高校・福島県立高校

【その他】

法務省・文部科学省・厚生労働省・茨城県庁・千葉県庁・栃木県庁・東京都

庁・稲城市役所・国分寺市役所・横浜市役所・山梨県庁・警視庁・日本銀行・茨城大学職員・青山学院大学職員・中央大学職員・東京女子大学職員・東京都立大学職員・大学基準協会・徳川記念財団・ベネッセコーポレーション・戎光祥出版・学研ホールディングス・講談社・光文社・JTBパブリッシング・主婦の友インフォス・山川出版社・吉川弘文館・六栄書房・ジュンク堂書店・トヨタ自動車・三菱化工機・AST・鹿島建設・セブン-イレブン・ジャパン

▶ 大学院生の研究テーマ

【博士前期課程】

- ・豊臣政権の内部構造
- ・日中戦争の拡大をめぐる中華民国側の時局認識について—一九四国条約会議を事例に
- ・大中国と五族共和—『金鉄主義説』から楊度の民族思想を見る
- ・奈良時代の皇位継承問題に関する研究
- ・秦代律令の伝達に関する研究—里耶地域の徭役管理を中心として—
- ・中世後期東地中海におけるヴェネツィア人の活動
- ・国有鉄道の戦災復興と機構改革
- ・評制下におけるイネ管理について
- ・源実朝の死と後鳥羽上皇の孤立—親王將軍推戴計画の瓦解にみる—
- ・日本古代の官司と出納体制—正倉院文書の日次式帳簿の分析を通して—
- ・20世紀初滿州における大互貿易と日本の製油業
- ・秦末における長江中流域社会
- ・近世中後期の朝廷下級役人と幕府—口向役人を対象に—
- ・明治期の一地方都市における商工人の役割と鉄道開通の影響—小諸町と上田町における郷友会活動を参考に—
- ・姓氏銅の基礎的研究—新代の銅鏡の政治的意義—

【博士後期課程】

- ・北一輝の国体論と「純正社会主義」—その歴史的位置づけと戦後の歴史学—
- ・飛鳥浄御原令の研究—官僚制を中心に—
- ・戦国期畿内—西国の政治的運動—天文期尼子氏の播磨侵攻を通して—
- ・田中王堂と1910年代
- ・アングロ=サクソン期イングランドにおける王の称号としてのImperator
- ・中世後期公家社会の変容
- ・鎌倉期公武政権における訴訟手続の総体的研究
- ・江戸幕府馳走構造の研究

【課程博士】

- | | | |
|------|-------|------------------------------|
| 1996 | 高橋 秀樹 | 日本中世「家」成立過程の研究 |
| | 井上 亘 | 朝政の研究 |
| | | —日本古代国家の政務と儀礼および政治権力についての論攷— |
| 1997 | 海老名 尚 | 日本中世の国家権力と寺院社会 |
| 1998 | 森 ありさ | アイルランド独立運動における「共和国」の理念と表象 |
| | 山田 康弘 | 戦国期室町將軍権力の研究 |
| 2000 | 田村 航 | 日本中世古典学の研究 |
| | 舟橋 明宏 | 日本近世における地主制の展開と地域社会 |
| | 李 思 行 | 中国古代に於ける韓非の統治思想の研究 |
| 2001 | 鶴飼 政志 | 幕末維新期の外交と貿易 |
| | 穂鷹 知美 | 近代ドイツにおける都市生活と緑の関わり |
| | | —世紀転換期のライブツィヒを中心に— |
| 2002 | 市川 理恵 | 日本古代における京の支配 |
| 2005 | 村松 弘一 | 中国古代の環境と地域開発 |
| | | —関中平原と淮北平原を中心に— |
| | 田中 大喜 | 中世武士団の構造と展開の研究 |
| 2006 | 伊藤真実子 | 明治政府と万国博覧会 |
| | | —近代日本の自己認識— |
| | 下田 誠 | 中国古代国家の形成と青銅兵器 |
| 2007 | 菅野 恵美 | 中国漢代墓葬装飾の地域的研究 |
| | 西村慎太郎 | 近世地下官人と朝廷社会 |
| | 畑中 彩子 | 日本古代王権と官人支配の研究 |
| 2008 | 小宮山敏和 | 譜代大名の創出と幕藩体制 |
| | 福島 恵 | ソグド人漢文墓誌の研究 |
| 2009 | 濱田 英毅 | 皇族と政治 |
| | | —昭和戦前期における補弼体制の動揺と模索— |
| 2010 | 田中 潤 | 江戸時代天台宗山門派門跡の研究 |
| | 長谷川順二 | 前漢期黄河故河道の復元 |
| | | —リモートセンシングと歴史学— |
| | 矢沢 忠之 | 漢帝国の変容と北方王国 |
| | | —燕・代両王国からみる漢初郡国制の展開— |
| | 中西 大輔 | 漢代史書編纂の研究 |
| 2012 | 長坂 良宏 | 近世摂家の特質と朝幕関係 |

- | | | |
|------|-------|------------------------------------|
| | 小武海櫻子 | 初期同善社の研究 |
| | | —近代中国における民間慈善宗教団体の成立と展開— |
| | 近藤 祐介 | 修験道本山派成立史の研究 |
| | | —室町・戦国社会と修験道— |
| | 小松 賢司 | 近世後期社会の構造と村請制 |
| 2014 | 丸亀 裕司 | 公職選挙に見るローマ帝政の成立 |
| 2016 | 犬飼 崇人 | フランス第三共和政期における学校衛生と児童の健康：リヨンを中心として |
| 2017 | 萱場 真仁 | 近世・近代の山林と地域社会の研究 |
| | | —陸奥国津軽郡弘前藩領を事例に— |
| 2018 | 日暮 義晃 | 近世関東新義真言宗教団の基礎構造 |
| 2019 | 林 大樹 | 天皇「近臣」と近世の朝廷 |
| | 莊 卓燐 | 中国古代帝国の交通と権力 一符による権力構造論— |
| | 段 宇 | 秦始皇帝像の歴史的変遷 一史学史的考察— |
| 2021 | 望田 朋史 | 江戸幕布馳走構造の研究 |
| 2023 | 山田 大生 | 田中王堂の文明論とその時代 |
| 2025 | 細谷 篤志 | 近世朝廷の実務集団と国家・社会 |

【論文博士】

- | | | |
|------|-------|-----------------------------------|
| 1995 | 原 宗子 | 古代中国の開発と環境 |
| | | —『管子』地員篇研究— |
| 1997 | 遠山美都男 | 古代王権の形成と大化改新 |
| | | —律令国家成立前史の研究— |
| 2001 | 澤 博勝 | 近世の宗教組織と地域社会 |
| | | —教団信仰と民間信仰— |
| 2002 | 王 瑞 来 | 宋代の皇帝権力と士大夫政治 |
| | 濱田 耕策 | 新羅国史の研究 |
| | | —東アジア史の視点から— |
| 2003 | 中込 律子 | 古代・中世移行期の地方支配に関する研究 |
| 2004 | 藤實久美子 | 日本近世における閉鎖系の「知」についての研究 |
| | | —書籍史料論の構築— |
| 2005 | 松尾 光 | 白鳳天平時代の研究 |
| 2006 | 豊永 聡美 | 日本中世の天皇と音楽 |
| 2009 | 山室 建徳 | 近代日本が生んだ軍神の変遷 |
| | 野尻 泰弘 | 近世日本の支配構造と地域社会 |
| 2010 | 田中 曉龍 | 近世前期朝幕関係史の研究 |
| | 高橋 博 | 近世の朝廷と女官制度 |
| 2013 | 市来 弘志 | 五胡十六国時代遊牧民研究 |
| 2015 | 渡辺 修 | 神宮伝奏の研究 |
| 2019 | 山口 和夫 | 近世日本政治史と朝廷 |
| | 三瀧みづほ | スペイン王国の形成とモリスコ問題 |
| | | —16世紀後半から17世紀初頭の宮廷会議と献策家の政策論を中心に— |
| 2020 | 邊見 統 | 前漢時代における高祖系列侯 |
| | 西田かほる | 近世甲斐国国家組織の研究 |
| 2021 | 谷本 晃久 | 近世蝦夷地在地社会の研究 |
| 2022 | 長谷川 伶 | 文化事業を通じた満洲経営の宣伝 |
| 2023 | 高橋 周 | 写本出雲国風土記の研究 |
| | 田原 光泰 | 律令官人制再編の研究 |

▶ 設置科目

博士前期課程授業科目

日本史特殊研究	日本史演習
東洋史特殊研究	東洋史演習
西洋史特殊研究	西洋史演習
古文書学文献学研究	修士論文指導
史学理論史学史研究	

博士後期課程授業科目

日本史特殊研究	日本史演習
東洋史特殊研究	東洋史演習
西洋史特殊研究	西洋史演習
古文書学文献学研究	博士論文指導
史学理論史学史研究	

家永 遵嗣 教授

日本中世史

■研究テーマ

日本中世史、特に14世紀から16世紀初頭の政治史・法制史を専門とする。14世紀における室町幕府將軍権力の形成過程を、訴訟裁判体制の形成、朝幕関係の推転を軸に追究するとともに、15世紀の幕府政治史を京都幕府と鎌倉府・古河公方との対抗関係を軸として再構築する試みに取り組む。演習では、主に古記録を素材として、精密な釈読の技量を磨く修練とともに、複数の仮説を立てて検証する論争手続きの習得に力を入れて指導する。



海老根 量介 准教授

東洋古代史

■研究テーマ

中国古代史、特に春秋戦国時代から秦漢時代を研究対象としている。主に竹簡や帛書などの出土文字史料を用いて人々の様々な営みに光を当てている。たとえば、中国古代の人々が生活のなかの色々なことがらについて日取りの吉凶を占うために参照していた「日書」という書物を通じて、人々がどのようなことに関心があったのか、また「日書」じたいが当時の社会でどのような役割を果たしていたのかを考えてきた。最近では、中国古代における書籍の成立や流伝についても関心を持ち、今我々が見ることのできる伝世文献の成り立ちを考えている。



鐘江 宏之 教授

日本古代史

■研究テーマ

日本古代史、そのうち7世紀から11世紀にかけての時期を主な研究対象として、幅広く取り組んでいる。これまで、特に律令制下の地方行政と地方社会のあり方や、社会・文化の展開を中心に取り組んできた。現在は、7世紀における国家の諸制度の形成が、8世紀初頭の大宝律令制の成立に至るまでにどのように展開してきたのかという問題に関心をもって、研究を進めている。また、木簡・漆紙文書・墨書土器といった出土文字資料の史料的な研究も手がけている。



亀長 洋子 教授

西洋中世史

■研究テーマ

西洋中世史、特に中世盛期からルネサンス期までのイタリアや地中海世界を対象に、都市社会史や商業活動に関わるテーマを幅広く扱っている。授業では、中世史研究者としての力量を高めるべく、ラテン語講読の時間を軸にしている。ラテン語を解さない学生に対しては別途報告等課題を与える。参加者は個人研究の途中経過を年に数回報告する。史料の扱い方や分析と解釈、問題設定や研究史の把握など、論文執筆に必要な技能を演習を通して磨いていくことを目指す。



工藤 晶人 教授

西洋近現代史

■研究テーマ

グローバル・ヒストリーの考え方をとりいれながらフランスとマグリブ、地中海やカリブ海の近代史を勉強している。社会史、植民地史、移民史、都市史といった分野を横断し、さまざまな手法を取り入れ研究を進めている。今後も西洋と東洋という地域区分・時代・分野の壁にとらわれず勉強を続けたいと考えている。時空にへだてられた過去との対話がもたらしてくれる驚きを学生たちと分かち合い、ともに学んでいきたい。



佐藤 雄介 教授

日本近世史

■研究テーマ

日本近世史を専門とする。主に、近世中後期の朝幕関係（幕府と朝廷の関係）を、財政という面から分析してきた。最近では、幕末維新史も視野に入れ、幕政史・朝幕関係史・朝幕財政史などをリンクさせながら、日本近世の政治・社会の実態と変容を解明すべく、研究を進めている。都市京都と天皇・朝廷の関係にも関心を示す。演習では、ゼミ生各々の興味関心を尊重しつつ、特に史料の読みや先行研究に対する向き合い方にこだわる。



島田 誠 教授

(2026年3月退職予定)

西洋古代史

■研究テーマ

西洋古代史、特に共和制末期から帝政期前・中期までの古代ローマ史が専門である。主な研究対象の一つが帝政を樹立した初代皇帝アウグストゥス時代の政治と社会であり、アウグストゥスの権力確立に至る政治経過から当時の支配階層における家族や親族集団の構造の変容を研究している。その他、当時の都市の地位や都市内の社会構造、特に解放奴隷の社会的地位や役割、さらに異教と呼ばれるこの時期の宗教のあり方にも関心がある。



武内 房司 教授

(アーカイブズ学専攻と兼任)

中国近代史

■研究テーマ

近代華南・東南アジア研究、中国近代宗教社会史。これまで、18～19世紀を中心に、多くの非漢族の居住する西南中国から東南アジア大陸部にかけての諸民族社会の変容の動態を、漢民族との接触や宗教・商品経済の展開に着目しつつ、各地に残るアーカイブズ資料やフィールドワークを通じて研究を進めてきた。近年は特に、近代中国・ベトナム関係史をふまえながら、人々の移動に伴いベトナムに伝播した華人系民衆宗教運動の展開を追跡している。



千葉 功 教授

(アーカイブズ学専攻と兼任)

日本近代史

■研究テーマ

日本近代史、特に明治期の政治外交史を研究している。日露戦争の開戦外交から研究をはじめ、1900-19年の日本外交の研究を「旧外交の形成」という視点でまとめた。同時に当該期の首相桂太郎の史料翻刻と伝記研究を行った。近年では1920年代や、さかのぼって明治国家の形成過程にも関心を広げている。また、くずし字の一次史料の読解と翻刻に、一貫してこだわっている。



日本語日本文学専攻

授与する学位

博士前期課程：修士（日本語日本文学）

博士後期課程：博士（日本語日本文学）

▶ 専攻の教育理念と目標

日本語日本文学専攻では、日本語日本文学科と同様に、学科開設以来重んじてきた実証的で堅実な研究方法を学生が身につけるとともに、これからの時代を切り開いていくのに必要とされる、創意に満ちた新しい国際的な感覚や学際的な関心を培っていくことを教育の目標としてきました。

学生がそれぞれの分野の専門研究を深く追究し、古代から現代までの各時代の日本語・日本文学・日本文化の研究、および日本語教育研究に対応できるように、カリキュラムを構成しています。このほか、対照言語学・民俗学・中国文学・文化研究などといった国際的で学際的な研究領域に配慮した授業も設定しています。

博士前期課程は、学生がこれらの授業を履修することで、日本語・日本文学・漢文学・日本文化・日本語教育に関する基礎的な知識はいうまでもなく、現代的な関心と国際的な幅広い視野をもち、高度で専門的な学識を身につけた教育研究者となることをめざしています。

後期課程は、前期課程を修了し、作成した修士論文が学界で一定の評価を得られるレベルに達した学生を受け入れています。前期課程の学生と同様の教育理念に基づいて、より高度な学力を育成し、学生が予定期間内に博士論文を作成して、博士論文（日本語日本文学）の学位を取得することをめざしています。

▶ カリキュラム

前期課程は30単位、後期課程は20単位が修了に必要です。学生はテーマに合わせ、本専攻の科目の他に、他専攻・早稲田大学・慶應義塾大学・日本女子大学・中央大学などの協定大学院の科目、国文学研究資料館、日本近代文学館などの講座を履修して単位とすることができます。

本専攻では、学生ごとに専任教員の中から指導教授と副指導教授を定め、研究指導を行い、毎学年、研究の進捗状況についての報告を義務づけるなど、きめ細かな指導を行っています。専任教員の半数は、外国で日本語や日本学を教授するなどの経験があり、外国人学生への指導も適切に行っています。

また、専任教員の研究領域は幅広く、従来の国語学や国文学の枠にとらわれたものではありません。学生の指導も、非常勤講師や他専攻、協定大学院の教員と連携して行う場合もあります。

▶ 研究環境

大学院生専用の研究室が用意されており、約20台のパソコンがあります。学内のパソコンからは、Japan Knowledgeや和歌&俳諧ライブラリーなどの図書館のデータベースを利用することができます。

本専攻では各領域の研究書や各種全集なども充実しており、日本語教育に関する教材も豊富です。特に古典籍のコレクションは、質・量ともに国内有数のものといつてよいでしょう。三條西家旧蔵の能因本『枕草子』や古注釈書、殿田文庫の俳諧書等のコレクションをはじめとし、中世の講式、御伽草子の絵巻、横井也有の書画、江戸後期の読本や合巻など、貴重な資料を多数所蔵しています。これらのコレクションを大学院生は比較的自由に閲覧することができます。

また、日本語教育を専攻する学生は、地域で暮らす外国人に日本語を教える「わくわくとしま日本語教室」などの活動を行っており、研究と実践の機会が多くなっています。

▶ 学生の構成

社会経験を積んで再び学問を志した方や、国費留学などによる外国籍の学生が増加しています。近年は、韓国・台湾・中国・インドネシア出身の学生がいます。一方、言語学や日本語教育を志す学生が、イギリスなどに留学して、その大学で学位を取得する例もあります。

▶ 研究活動

大学院生は、学習院大学国語国文学会の会員として、学会での口頭発表、機関誌への論文掲載の機会が得られます。また、博士後期課程の学生が主体となって編集委員を務める『学習院大学大学院日本語日本文学』では、刊行後には投稿論文の合評会を行い、分野を越えて活発な議論を闘わせています。他にも大学院生は『学習院大学人文科学論集』、『人文』（学習院大学人文科学研究所発行）にも投稿の機会が与えられています。研究成果を全国組織の学会で発表したり、自主的な研究活動も活発に行っています。

▶ 修了後の進路

修了後の進路は多彩です。一般企業に就職する修了生もいますが、多くは大学・高校での研究・教育に従事しています。例えば大学関係では、防衛大学校・東京工業大学・千葉大学・静岡大学・三重大学・群馬県立女子大学・福岡教育大学・愛知淑徳大学・大阪観光大学・学習院大学・神奈川大学・鎌倉女子大学・川村学園女子大学・神田外語大学・恵泉女子学園大学・國學院大学・国士館大学・十文字学園女子大学・大正大学・大東文化大学・中央大学・東海大学・東海学園大学・東京女子大学・法政大学・北陸大学・明治大学・立正大学などで研究教育に携わっている修了生がいます。中学・高校では、大妻多摩中学高等学校、開智中学・高等学校、実践女子学園中学校・高等学校、学習院中等科・高等科、学習院女子中・高等科、昭和女子大学附属昭和中学校・高等学校、白百合学園中学高等学校、聖心女子学院中等科・高等科、田園調布雙葉学園中学高等学校、豊島岡女子学園中学校・高等学校、藤村女子中学・高等学校、山村学園高等学校などで活躍しています。

近年は留学生だけでなく日本人も、諸外国の大学で日本語・日本学の研究・教育に携わる機会が多くなっています。例えば、青海民族大学（中国）・北京郵電大学（中国）・長安大学（中国）・東国大学校（韓国）・朝鮮大学校（韓国）・カサセート大学（タイ）・インドネシア教育大学（インドネシア）・ドマ大学（タンザニア）などで卒業生が活躍しています。国際交流基金（JF）等、公的機関の派遣で海外の日本語教育に従事する人たちもいます。

また、国際交流基金関西国際センターや日本国際教育支援協会（JEES）、文化外国語専門学校など、国内で日本語教育に携わる人も増えています。

▶ 大学院生の研究テーマ

【博士前期課程】

- 『宇治拾遺物語』が要請する読書行為の研究
- 古代日本語の不可能表現
- 「使役型テモラウ」文と使役表現（サ）セルの使い分けに関する一考察
- 日本語における近い未来の時間を表す類似的な副詞
- 中国語を母語とする上級日本語学習者の作文コーパスに基づいたコロケーション分析
- 中国語を母語とする日本語学習者の使役文における「誘発」の使用実態について
- モンゴル族日本語学習者と日本語母語話者の依頼表現に関する一考察
- 日本語学習者が初級から中級にスムーズに移行するための方策を考える

【博士後期課程】

- 上代における伝承文学
- 『源氏物語』の遺書
- 物語文学における月の表象研究
- 森島中良の戯作に見える内／外の意識の効用とその江戸文壇における位置付け
- 太宰治『女性』研究
- 行為要求表現に関する記述的研究
- 日本語における非典型的格標示構文の研究
- TBLTに基づく日本語指導の効果に関して

【課程博士】

- 1998 藤澤 茜 歌川派の浮世絵と江戸出版界
- 2001 朴 鐘升 古代日本語動詞原型の機能
—形態論的範疇としてのテンスの否認と関連して—
イブラヒム ワリード ファルーク
アラビア語・日本語の語彙構造の比較対照とそれに基づく「アラビア語シソーラス」の作成
- 2002 申 鉉竣 近代日本語における可能表現の動向に関する研究
- 2003 竹林 一志 現代日本語における主部の本質と諸相
平藤喜久子 日本神話とインド・ヨーロッパ神話の比較研究
- 2005 大原 祐治 1930-40年代日本文学に関する考察
李 明玉 日本語と韓国語の慣用的表現に関する研究
—比較言語文化学からの立場から—
沖田 瑞穂 『マハーバーラタ』の神話研究
—デュメジル神話学の継承と発展—
権 敬珉 漫画の記号的分析
—日韓の比較研究—[付録] 漫画分析の総データ
- 2007 柳 慧政 依頼談話の日韓対照研究
—談話の構造・ストラテジーの観点から—
2008 熊 鶯 現代日本語における無生物主語他動詞文に関する研究
- 2009 伊藤 禎子 『うつぼ物語』の研究
勝亦 志織 王朝物語における〈皇女〉の位相
- 2010 札西 才讓 日本語とアムド・チベット語の使役表現
中丸 貴史 『後二条師通記』研究
—漢文日記生成論—
吉田美登利 第二言語習得における日本語文章算出過程の研究
—効果的なアカデミックライティング教育に向けて—
魏 聖銓 時空間を表す日韓語彙の対照研究
—「あと、さき、まえ、うしろ」、「앞 (ap)、뒤 (twi)、전 (jeon)、후 (hu)」を中心に—
湯浅千映子 現代日本語の文章における読み手の年齢差に応じた表現の類型
- 2011 アルモーメン アブドラー
日本語とアラビア語の慣用的表現の対照研究
—意味分類と概念特性を中心に—
塩田 雄大 現代日本語史における放送用語の形成の研究
鈴木 啓子 『平家物語』と〈家〉のあり方
田中 仁 近世後期長歌研究
- 2012 瀧口 明祥 井伏鱒二研究
スィリラック スィリマーチャン
「もらう」・「～てもらう」の意味・用法
—それに対応するタイ語の表現の考察—
有賀 夏紀 『神道集』論考
—神仏習合思想の受容と展開—
- 2013 杉本 スィラッサナン
「だろう」に関する日本語とタイ語の対照研究
—小説における分析—
近藤さやか 歌物語の研究
- 2014 武藤那賀子 『うつぼ物語』論：書かれたものの機能
陶山裕有子 歴史物語研究：語り・叙述
竹田 志保 吉屋信子研究
吉村 研一 『源氏物語』を現象させる言葉についての研究

- 2015 伊勢 光 王朝物語における女君たちの研究：『夜の寝覚』を中心に
村上 佳恵 現代日本語の感情形容詞の研究
- 2016 塩見 優 『源氏物語』の死と身体
千野 裕子 王朝物語文学の研究：女房の機能から
- 2017 富澤 萌未 『うつぼ物語』論
—子ども流離譚—
2019 張 明 現代日本語における字音接辞の研究
—連体詞型字音接頭辞の記述的研究を中心に—
2020 関原 彩 天明・寛政期における黄表紙の表象研究
毛利香奈子 王朝物語の終焉
—『いはでしのぶ』—
2021 塩山 貴奈 『平家物語』の成立とその周辺
- 2022 古庄 るい 朋誠堂喜三二研究 — 黄表紙を中心に —
2023 片野 智子 安部公房論・倉橋由美子論 — 監視とタブー —
2024 増田 高士 『源氏物語』 「宇治十帖」論 — 浮舟物語とは何か —

【論文博士】

- 1997 伊東 祐子 藤の衣物語絵巻（遊女物語絵巻）影印・翻刻・研究
- 1998 葉 漢鰲 中世芸能と中国の古芸能・信仰の比較研究
服部 仁 曲亭馬琴の文学域
- 2001 真田 治子 専門用語の一般化に関する計量的研究
渡辺 泰宏 伊勢物語成立論
- 2002 中尾 真樹 『本朝文粋の研究』
田中 寛美 沖繩と本土の信仰に見られる世界観の重層性
小俣喜久雄 一中節の研究
武藤 純子 初期浮世絵と歌舞伎
—歌舞伎興行からみた初期浮世絵版画の研究—
- 2003 吉田 弥生 歌舞伎史における河竹黙阿弥の位置と作品
- 2004 有澤 晶子 中国伝統演劇様式の研究
森谷裕美子 近松浄瑠璃正本の研究
- 2006 菊池 庸介 近世実録の研究
—成長と展開—
- 2009 関 肇 新聞小説の時代 メディア・読者・メロドラマ

▶ 設置科目

博士前期課程授業科目

日本語学特殊研究	日本語学演習
日本語史特殊研究	日本文学演習
日本文学特殊研究	修士論文指導
日本文学史特殊研究	

博士後期課程授業科目

日本語学特殊研究	日本語学演習
日本語史特殊研究	日本文学演習
日本文学特殊研究	博士論文指導
日本文学史特殊研究	

安部 清哉 教授

日本語学、方言学

■研究テーマ

語彙論・語彙史の研究、方言史・地理言語学研究
『Handbook of Japanese Dialects』(共著、Mouton、2025)
『明治初期理科教科書の漢語』(編著、花鳥社、2021)
『中世の語彙』(編著、朝倉書店、2020)
『日本語の音』(共著、朝倉書店、2017)
『日本古典対照分類語彙表』(共編、笠間書院、2014)
『語彙史』(共編著、岩波書店、2009)
『方言の形成』(共著、岩波書店、2008)



勝又 隆 教授

上代・中古の日本語

■研究テーマ

日本語文法史、特に係り結びや形式名詞述語文の研究
「上代における「連体形+ソ」文について」(『国語と国文学』86-7、2009)
「語順から見た強調構文としての上代「一ソー連体形」文について」(『日本語の研究』5-3、2009)
「上代におけるモノナリ文の用法と構造」(『坂口至教授退職記念日本語論集』、創想社、2020)



金田 智子 教授

日本語教育学、授業分析

■研究テーマ

・目的別日本語教育の内容と方法、地域日本語教育
・日本語教師の成長、教師教育の内容と方法
『日本語教育の過去・現在・未来2:教師』(共著、凡人社、2009)
「学習者と教師のやりとりから—自己研修型教師をめざして」(『日本語教育の研究』、528-554、外語教学与研究出版社、2016)
『新・日本語教育を学ぶ—なぜ・なにを・どのように教えるのか—』(共著、三修社、2020)
『言語教育実践イマ×ココ』(編集委員、ココ出版、2012～現在)
『日本語学』(編集委員、明治書院、2020～現在)



鈴木 健一 教授

近世文学

■研究テーマ

江戸時代の文学、江戸詩歌の表現、古典の受容
『江戸詩歌史の構想』(岩波書店、2004)
『江戸古典学の論』(汲古書院、2011)
『古典注釈入門』(岩波書店、2014)
『江戸諸國四十七景一名所絵を旅する』(講談社、2016)
『天皇と和歌 国見と儀礼の一五〇〇年』(講談社、2017)
『近世文学史論』(岩波書店、2023)
『日本近世文学史』(三弥井書店、2023)
『日本人にとって教養とはなにか』(勉誠社、2024)
日本近世文学会常任委員、和歌文学会委員



千野 裕子 准教授

中古文学

■研究テーマ

平安後期を中心とした物語のテキスト構造の分析
『女房たちの王朝物語論』(青土社、2017)
「古典の翻案の可能性—実践者の立場から」(『中古文学』108号、2021)
「王朝の女房たちと万葉集」(『現代思想』47-11、2019)
中古文学会、日本文学協会、物語研究会・会員



中上 亜樹 准教授

日本語教育学、第二言語習得論

■研究テーマ

・教室内の第二言語習得
・第二言語習得研究の成果を取り入れた効果的な教室指導
・日本語教育の内容と方法
「理解中心の指導法「処理指導」と産出中心の指導との比較研究—形容詞の比較の指導を通して—」(『日本語教育』151号、2012)
「文理解における日本語学習者のストラテジー使用に関する研究—インプット処理ストラテジーに着目して—」(『21世紀アジア学研究』13号、2015)



中嶋 真也 教授

上代文学

■研究テーマ

『万葉集』、『古事記』、『日本書紀』などを対象にした表現・享受の研究
『コレクション日本歌人選 大伴旅人』(笠間書院 2012)
「心もしのに」考(『国語と国文学』80-8 2003)
「古代文学の葛城」(『駒澤國文』57 2020)
『古典を学んでよかった!と思える探究型授業のつくりかた』(共著、文学通信、2025)



中野 貴文 教授

中世文学

■研究テーマ

鎌倉・南北朝期の文学。中世文学の享受史、古典教育。
『大学生のための文学レッスン 古典編』(共著、三省堂、2010)
『徒然草の誕生—中世文学表現史序説』(岩波書店、2019)
『女学生とジェンダー—女性教養誌『むらさき』を鏡として』(共著、笠間書院、2019)
『古典を学んでよかった!と思える探究型授業のつくりかた』(共著、文学通信、2025)
中世文学会・説話文学会・日本文学協会会員



中山 昭彦 教授

近現代文学

■研究テーマ

1890年代～1930年代の文学・美術・国語政策・メディアの重層的関係の研究。
近現代文学研究。
『機械=身体のパリティック』(編著、青弓社、2006)
『ヴィジュアル・クリティシズム』(編著、玉川大出版部、2008)
『現代思想と政治』(共著、平凡社、2016)
日本近代文学会・日本文学協会・日本映像学会・会員



前田 直子 教授

現代日本語学

■研究テーマ

・現代日本語の文法、特に副詞的複文の記述的研究
・日本語教育における文法研究
『日本語の複文—条件文と原因・理由文の記述的研究』(くろしお出版、2009)
『日本語入門』(共著、NHK出版、2020)
『現代語文法概説』(共著、朝倉書店、2020)
『日本語受身文の新しい捉え方』(共著、くろしお出版、2022)
日本語学会、日本語教育学会、日本語文法学会



山本 芳明 教授
(2026年3月退職予定)

近代文学

■研究テーマ

1910年代以降の文学場の変動に関する研究
・私小説と批評の関係
・文学の経済的変動と作家の生活の関係
・文化市場の歴史的考察
『カネと文学』（新潮選書、2013）
『漱石の家計簿』（教育評論社、2018）
日本近代文学会会員



鷲尾 龍一 教授
(2026年3月退職予定)

言語学

■研究テーマ

・東西諸言語の比較研究
・言語学史の研究
Does French Agree or Not?, *Linguisticae Investigationes* 18.
The Japanese Passive, *The Linguistic Review* 6.
Auxiliary Selection in the East, *Journal of East Asian Linguistics* 13.
「결과표현의 유형」『어학연구』 33.
「일본어에서 본 조동사 선택 현상」『어학연구』 38.
Voice Extension in Passives and Causatives, in *Handbook of Japanese Contrastive Linguistics*, De Gruyter Mouton.



英語英米文学専攻

授与する学位

博士前期課程：修士（英語英米文学）

博士後期課程：博士（英語英米文学）

▶ 専攻の特色

本専攻が目指すものは新たな「英語英米文学」の創造です。本専攻は「イギリス文学」「アメリカ文学」「英語学」「英語教育学」という伝統的な英文学の研究分野はもちろんのこと、アイルランド文学やカナダ文学、社会史としての英米文学、アメリカ都市論やジェンダー表象研究、理論言語学、認知言語学、外国語としての英語教育など、従来の枠組みから大きく外れる研究対象にも果敢に取り組んできました。「指導教員および研究分野など」をご覧ください。本専攻の教員はすべてシェイクスピア、オースティン、ジェイムズ、フォークナー、英語語法文法、語用論、英語教育などそれぞれの専門的な研究対象をもちながら、その狭い学問分野にとらわれず、著書、翻訳の出版や講演を通じ幅広い領域で最新の研究成果を問いつづけてきました。本専攻に所属した院生は、指導教員の研究成果を追っていきただけでその領域のトップレベルの知識に触れることができますが、本専攻では授業のみならず個別指導、研究会などを通じて、院生一人ひとりの関心と能力に応じて、個々の可能性を最大限に引き上げることを目指しています。

英語あるいは英語圏の文学を学部教育よりもさらに深く研究してみたいと思う方であれば、本専攻はすべて受け入れ可能です。私たち教員とともに英語英米文学の新たな地平を切り拓いていこうではありませんか。

▶ 指導の方法と研究環境

研究テーマに応じて、院生一人ひとりに指導委員会が設置されます。指導委員会は主指導教員1名と副指導教員1名ないし2名で構成され、定期的に院生の研究進捗状況をチェックし、丁寧な論文作成指導にあたります。特に博士後期課程在籍者に対しては研究者育成という観点から、在籍中または満期終了後3年以内に博士論文を作成できる環境とサポートを整備してきました。

▶ 研究成果の発表

本専攻所属の院生は同時に学習院大学英文学会の会員となります。学会会員には、研究集会での口頭発表、本学会誌への論文掲載の機会が与えられます。この口頭発表と論文掲載を通じて、自分の研究対象の優れた点と課題を認識することにより、所属院生はごく自然に修士論文もしくは博士論文作成のプロセスを進んでいくことができます。

本専攻の院生にとりわけ強く勧めるのは、日本英文学会、日本アメリカ文学学会、日本英語学会、日本言語学会、全国語学教育学会などの全国規模の活動に積極的に参加することです。実際に多くの院生が全国規模の学会で研究発表を行っています。本専攻に所属すれば、先輩たちの後ろ姿を見て、論文の投稿などおのずとチャレンジする意欲が湧いてくるはずです。

▶ 課程修了後の進路

本専攻からは優れた人材がつつぎつつぎに出ていて、大学・高校等の研究・教育機関をはじめ、出版社など各方面に進出して優秀な業績を積みあげ、高い評価を受けています。修了生が専任教員として就職した主な研究・教育機関は以下のとおりです。藤女子大学（北海道）、青森大学、弘前大学、群馬大学、山梨大学、学習院大学、学習院女子大学、早稲田大学、法政大学、東京理科大学、駒澤大学、國學院大学、関東学院大学、東洋大学、帝京大学、玉川大学、防衛医科大学校、北里大学、麻布大学、実践女子大学、淑徳大学、東京家政学院大学、流通経済大学、東京電機大学、東京工芸大学、松蔭女子大学、日本大学、二松學舎大学、埼玉工業大学、中京大学、名古屋女子大学、関西学院大学、高知大学、熊本大学、鹿児島国際大学、尚美学園大学、福岡女学院大学、志学館大学など（この他にも、4年制大学、短期大学、高等専門学校、国公私立高校など多数）。

▶ 設置科目

博士前期課程授業科目

英米語学特殊研究
作家作品特殊研究

英米語学演習
英米文学演習

博士後期課程授業科目

英米語学特殊研究
作家作品特殊研究
英米語学演習

英米文学演習
博士論文指導

▶ 大学院生の研究テーマ

【博士前期課程】

- 日系アメリカ人強制収容とその後の日系アメリカ人の創作活動について
- Tim O'Brien 作品におけるベトナム症候群
- Paul Auster の New York Trilogy
- 19 世紀アメリカの性風俗と女性の社会的地位—ヴィクトリア・ウッドハルを通して
- ホーソーンの牧師
- 20 世紀のニューヨーク移民
- オスカー・ワイルド作品におけるマゾヒズム
- 『トロイラスとクレシダ』における悪女表象
- 英語・日本語・タイ語の話しことばにおける目的語非省略の語用論的な類型化と比較
- The Constant Appearance of Accusative Whom in Present-Day English
- 法助動詞 can と無意志知覚動詞が共起した時の can の意味解釈
- Effects of Extensive Reading on Attitudes Towards Autonomous Learning
- 上級英語利用者による語用論的認識に関する研究—第二言語語用論的能力の形成とその経過に関する調査
- 日本人英語教師及び学習者の授業における英語使用と母語使用の信念について
- オンライン授業と対面型授業のモチベーションの違い（CALL and Motivation）
- 日本語母語話者の大学生が英語学習時に選択する学習方略と不安尺度に関する混合研究

【博士後期課程】

- Subcreation: Symbol and Imaginary World
- Music in E. M. Forster's Works
- 宇宙論から見るシェイクスピア作品における社会的弱者の表象
- シェイクスピア劇における聴覚的イメージとその演劇的效果
- フリア・アルバレス作品における権力構造
- 文構造と意味の関係—言い方に違いがあるのはなぜか—
- Explore the effect of tasks in extramural digital game based language learning

新井 景子 教授

アメリカ小説

■研究テーマ

19世紀半ばから20世紀初頭のアメリカ小説における女性像。ナサニエル・ホーソーン、ヘンリー・ジェイムズ、イーデリス・ウォートン、ウィリアム・キャザーなど。

〔著書〕“A Portrait of a Self-Made Woman: Lena Lingard in *My Antonia*” (Holly Blackford, ed., *Something Complete and Great: The Centennial Study of My Antonia*, Fairleigh Dickinson UP, 2017)、「イーデリス・ウォートン『歓楽の家』における社会風刺と感傷性」(平石貴樹、後藤和彦、諏訪部浩一編著『アメリカ文学のアリーナ ロマンズ・大衆文学史』、松柏社、2013年)

〔主要論文〕“Phoebe is no Pyncheon: Class, Gender, and Nation in *The House of the Seven Gables*” (*The Nathaniel Hawthorne Review* 34, 1&2, 2008)



Louise Ohashi 教授

Applied Linguistics

■研究テーマ

Second language acquisition, language education, digital technology, artificial intelligence, learner autonomy, motivation, multilingualism

〔主要論文〕◆ Ohashi, L. & Alm, A. (2024) ChatGPT and language learning: University educators' initial response. *Technology in Language Teaching & Learning*, 6 (1), 1-23. ◆ Ohashi, L. (2024) Machine translation in language education: A systematic review of open access articles. *Kenkyu Nenpou: The Annual Collection of Essays and Studies*, 70, 105-125. (2024) ◆ Ohashi, L. (2023) Rethinking education in the age of AI. *Mind Brain Ed Think Tank*, 9 (3), 9-14.



上岡 伸雄 教授

(2026年3月退職予定)

アメリカ文学

■研究テーマ

現代アメリカ小説。ドン・デリーロ、ポール・オースター、フィリップ・ロス、ティム・オプライエンなど。

〔著書〕『テロと文学 9.11 後のアメリカと世界』(集英社新書)、『名演説で学ぶアメリカの歴史』(研究社)、『ニューヨークを読む—作家たちと歩く歴史と文化』(中央公論新社)、『英語力は英訳本で磨く—日本の文豪作品からオタク文学まで』(NHK 出版)など。

〔訳書〕ヴェイユ・タン・ウェン『シンバサイザー』(早川書房)、ジョージ・ソウダーズ『リンカーンとさよならの霊魂たち』(河出書房新社)、F. スコット フィッツジェラルド『美しく呪われた人々』(作品社)、シャーウッド・アンダーソン『ワインズバーグ・オハイオ』(新潮文庫)など。



桐山 大介 准教授

アメリカ文学・アメリカ文化

■研究テーマ

ウィリアム・フォークナーやラルフ・エリソンら、20世紀前半から中盤のアメリカ作家を中心に研究。

〔主要論文〕「見えない人間の故郷、ラルフ・エリソンの南部／南西部」(『フォークナー』23号) “But Mostly U. S. A. is the Speech of People: Struggles over Whitmanian Democracy in John Dos Passos' *U.S.A.*” (*The Journal of the American Literature Society of Japan*, 19)、「荒野に降りそそぐ悲嘆の雨—『行け、モーセ』における罪と贖罪の歴史ととも一つの歴史」(『フォークナー』19号) [英訳書] ウィリアム・フォークナー著、マルカム・カウリー編『ボータブル・フォークナー』、ウィリアム・フォークナー著『響きと怒り』



今野 弘章 教授

英語学

■研究テーマ

語用論、日英語対照

〔主要論文〕“The *If You Be* Construction as a Speech Act Construction” (*English Linguistics* 21, 2004年)、「イ落ち：形と意味のインターフェイスの観点から」(『言語研究』141, 2012年、日本言語学会論文賞受賞)、“The Grammatical Significance of Private Expression and Its Implications for the Three-Tier Model of Language Use” (*English Linguistics* 32, 2015年)



田辺 千景 教授

アメリカ文学

■研究テーマ

主として独立戦争直後から南北戦争前後の女性作家によるアメリカ感傷／家庭小説の系譜。およびヘンリー・ジェイムズ、イーデリス・ウォートンなど。

〔著書〕「分裂と統合—ルイザ・メイ・オールcottの南北戦争」(『抵抗することば—暴力と文学的想像力』南雲堂、藤平育子監修、高尾直知、舌津智之編、2014)、「ルイザ・メイ・オールcottと大衆小説」(『アメリカ文学のアリーナ：ロマンズ・大衆文学史』松柏社、平石貴樹、後藤和彦、諏訪部浩一編、2013)など。

〔翻訳〕『コケット—あるいはエライザ・ウォートンの物語』(松柏社、ハナ・ウェブスター・フォスター著、2017)



富田 祐一 教授

(2026年3月退職予定)

英語教育学

■研究テーマ

外国語教育政策、英語科教育法、第二言語習得。

〔著書〕「国際理解教育の一環としての外国語会話肯定論：競争原理から共生原理へ」(『小学校での英語教育は必要か』慶應義塾大学出版会、2004年)、『英語教育用語辞典』(大修館書店、2019年)、『CEFR: Academic perspectives from Japan』(*The Common European Framework of Reference: The globalisation of language education policy*, 2012年)。



中野 春夫 教授

(身体表象文化学専攻と兼任)

イギリス文学

■研究テーマ

イギリス16世紀・17世紀演劇、イギリス・ルネサンス文

化(天文学、地理学、魔術、魔女狩り、新大陸、ファッション、庭園、王権など)。

〔著書〕『恋のメランコリー—シェイクスピア喜劇世界のシミュレーション』(研究社)、『シェイクスピアの英語で学ぶこころの決めゼリフ』(マガジンハウス)、『シェイクスピアは彼らの同時代人』(『英語青年』2005年4月号から1年間連載)、など。



平田 一郎 教授

英語学

■研究テーマ

語用論、意味論、理論言語学、生成文法理論

[著書]『グライス語用論の展開』(ひつじ書房)、『音と形態』(共著、朝倉書店)、『徹底比較 日本語文法と英文法』(共著、くろしお出版)、『ことばのおもしろ事典』(項目執筆、朝倉書店)、『ことばの思想家50人—重要人物からみる言語学史—』(項目翻訳、朝倉書店)

[主要論文] "On unsuccessful utterances in pragmatics," *Journal of Pragmatics* 216. "Implicatures of vocatives and their theoretical implications," *English Linguistics* 37. 「指示表現のレトリック」『語用論研究』20.



Andrew Fitzsimons 教授

アイルランド文学

■研究テーマ

Irish Literature; Contemporary Poetry; Film Studies.

[著書] 'The Moment of a Poem: Kinsella's "Baggot Street Deserta" and Beyond.' *Where Love and Imagination Colour the Dark: Essays on Thomas Kinsella* (Wake Forest UP, 2025): 108-131. "Ego Dominus Tuus": Castiglione, Dante, and Yeats.' *ELOPE: English Language Overseas Perspectives and Enquiries*, 21(2), 15-31 (2024). "More Irish than the Irish": Joyce and the Immigrant.' *Journal of Irish Studies XXXIX* (September, 2023): 23-35. *Bashō: The Complete Haiku of Matsuo Bashō* (University of California Press, 2022). 'Thomas Kinsella,' *Cambridge Companion to Irish Poets* (Cambridge University Press, 2017) *The Sea of Disappointment: Thomas Kinsella's Pursuit of the Real* (UCD Press) ; ed. *Thomas Kinsella: Prose Occasions 1951-2006* (Carcaret Press) .

[主要論文] 'The English Language Issue: Irish Studies in Japan' *Irish University Review* 50: 1 (2020). 'The Co-operative Muse.' *Lit Matters: The Liberlit Journal of Teaching Literature* / Vol.2 (2016). Web.



眞野 泰 教授

研究科委員長

イギリス文学

■研究テーマ

現代、特に1980年代以降のイギリス小説(イアン・マキューアン、グレアム・スウィフト、ジョン・マクレガーなど)。翻訳。

[著書]『英語のしくみと訳しかた』(研究社)、『学習英文法を見直したい』(共著、研究社)

[訳書] ジュリアン・バーンズ『アーサーとジョージ』(共訳)、ジョン・マクレガー『奇跡も語る者がいなければ』、グレアム・スウィフト『ウォーターランド』『最後の注文』『マザリング・サンデー』、イアン・マキューアン『夢みるピーターの七つの冒険』(中央公論新社)など。



吉野 由利 教授

イギリス文学・アイルランド文学

■研究テーマ

主としてイギリスとアイルランドの近代小説。帝国拡張の文脈におけるネーションの表象とジェンダー編成。感受性と文学。受容論。物語理論。児童文学と教育論。

[主要論文] 'Jane Austen and the Reception of Samuel Johnson in Japan' (*Johnson in Japan*, Backnell University Press)、Edgeworthstown House' (RÊVE: The virtual Exhibition (European Romanticism in Association, <http://www.euromanticism.org/virtual-exhibition/>), 「マライア・エッジワースと帝国、ファッション、オリエンタリズム」(『十九世紀「英国」小説の展開』松柏社)、「船乗りの物語を紡ぐ女性—ジェイン・オースティン『説得』再考」(『ジェンダーと自由』彩流社)、「ジェンダーとネーションの再構築—マライア・エッジワース『ベリнда』(1801)」(『ジェンダーから世界を読むII』明石書店)、「小説、ネーション、歴史—マライア・エッジワースとウォルター・スコット」(『女性作家の小説サブジャンルへの貢献と挑戦』英宝社)、「Voices, Identities, and Nations in the Narratives of Maria Edgeworth」(ロンドン大学博士論文)等。



ドイツ語ドイツ文学専攻

授与する学位

博士前期課程：修士（ドイツ語ドイツ文学）

博士後期課程：博士（ドイツ語ドイツ文学）

▶ 専攻の特色

ドイツ語ドイツ文学専攻は、最新の研究動向を積極的に取り入れ、ドイツ語圏の文学研究および言語学研究はもちろんのこと、文学や言語をさらに大きな視点から一つの文化現象として捉えた「文化研究」を行う場を提供しています。文学・文化の分野での研究では、狭い意味での文学テキストにとどまらず、さまざまな文化現象を社会文化誌（史）、メディア論、ジェンダー論、近年の文化理論などの観点から研究することが可能です。言語学の分野では、歴史言語学、統語論、造語論、意味論といった従来の枠組みの中での研究はもちろん、語用論、テキスト言語学、認知言語学、社会言語学、メディア言語学といった新しい領域に関しても、幅広く研究できる指導体制が整っています。またドイツ語教育の実践にもつながる視点からの研究を行うこともできます。

どの授業も少人数の理想的な環境で行われ、個人の研究テーマに即したきめ細かい指導がなされています。また、ティーチング・アシスタントとして教育面での実践経験を積む機会もあります。

▶ 研究成果の発表

本専攻では博士前期課程の段階から、積極的に研究成果を発表することを奨めており、学習院大学ドイツ文学会の研究発表会、および同学会誌への論文投稿も活発です。また学習院大学人文科学論集にも論文を発表することができます。

学習院大学ドイツ文学会は、大学院生が中心になってさまざまな企画を行うことのできる場でもあり、講演会の開催や映画上映会など、大学院生の自主的な運営を重視して行われています。

博士後期課程の学生は、日本独文学会をはじめとする学術団体での研究発表を指導教員のサポートを受けながら積極的に行っています。また、日本学術振興会「特別研究員」に採用されたり、日本学術振興会「若手研究者海外挑戦プログラム」によりドイツ語圏の大学で研究を進めて、研究成果の発表につなげる大学院生も少なくありません。

▶ 研究環境と設備

書庫の蔵書は充実しており、洋書およそ50,000冊、和書およそ4,000冊におよびます。また、文学、語学、思想、演劇の各分野にわたって他に類を見ない豊富な内容を誇るものです。これらの図書は、自由に閲覧、利用することができます。

大学院生が自由に利用できる研究室は2つあり、大学院生専用のコンピュータ4台が設置されています。学内ネットワークおよびインターネットに接続し、資料検索や論文作成のために自由に利用することができます。また、

雑誌や新聞等のデータベースも充実しています。

▶ 学位の取得の現状と展望

博士前期課程では、全員が修士号を取得しています。博士後期課程では、できるだけ課程在籍中に博士論文を提出できるように、段階的にきめ細かい指導を行っています。

▶ 国内外における学術交流の現状

国内学術交流として、慶應義塾大学大学院および早稲田大学大学院、中央大学大学院、学習院女子大学大学院の研究科設置科目を履修することができます。

国際的学術交流としては、DAAD（ドイツ学術交流会）をはじめとする各種奨学金により、博士前後期課程を合わせ、近年では毎年2名前後の学生がドイツまたはオーストリアに留学をしています。

▶ 修了後の進路

本専攻においては、博士前期課程修了者は、更に後期課程に進学する場合だけでなく、就職する場合もあります。就職者の半数以上は、ドイツ関連の組織や企業など、それまでに培った知識やドイツ語力を生かせる職場に勤めています。近年ではドイツ大使館、日独協会等に就職した例があります。博士後期課程の修了者の多くが全国の大学や高等学校においてドイツ語の教育にたずさわっています。また日本学術振興会PD研究員となり研究を続けるケースもあります。

▶ 大学院生の研究テーマ

【博士前期課程】

- ・疑問文における否定の機能
- ・ドイツの対外言語政策
- ・旅行記における「異文化」への視線
- ・桂離宮における「つくられた」単純さ—ブルーノ・タウトの世界観を作り上げた背景—
- ・19世紀ドイツにおける民衆メルヘンの受容
- ・ポストドラマ論から見た能
- ・ゲーテとシャミッソーに於ける異文化の記述
- ・16世紀の印刷ビラ・小冊子の話しことば性と報道性をめぐって
- ・トルコ系移民のドイツ語の「模倣」と「定着」——義的な概念理解のための考察——
- ・ab, aus 動詞の語彙概念構造に関する比較研究
- ・言語意識から見た言語変化
- ・第二次世界大戦以前の日独交流と両国相互の異文化体験
- ・20世紀初頭のモダンダンスにおける身体
- ・ファム・ファタルの表象とその受容—ヴェデキントの“ルル”を中心に
- ・ドイツ連邦議会における政党・政治家の言説に見られる言語的戦略
- ・Malを用いた副詞規定による量化
- ・メタファーから見たKrieg（戦争）—類似する争いの語彙との比較
- ・ヘルマン・ヘッセの作品における時代批判
- ・同性愛とナチズム
- ・ジェイムス・クリュスの作品群におけるファンタジー
- ・戦争報道における比喩と換喩：日本語とドイツ語の報道を比較して

【博士後期課程】

- ・近現代ドイツ語に関する社会言語学的考察—新聞・コミックなどのテキストを対象にして—
- ・記憶と文学
- ・世紀転換期における言語危機の演出
- ・18世紀オーストリアにおける文章語の「標準化」に関する計量的分析
- ・20世紀前半のドイツにおける日常的「文字景観」—ドイツ語史とドイツ史の交点を探る
- ・ドイツ教育改革期における芸術教育の受容
- ・トーマス・マンのアジア像
- ・ドイツ語の助数詞構文における抽象名詞の振る舞い
- ・Absentivの通時的研究

▶ 設置科目

博士前期課程授業科目

ドイツ語学特殊研究
ドイツ語史特殊研究
ドイツ文学特殊研究
ドイツ演劇特殊研究
ドイツ語学演習
ドイツ語史演習
ドイツ文学演習
ドイツ演劇演習
修士論文指導

博士後期課程授業科目

ドイツ語学特殊研究
ドイツ語史特殊研究
ドイツ文学特殊研究
ドイツ演劇特殊研究
ドイツ語学演習
ドイツ語史演習
ドイツ文学演習
ドイツ演劇演習
修士論文指導

指導教員および研究分野など

伊藤 白 教授

現代ドイツ文学

■研究テーマ

「イメージ」とは常に作られたものであるという意識のもと、ドイツ語圏の文学作品（特にトーマス・マンの文学及び戦後の現代文学）やドイツ語で書かれたさまざまな言説を題材に、そこに描かれた「他者」—ジェンダー的、文化的、政治的、民族的、宗教的他者等—のイメージを研究しています。また、その他者像の理解を助けるものとして、日独の経済、社会、政治的背景の比較に取り組んでいます。



犬飼 彩乃 准教授

現代ドイツ文学、フィクション論、翻訳論

■研究テーマ

今世紀の文芸作品を中心に、虚構と事実の混淆について研究しています。近年ではメディアの発達により虚実の境界がますますわかりにくくなり、情報の受け手もリテラシーを求められる場面が増えてきました。虚構の専門家である作家たちの創作のみならず、ドイツ語圏では批判的に見られてきた社会における虚構の濫用や、事実とは何かといった哲学的観点をもあわせみること、虚構の構造的特徴を考察しています。



小林 和貴子 教授

現代ドイツ文学、オーディオドラマ

■研究テーマ

私たちは普段、言葉を使って考えています。私たちの思考は、いわば言葉によって限定されているわけですが、現代ドイツ文学の中には、実験的な言葉を通して新しい考えを示すと同時に、日常の言葉そのものを変えようとする作家が複数います。例えばイルゼ・アイヒンガーやエルンスト・ヤンドルですが、これらの作家の言語遊戯的な作品を通して、現代の抱える問題やその問題を乗り越えるための糸口となる視点について、思考を巡らせています。



清野 智昭 教授

ドイツ語学、コーパス言語学、ドイツ語教授法

■研究テーマ

ある事柄を表すときに、ドイツ語ではどのような構文を、どのような理屈で用いるのでしょうか。この問いに関して、特に有生性が構文に与える特性、つまり、生き物（典型的には人間）と事物の表され方に注目した研究を行っています。ドイツ語は無生物を主語にする構文が日本語よりも多いのですが、無制限に可能というわけではありません。このようなテーマについて、コーパスと呼ばれる大量の言語資料から用例を集めて一つ一つ分析したり、コンピュータを用いて大らかな傾向をはじき出したりしています。



田中 雅敏 教授

ドイツ語学、理論言語学、社会言語学

■研究テーマ

ドイツ語の文法理論、とりわけドイツ語（ゲルマン語）の枠構造に関連する研究、語順研究などを行っています。具体的には、定動詞位置、主文・副文構造、かきませ（文成分の相対的順序関係の操作）、話題化などです。近年は、形態統語論のテーマ（名詞の複数形の形態、冠詞や形容詞のシグナル語尾）や、キーツドイツ語、若者言葉などのドイツ語の変異（社会言語学）にも取り組んでいます。



田丸 理砂 教授

（身体表象文化学専攻と兼任）

ドイツ文学、フェミニズム文学批評

■研究テーマ

ワイマール共和国時代には女性の作家や芸術家が急増します。その背景には社会構造の変化による文化の民主化および大衆化があります。印刷メディアの繁栄や写真、映画といった新しいテクノロジーはこれまで表現する側にいなかった人たちにもその可能性を与えました。こうしたなかで生まれた主として女性作家の文学作品とともに最近のドイツ語圏文学を研究しています。



Thomas Pekar 教授

ドイツ文学、文化論

■研究テーマ

近代文学、亡命移民文学、異文化接触などです。例えば、19～20世紀のドイツや欧州において、日本文化がどのように受容されていたか、ナチス時代に欧州からアジアを経由して米国等へ移住した人々が、アジア特に日本文化をどのように理解し、その後の作品にどう影響したかという研究です。また、最近では現代を対象とした異文化接触研究（文化交流、インターカルチュラル研究、トランスカルチュラル研究など）に取り組んでいます。



フランス文学専攻

授与する学位

博士前期課程：修士（フランス文学）

博士後期課程：博士（フランス文学）

▶ 本専攻の特徴

フランス文学専攻は、母体のフランス文学科の誕生から数えて、すでに60年以上の歴史を持ち、その間、研究者、大学人のみならず、詩人、評論家、演劇人などを含む多様な人材を輩出してきました。「伝統」と「新しさ」、本専攻の特色はこの両面にあると言えるでしょう。学問を単なる抽象的な知識として捉えるのではなく、我々の現在と密接に結びついた生きた事象と考へ、そこに働きかけようとする、そして研究の対象とするのが古典であれ現代の作品であれ、先入見を排した自由な視点から常に新たなものを見出そうとすること、これが本専攻の培ってきた精神といえます。

▶ 何をどのように学ぶか

学部の「フランス文学科」は2007年度に「フランス語圏文化学科」と改称しましたが、大学院の「フランス文学専攻」は今日まで名称変更を行っていません。それは本専攻が従来から、フランス語とフランス語圏に関わっている限り、どのようなテーマを扱うことも積極的に奨励してきたという自負があるからです。じっさい、本専攻に提出された論文の研究対象は、狭義の文学・思想のみならず、言語、演劇、映画など、多岐にわたっています。

これは研究対象であれ、研究方法であれ、学生の皆さんの自由を最大限尊重する、という我々教員の指導方針のあらわれでもあります。我々が銘記するのは、「汝の欲することをなせ Fais ce que voudras」(フランソワ・ラブレー)という言葉です。もちろん必要に応じて相談に乗り、ともに考え、指導や助言も行いますが、皆さんの自由な研究を第一に尊重するということです。

授業としては、各教員が自身の専門を生かしたテーマについて開講しており、研究についての基礎的な知識や方法論、フランス語のテキストの綿密な読解、それをもとに口頭や文章で発表したり議論を交わしたりするやり方などを習得できます。それに加えて、早稲田大学、慶應義塾大学、青山学院大学、白百合女子大学、上智大学、獨協大学、武蔵大学、明治学院大学、明治大学との単位互換制度も設けており、自分の関心に従って様々な授業を受けることが可能です。また、専攻学生は協定留学制度を活用し、近年、本学との提携校であるリヨン第Ⅱ大学とパリ大学(旧パリ第Ⅶ大学)に留学しています。

▶ 研究環境

本専攻は、規模こそ大きなものではありませんが、それぞれの専門分野において優れた業績を有する教員を擁しています。それに加えて、入手困難な貴重な雑誌・資料なども含む、およそ8万冊におよぶ蔵書を誇ります。これに加えて、研究室には映画や演劇を中心としたビデオやDVDが数多くとり

揃えられています。

辞典類やコンピュータを備えた院生室も整備されていて、学生同士の議論や交流の場として機能しています。また、留学やフランス語学習、様々な文化的なイベントに関する情報が豊富に掲載されていますし、学内でも、フランス語やフランス語圏の文化に関する講演会やイベントなどを随時開催しています。各自の興味・関心にしたがって、さらに知見を広げることができるのです。

▶ 修了後の進路

博士前期課程の修了後は、就職する方が多いですが、自分の研究をさらに深めるべく、後期課程へ進学し研究者を志す方もいます。就職先としては一般企業や各種機関が多いですが、大学外諸教育機関やフランス語を活かせる職場、出版や映画、演劇などの現場で活躍する者もあり、その分野の広さも当専攻の特色の一つです。

後期課程へ進んだ方は、多くの場合、さらなる研鑽の機会を求めてフランスへ長期留学をしています。後期課程の修了者は、ほぼ全員が全国各地の大学や高等学校においてフランス語・フランス文学などの教鞭をとっています。

▶ 大学院生の研究テーマ

【博士前期課程】

- ・ テオフィル・ゴーティエ研究
- ・ フランソワ・モーリヤック研究
- ・ アルベール・カミュ研究
- ・ ジェラルド・ド・ネルヴァル研究
- ・ ロマン・ガリ研究
- ・ ル・コルビュジエ研究
- ・ シュルレアリスム研究

【博士後期課程】

- ・ ル・クレジオ研究
- ・ アンドレ・ブルトン研究
- ・ アナトール・フランス研究
- ・ ジョルジュ・ペレック研究
- ・ ジャン＝ジャック・ルソー研究
- ・ ロラン・バルト研究
- ・ ラクロ研究

▶ 設置科目

博士前期課程授業科目

フランス語学特殊研究	フランス文学演習
フランス文学特殊研究	フランス演劇演習
フランス語学演習	修士論文指導

博士後期課程授業科目

フランス語学特殊研究	フランス文学演習
フランス文学特殊研究	フランス演劇演習
フランス語学演習	博士論文指導

指導教員および研究分野など

大野 麻奈子 教授

19・20世紀フランス文学、演劇

■研究テーマ

ヴィクトル・ユゴーとサミュエル・ベケットを中心とした
19世紀・20世紀の演劇研究。



志々見 剛 准教授

16世紀フランス文学

■研究テーマ

モンテーニュを中心としたフランス16世紀の文学・思想。特に、同時代の歴史論との相互的な関係を研究している。



鈴木 雅生 教授

20世紀フランス文学

■研究テーマ

ル・クレジオをはじめ、西欧を相対化する視点を持つ
近現代のフランス作家を軸に研究している。



須藤 健太郎 准教授

(身体表象文化学専攻と兼任)

フランス映画史

■研究テーマ

批評と実作が緊密に結びついたヌーヴェル・ヴァーグを
中心に、フランス映画史および映画批評史の研究に取り組んでいる。



田上 竜也 教授

20世紀フランス文学、フランス現代思想

■研究テーマ

ポール・ヴァレリーを中心とする近現代作家、および
文学と建築のかかわりや、身体論などについて研究
している。



内藤 真奈 准教授

20世紀フランス小説、写真論、病気表象

■研究テーマ

エルヴェ・ギペールを中心とした20世紀の小説、写
真などの視覚的イメージとテキストの関係、および文
学作品における病気表象について研究している。



Thierry Maré 教授

フランス演劇、ルネサンス文学、詩法、翻訳論

■研究テーマ

話し言葉と書き言葉の相互関係を具体的に分析し
て、文学的言説の特徴、役割、目的の（仮の）定
義をめざす。



心理学専攻

授与する学位

博士前期課程：修士（心理学）

博士後期課程：博士（心理学）

▶ 専攻の構成と特色

心理学専攻は、博士前期課程と博士後期課程とで構成されています。

博士前期課程では、学部で学んだ心理学の知識や方法をさらに広げ、深めることになります。そして、自分で選んだテーマについての先行研究を丹念に調べ、実験や調査を行い、最終的に修士論文を完成させることになります。

博士前期課程修了後、研究職を目指して大学院博士後期課程に進学する人、国家公務員試験や地方公務員心理職試験に合格して公務員になる人や一般企業に就職する人がいます。通常の就職活動を行い、前期課程終了後に一般企業に就職する院生は少なくありません。これは心理学専攻の特色とも言えます。心理学研究には、実験デザインを立案し、収集したデータを解析するという理科系の側面が含まれています。工学系や理学系の大学院修了者が企業に就職することは一般的ですが、このことが心理学専攻博士前期課程修了者にもあてはまるのかもしれません。

博士前期課程で修士論文をまとめた後、さらに研究を深めたい人は、修了後、博士後期課程を受験することになります。一方、博士前期課程修了後に一度就職した後、さらなる研究の必要性を感じて博士後期課程を受験する人もいます。博士後期課程に入学する院生は、学習院大学大学院心理学専攻博士前期課程修了者に限られているわけではありません。本大学院臨床心理学専攻修了者はじめ他大学院修了者にも門戸が開かれています。

後期課程の院生は、前期課程での研究をさらに発展・深化させ、研究成果を積極的に学会や研究会で発表することになります。そして、そのデータを研究論文にまとめて公刊することが求められます。最終的には、博士論文の作成をめざすことになります。



「本学卒業生による連続講演会」風景

博士後期課程の修了者の多くは、研究職をめざし、研鑽に励んでいます。後述するとおり、現在、多くの修了者が大学教員や研究所研究員として活躍しています。

また本学にゆかりのある研究者を招き、本専攻主催の「心理学研究の最前線・本学卒業生による連続講演会」を行っています。この講演会は、学生が卒業生の進路および心理学の最新の研究に触れることができる良い機会となっています。

▶ 指導の方法

心理学専攻には、認知心理学、社会心理学、発達心理学および教育心理学を専門とする教員がおり、専門的な研究と教育を行っています。心理学という学問は、それぞれの分野を明確に区別できるものではありません。たとえば認知心理学の研究には、社会心理学、発達心理学および教育心理学も密接に関わってきます。そこで本専攻では、大学院生1名に対して3名の指導教員が担当する指導委員会体制を採っています。博士前期課程の院生が修士論文で追究するテーマは様々な領域に関連するものが多いため、この懇切丁寧な指導委員会体制は効果的なものになっています。

博士後期課程の院生の指導にも、同様に3名の教員による指導委員会体制がとられています。

▶ 研究環境

大学院生用研究室として、北2号館に共同研究室が設けられています。院生研究室にはロッカーのスペースがあり、院生各人に1つの専用ロッカーが割り当てられています。また、院生専用の図書や資料が閲覧できるスペースや、院生専用のパソコン、カラープリンター、シュレッダーなども配置されています。院生室にあるパソコンの大部分は学内LANによって学習院大学計算機センターに接続していますから、院生は院生研究室に居ながら、文献検索やSPSSによる統計解析を行うことができます。また院生研究室は、学科事務室の閉室後、日曜・祝日あるいは長期休暇中も、所定の手続きを取ることによって利用することができます。

院生研究室は情報収集に役立つだけでなく、院生同士のディスカッションや情報交換の場としても機能しています。現在、大学院生研究室は、臨床心理学専攻の院生と共同利用する形態になっています。分野が異なる院生が同居することで、お互いに教え合い、刺激し合うという良い雰囲気が生まれています。

北2号館7階には心理学実験室7室と計算機室1室が、東1号館14階には実験室1室があります。実験室は事前に予約することで、研究のために自由に利用できます。各実験室には様々な心理学実験装置が設置されており、院生の研究に役立っています。

計算機室は学部生との共同利用ですが、開室中は自由に利用することができます。また、心理学科事務室でSPSSを搭載したノートパソコンが数十台用意されており、それらを借り出すこともできます。

早稲田大学大学院および中央大学大学院との間で単位互換に関する協定が結ばれています。これらの大学院で取得した単位は、修了のための単位となります。研究環境ということではありませんが、院生には学部生向けの演習でのTA（ティーチングアシスタント）として、教育経験を積む機会があります。現在、心理学専攻博士後期課程の院生は、学部2年生の心理学実験演習Iと3年生の心理学実験演習IIのTAを担当しています。

人文科学研究科に在籍する大学院生には、その研究を支援するために博士前期課程においては5万円、博士後期課程においては20万円を研究費として給付しています（2023年度実績）。心理学専攻の院生は主に、専

門書や高価な洋書の購入、学会の入会費、学会の年次大会の参加費や旅費、研究協力者への謝礼にこの研究費を充てています。また後述するような海外での研究発表に対しては、学習院大学の大学院生全体に対する別の奨学金を利用することができます。

▶ 院生の研究活動

心理学専攻では、院生に自らの研究成果を学会発表することを奨励しています。博士後期課程の院生はもちろんのこと、博士前期課程の院生にも積極的に発表するよう指導しています。その結果、前期課程1年目から学会発表する院生が増えています。学会発表することで、大学院生は成長します。指導委員会の教員とは違う視点でのアドバイスを受けることで視野が広がることもあります。そして何よりも、院生自身の研究へのモチベーションを高めるという効果があります。最近の院生の活動は国内の学会参加にとどまらず、2015年にイタリアで行われた第14回ヨーロッパ心理学会には、前期課程の院生を含め数名が参加し、研究成果を発表しました。

臨床心理学専攻の大学生も含め大学院生同士での自主的な研究会も定期的に開催されています。大学院生は各自が現在取り組んでいる研究の計画の立案やデータ分析の方法を発表します。専門領域の異なる相手に自分の研究テーマをわかりやすく説明したり、観点の違う立場からの意見やアドバイスを受けたりは、大変勉強になります。また学会での研究報告やシンポジウムの話題提供の本番に向けての練習や、学会誌に投稿予定の論文の検討や審査を受けた後の査読コメントへの対応の検討も研究会のなかで行っています。

心理学専攻では大学院生自らの興味関心を尊重しています。このため本学専攻内でとどまるのではなく、研究テーマの近い院生が集まる大学の垣根を越えた研究会にも積極的に参加して、その領域の最先端の研究について議論を行っています。このようにして他大学の院生とも交流をもっています。



大学院生のオンライン研究会での様子

▶ 修了後の主な進路

博士前期課程修了後は、国家公務員試験や地方公共団体心理職試験に合格して心理職に就く人、一般企業に就職する人、そして大学院博士後期課程に進学する人がいます。

■博士前期課程

警視庁(心理職)、厚生労働省、防衛省(航空医学実験隊)、人事院、法務省、日立製作所、理化学研究所

■博士後期課程

【教育機関】

愛知教育大学、青山学院大学、神奈川大学、北九州市立大学、京都大学、駒沢女子大学、静岡英和学院大学、十文字学園女子大学、昭和女子大学、専修大学、千葉商科大学、日本福祉大学、福島大学、法政大学、琉球大学

【研究機関】

科学警察研究所、鉄道総合技術研究所、日本色彩研究所、労働政策研究・研修機構

▶ 大学院生の研究テーマ

【博士前期課程】

- ・ 課外活動による ADHD 傾向学生の心理的問題に寄与する要因
- ・ 援助要請の有無が援助行動の評価に与える影響
- ・ 自己複雑性と対人葛藤場面における対処方略との関連性の検討
- ・ 友人関係の葛藤における許しの研究
- ・ 課題の印象が意思決定場面を仮定した先延ばしに及ぼす効果の検討
- ・ 観賞魚に対する印象構造の研究—印象と視覚要因の関係性の検討—
- ・ 負の感情価を持つ刺激が虚記憶に及ぼす影響—DRM パラダイムを用いた検討
- ・ 二者間の積極的伝達場面における透明性の錯覚
- ・ 教師サポートが目標構造、目標志向、学校における適応と行動に及ぼす影響
- ・ 中学生・高校生における目標志向性、達成情動および自己制御方略の関係
- ・ 感情価の違いにおける思考抑制の効果
- ・ 社会的認知過程と行動様式に対する情動の影響と性差
- ・ 非協力者の顔の再認と選択した行動の記憶

【博士後期課程】

- ・ 志向される他者はどのような存在として認識されるのか
- ・ 青年期における多様なキャリア形成プロセスの様相：中国の地方大学に通う大学生を対象とした検討
- ・ キャリア発達の教育的支援
- ・ encoding プロセスにおけるフォルスメモリーの抑制効果
- ・ 社会的実在性に依拠する認知的矛盾の統合過程の検討
- ・ ステレオタイプ脅威効果の抑制—社会的比較を用いて—
- ・ 子どもの学校適応に影響を与える要因の検討
- ・ 大学生の就職活動時における目標と就職活動の関連
- ・ ストレス体験の意味の変容および自己像の変容過程
- ・ スポーツ場面における誤認知

▶ 設置科目

博士前期課程開講授業科目

心理学特殊研究 2	発達研究の動向と課題
心理学演習 1	意識研究における基礎的視座
心理学演習 2	動機づけの科学
心理学演習 3	教育心理学の諸問題
心理学演習 4	対人関係と well-being に関する社会心理学研究
*副タイトルは 2023 年度の内容。	

博士後期課程授業科目

心理学特別研究 1	心理学特別研究 8
心理学特別研究 2	心理学演習 1
心理学特別研究 3	心理学演習 2
心理学特別研究 4	心理学演習 3
心理学特別研究 5	心理学演習 4
心理学特別研究 6	博士論文指導
心理学特別研究 7	

指導教員および研究分野など

伊藤 忠弘 教授
(臨床心理学専攻と兼任)



社会心理学、教育心理学

■研究テーマ

自己と他者、個人と社会の2項関係から、対人行動や動機づけを捉えようとしています。社会心理学のテーマでは、援助行動、互惠の利他行動、社会貢献行動のような他者と自己の利害が絡む問題や、他者に対する自己呈示や他者評価を介した自己防衛、自己高揚に関心があります。教育心理学のテーマでは、親の期待や社会的価値の内面化や、重要な他者が目標達成に向けた努力に影響を及ぼす他者志向的動機づけについて研究しています。質問紙調査の他、実験室実験や面接調査を併用しています。

今井 久登 教授
(臨床心理学専攻と兼任)



認知心理学、実験心理学、認知科学

■研究テーマ

意識的あるいは無意識的な認知の過程を実験室実験を通じて研究しています。知覚的な潜在記憶の研究を中心に、記憶の想起に伴う意識の性質や、記憶と報酬の関係を記憶の抑制との関係から調べるといったことにも取り組んでいます。実験室実験はその厳格さゆえに問題によっては検証しにくい場合もあるため、研究手法に関して、質的な手法も含めて、柔軟に取り入れることを心がけ、日々研鑽しているものの、私の場合、得意とするのは（そして最終的に面白いと感じて戻ってくるのは）やはり実験です。生涯発達の観点、意識に関する科学的理論の進展や哲学的な視点からの学びも大切にしています。

篠ヶ谷 圭太 教授
(臨床心理学専攻と兼任)



教育心理学

■研究テーマ

学習方略や動機づけに関する心理学の知見にもとづいて、自立した学習者を育てる方法を追究しています。特に家庭学習に着目して、効果的な予習や復習のあり方や、家庭学習と授業を連動させた指導のあり方について研究してきました。「教育現場に役立つ心理学研究」を行うことを大切にしており、自身の教育実践や、学校の先生との協同実践を通じて得られた知見を、理論と結びつけながら積極的に発信しています。

宮崎 弦太 准教授
(臨床心理学専攻と兼任)



社会心理学

■研究テーマ

親しい人間関係を構築・維持する中での心理・行動について、相手との関係性や社会環境の影響という観点から研究を行っています。最近の主な研究テーマは、恋人関係や夫婦関係において「相手のためになること」をするときの動機が本人とパートナーに及ぼす影響についてです。親密関係の理想とされている動機（共同的動機）が本人やパートナーの well-being に常に良い影響を及ぼすわけではないことについて、特定の関係にいる本人とパートナーの心理・行動、そして、それぞれの日々の心理・行動というマルチレベルデータを収集し、研究しています。

山本 政人 教授
(臨床心理学専攻と兼任)



発達心理学

■研究テーマ

乳幼児の認知・言語発達、コミュニケーションの発達と、愛着など乳幼児と親をはじめとする養育者とのかわりが発達に及ぼす影響を主なテーマとしています。特に最近は成人も含めた他者とのかわりの障害について愛着理論の観点から検討しています。また、ピアジェ、ワロン、ヴィゴツキーら20世紀のヨーロッパの研究者の発達理論を見直し、現代の発達の問題への対応に生かせるものを探り出そうとしています。

臨床心理学専攻

授与する学位

博士前期課程：修士（臨床心理学）

博士後期課程：博士（臨床心理学）

▶ 専攻の特色

臨床心理学専攻は、臨床心理業務を行う専門職としての「臨床心理士」を養成する大学院博士前期課程として日本臨床心理士資格認定協会の指定を受けた専攻です。2008年度より、学内研修施設として学習院大学心理相談室の活動が始まり、2011年度から指定大学院・第1種となりました。専任教員は、心理臨床の実践を重視する心理臨床家であり、その専門は児童期、思春期、成年期、老年期の心理療法、神経症、境界例の心理療法、障害児・虐待待児の心理臨床、学校臨床など広い領域を網羅し、その技法もそれぞれ精神分析、分析心理学、イメージ表現療法、夢分析、遊戯療法など多様性に富んでいます。

大学院生の心理臨床実践訓練は、学習院大学臨床心理相談室における心理臨床実践がその中核です。この心理臨床教育プログラムでは、各大学院生は熟練臨床心理士とのペアワークやスーパービジョンによって、実践経験を深め、心理臨床家としての基本姿勢をしっかりと身につけることができます。この学内実習に加えて、学外実習として医療施設（単科精神科病院や神経心療内科、小児科クリニック）や養護施設、教育現場における学習支援およびSC補助の活動を行います。現場での体験を多面的に考察する指導がていねいに行われます。

臨床心理面接技法については、少人数でのゼミでの討論やケースカンファレンスでの全体討論などで実践的な理解を深めます。臨床心理査定技術に関しては、心理検査の歴史的背景を理解し技法に熟達し心理所見を書くための演習を行います。

毎週一回、すべての院生とスタッフが一堂に集まって行うケースカンファレンスは、心理臨床教育における重要な授業として位置づけられています。ここでは個人情報の扱いに関する十分な配慮のもとで実習事例の検討が行われ、教員と大学院生がディスカッションを展開します。ここでは、臨床事例の理解のあり方について、実践的に学ぶことができます。心理臨床に熟達した教員から多角的に臨床的な視点を学ぶことができる貴重な時間です。

専任教員の専門性の充実に加えて、各領域の第一線で活躍する講師を迎え、老年心理学、スクールカウンセリング、児童福祉心理臨床、発達心理臨床、家族心理学、心理療法論、精神分析、投映法などの特論講義の質の高さにも特筆すべきものがあります。

▶ 研究環境

心理臨床家にとって、臨床心理学研究は、こころの世界に対する認識を深め、心理臨床業務の向上のために、たゆみなく継続されていく課題です。それは自身の臨床活動を理解し、とらえ直し、また多くの他の心理臨床家と経験や知見を分かちつために、自己の経験を公共性のあるものにしていく営

みでもあります。修士論文作成に向けて、大学院生1名について3名の指導教員が指導する体制です。

大学院生のための共同研究室には、約10台のコンピューターが設置され、そのうちの数台が学内LANによって学習院大学計算機センターとつながり、文献検索、情報検索、統計解析に活用されています。実験室が8室あり各自の研究のために使用することができます。

心理学科書庫には、心理学の専門書が数多く所蔵されています（合計約2万冊）。また、継続的に購読している研究誌は、洋雑誌が約170誌、和雑誌が約90誌です。これらの雑誌は、心理学の幅広い分野のものを網羅しており、大学院生の研究に役立っています。

▶ 修了後の主な進路

博士前期課程修了後は、国家公務員試験や地方公共団体心理職試験に合格して心理職に就く者や、臨床心理士や公認心理師の資格を取得して教育センターや病院・クリニックに勤める者がいます。また、博士後期課程への進学者が増加しています。主な進路先は、以下のような機関です。

【教育機関】学習院大学、神奈川大学、駿河台大学、駒沢女子大学

【公務員】東京都心理職、千葉県心理職、法務省

【相談関係】上尾の森診療所、足立区こども支援センターげんき、厩橋病院、大田区教育センター、葛飾区総合教育センター、川崎市こども家庭センター、川崎市精神保健福祉センター、キューブ・インテグレーション(株)、高齢・障害・求職者雇用支援機構、小金井市教育委員会、国立国際医療研究センター病院、国立成育医療研究センター、小平市教育相談室、小平市立小学校スクールカウンセラー、桜ヶ丘記念病院、児童養護施設希望の家、児童養護施設若草寮、児童養護施設星美ホーム、児童養護施設聖ヨゼフホーム、多摩国分寺こころのクリニック、たわらクリニック、千葉・柏リハビリテーション学院、手賀沼病院、東京都教育委員会、中野区南部教育相談室、西東京市教育相談室、練馬区心理教育相談員、南埼玉病院、東川口いずみクリニック、藤澤こどもクリニック、船橋市立医療センター、まちどりクリニック、メモリークリニックお茶の水、やまだこどもクリニック、横浜市青葉区こども家庭支援課、横浜市東部病院、若葉クリニック

▶ 大学院生の研究テーマ

大学院生は自分自身の研究テーマを設定して、指導教員のサポートのもと、研究をすすめます。

- ・親子関係が子どものソーシャルサポート獲得に及ぼす影響
- ・愛着の世代間伝達が子どもの母性意識に及ぼす影響について
- ・投影法にあらわれる解離性体験
- ・箱庭療法における異物の意味について
- ・風景構成法と死生観についての一考察
- ・親密な二人関係と治療関係との比較
- ・心理療法における言葉の力
- ・自己の在り方と抑うつ・不安との関連
- ・仮想的有能感と攻撃性との関連について
- ・「ひきこもり」からの回復期の心理療法に関する研究
- ・スクィグルから生まれる物語生成過程の検討
- ・社会人におけるアレキシサイミア傾向と夢との関連について
- ・内的対象喪失からの回復過程について
- ・成人前期女性における身体的症状へのフォーカシング適用の試み
- ・小学校1年生児童におけるS-HTP法表現の変化について

▶ 設置科目

- 臨床心理学特論
- 臨床心理面接特論
- 臨床心理査定演習Ⅰ（心理的アセスメントに関する理論と実践）
- 臨床心理査定演習Ⅱ
- 臨床心理基礎実習
- 心理実践実習Ⅰ
- 臨床心理実習Ⅰ（心理実践実習Ⅱ）
- 臨床心理実習Ⅱ
- 投影法特論
- 心の健康教育特論（心の健康教育に関する理論と実践）
- 心理療技法特論（心理支援に関する理論と実践）
- 心理療技法論Ⅰ・Ⅱ
- 学校臨床心理学特論（教育分野に関する理論と支援の展開）
- 障害者（児）心理学特論（福祉分野に関する理論と支援の展開）
- 精神医学特論Ⅰ（保健医療分野に関する理論と支援の展開）
- 精神医学特論Ⅱ
- 家族心理学特論（家族関係・集団・地域社会における心理支援に関する理論と実践）
- 老年心理学特論（福祉分野に関する理論と支援の展開）
- 犯罪心理学特論（司法・犯罪分野に関する理論と支援の展開）
- 産業・労働心理支援特論（産業・労働分野に関する理論と支援の展開）
- 認知心理学特論Ⅰ
- 社会心理学特論Ⅰ・Ⅱ
- 教育心理学特論Ⅰ
- 発達心理学特論Ⅰ
- 心理学研究法特論Ⅰ・Ⅱ

▶ 臨床心理学専攻でいかに学ぶのか？

4人の専任教授が共同で全員を指導する体制が本学臨床心理学専攻の伝統です。臨床家としての実践を大切にする4人の教員は、それぞれ多様な個性派です。その個性豊かな指導だけでなく、学外のスーパーバイザーからの指導も受けることができます。多くの臨床家と出会いながら、心理療法的面接のあり方、心理療法・心理アセスメントの理論、心理検査の施行法、解釈法、フィードバックの実践について、実践的なトレーニングを積み重ね、現場で臨床心理士として機能するための基本的な姿勢を、しっかりと身につける2年間です。

▶ 心理専門職をめざす道の入り口

どんなエキスパートも最初は初心者でした。その最初の一步をどのように踏み出すかによって、その後の心理専門職としての歩みが大きく方向づけられていきます。本学臨床心理学専攻での臨床心理士養成では、学習院大学臨床心理相談室における実習に力を入れています。2017年現在160余校の臨床心理士養成指定大学院の第一種指定校には大学院生の実習施設として附属の臨床心理相談室が設置されています。本学の臨床心理相談室は、2013年（公財）日本臨床心理士資格認定協会の視察を受けてA認定評価を受けました。その地域に根付いた活動状況は、学習院大

図1 相談室開設年からの対面・オンライン面接のべ回数の推移

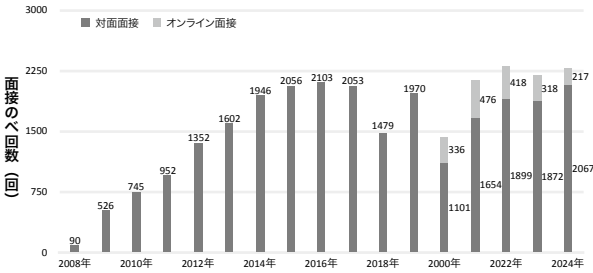


図1 相談室開設年からの対面・オンライン面接のべ回数の推移

学臨床心理相談室面接のべ回数の推移(図1)に示されています。

大学院の最初の半年は、実習に入る前に必要な基礎として臨床心理学、臨床心理面接、臨床心理査定、心理療法の理論を学びます。

夏休み前後から医療や福祉、教育の現場に入り、まず現場を知る実習が始まります。後期に入ると相談室の事例を担当することができます。最初は、熟練者とペアを組んで子どもの面接や遊戯療法を担当します。どんな心理臨床家も最初の一步は初心者です。この初心者をしっかりと守る養成体制が臨床心理士養成カリキュラムの特徴です。熟練したパートナーのリードのもとで、一回一回のセッションについて丁寧にスーパービジョンを受けながら、初心者として遊戯療法や臨床心理面接を担当します。最初に担当した事例は、臨床家としての大切な一步として、指導教授が緻密なスーパービジョンを行います。このように熟練者の専門的指導を受けながら担当することで、心理療法の過程に参与する体験を持ち、そこで心理療法の基本姿勢を学びます。

▶ 臨床心理士と公認心理師の2資格に対応するカリキュラム

人々が抱える心の問題に心理的アプローチにより支援する専門資格として臨床心理士の専門性が広く認められる中で、2017年度に公認心理師法が施行され、心理専門職が国家資格として出発することになりました。2018年度カリキュラムより本学の臨床心理学専攻も、従来の臨床心理士養成を軸として、学部心理学教育と連動した公認心理師養成に対応しています。

▶ 地域に開かれた臨床心理相談室からの発信

臨床心理相談室と臨床心理学専攻の共催で、毎年、豊島区を中心とした近隣住民の皆さんを対象に、心理療法を生活に身近なものとして知っていただけるように、心理療法をテーマにした公開講演会をおこなっています。講演会の履歴は表1のとおりです。

これらの講演会の記録は、『心理療法の世界1—その学び』、『心理療法の世界2—その拡がり』（いずれも遠見書房）として刊行されています。

表1 講演会の記録

	開催日	テーマ	招待した講演者
第1回	2008年11月30日	こころの発達を考える	滝川 一廣、伊藤 良子
第2回	2009年 3 月 1 日	心理療法をどう学ぶか ―臨床心理士をめざす人たちへ―	成田 善弘
第3回	2010年11月 6 日	心理臨床のこれから ―その経験と学び―	山上 敏子、村瀬 嘉代子
第4回	2012年10月16日	C.G.ユングの「赤の書」に語られた困難の中の個性化過程 ―十牛図を手がかりにした理解の試み―	マレイ・スタイン
第5回	2013年11月30日	こころと身体のケアを考える ―全人的な心理療法の世界―	皆藤 章
第6回	2014年11月30日	日本人のこころと文化 ―傷つきから再生への道―	河合 俊雄、赤坂 憲雄
第7回	2015年11月29日	情動のイメージ表現	角野 善宏、佐藤 葉子
第8回	2016年11月20日	ありのままのわが子をみる大事さと難しさ ―「発達」という視点を味方につけて―	田中 千穂子(本学着任記念講演)
第9回	2017年12月 9 日	今知っておきたい子どものための精神医学	滝川 一廣
第10回	2018年12月15日	現代の子どもの心理療法とアート ―心の表現との出会い―	山中 康裕
第11回	2019年 5 月19日	子どもが育つということ ―からだところと関係性―	山上 雅子
第12回	2020年12月20日	人と人が会うことの力 ―認知行動療法は、こころの健康と病をどのようにアプローチするのか―	原田 誠一
第13回	2021年12月19日	心の育みと家族の団欒 ―福沢諭吉の家族教育論を手がかりとして―	山内 慶太
第14回	2022年10月 9 日	知と心を育むプレイセラピー ―プレイセラピー(遊戯療法)によって、子どもの心が本来の力を取り戻すのはなぜ?―	大山泰宏
第15回	2023年10月15日	こころの古層へのまなざし―心理療法・遊戯療法の世界―	河合俊雄
第16回	2024年12月15日	東京の歴史とアートと心理臨床	猪股 剛

大山 泰宏 教授

心理臨床学、精神分析的心理療法、
臨床心理学の言説研究

■研究テーマ

心理学の知識や技術を手がかりにしながら、人間の
ところにかかわる様々な現場（臨床）の問題解決を
めざす、心理臨床学が専門です。そこで生まれ、展開していく「臨床の
知」をキーワードに、心理療法の実践研究をおこなっています。私の用い
る主な方法は、精神分析的な概念と方法です。精神分析は、人間のこころ
の不思議に出会い探究し、自身の方法論や概念自体も常に再構築していく
柔軟な方法です。このことは、私の研究のもうひとつの領域である臨床心
理学の言説の研究にもつながります。たとえば、「無意識」という概念を
手に入れたとき、こころへのアプローチばかりでなく、人間観も大きく変
わりました。今や「あたりまえ」になっている概念が生まれた経緯やイン
パクトを詳しく研究し、それらが本来もっていた力を取り戻し、現代のこ
ころのテーマを描き直す研究です。



川崎 克哲 教授

臨床心理学、深層心理、イメージと転移

■研究テーマ

主に夢分析や箱庭療法などを「通路」として、心理
療法というものの実践と理論化を探究しています。心
理療法にとって来談者の悩みや症状の解消は大きな目的のひとつです。し
かし、むずかしく、かつおもしろいのは、そのような問題解決を目的的に目指
そうとすること自体が心理療法のプロセスに阻害的に回帰してくる構造があ
ることです。それゆえ、単純でリニアな因果論的プロセスだけではない「何
か」を実践・理論的に探索しています。



北山 純 教授

臨床心理学、心理療法、高齢者の心理臨床

■研究テーマ

これまで、精神科クリニック、高齢者の精神科デイケア、
大学学生相談室などで、臨床心理士・公認心理師
として心理臨床の仕事をしてきました。そのような臨床実践を基盤として、そ
こで表現されるクライエントの語りや、夢や描画といったイメージに着眼しなが
ら、心理療法における治療機序について検討することが主たる研究テーマ
です。近年は、青年期・成人期のクライエントにお会いすることが多いですが、
人が「若い」や「死」という抗えない時の流れの中でいかに生きるか、
という広く深いテーマについても関心を寄せてきました。



吉川 眞理 教授

臨床心理学、心理療法とその習熟過程、
心理査定、スクールカウンセリング

■研究テーマ

個人心理療法、箱庭療法、スクールカウンセリングの
実践体験をもとに、心理アセスメントや心理療法のプロセス、臨床心理士
の実践知獲得過程について探究しています。これまで取り組んだ研究テーマ
として、投映法ハンドテストの研究、遊戯療法におけるイメージ機能論、
ユング派の心理療法論、夢分析論、スーパービジョンにおける学び体験研
究があり、現在は、昔話、神話、祭祀を素材とした心の個性化過程研究
にも興味を持っています。



兼任教員

伊藤 忠弘 教授

(心理学専攻)

社会心理学、教育心理学

■研究テーマ

自己と他者、個人と社会の2項関係から、対人行
動や動機づけを捉えようとしています。社会心理学のテーマでは、援助行動、
互惠の利他行動、社会貢献行動のような他者と自己の利害が絡む問題や、
他者に対する自己呈示や他者評価を介した自己防衛、自己高揚に関心が
あります。教育心理学のテーマでは、親の期待や社会的価値の内面化や、
重要な他者が目標達成に向けた努力に影響を及ぼす他者志向的動機づ
けについて研究しています。質問紙調査の他、実験室実験や面接調査を
併用しています。



今井 久登 教授

(心理学専攻)

認知心理学、実験心理学、認知科学

■研究テーマ

意識的あるいは無意識的な認知の過程を実験室実
験を通じて研究しています。知覚的な潜在記憶の研究を中心に、記憶の
想起に伴う意識の性質や、記憶と報酬の関係を記憶の抑制との関係から
調べるといったことにも取り組んでいます。実験室実験はその厳格さゆえに
問題によっては検証しにくい場合もあるため、研究手法に関して、質的な手
法も含めて、柔軟に取り入れることを心がけ、日々研鑽しているものの、私
の場合、得意とするのは（そして最終的に面白いと感じて戻ってくるのは）
やはり実験です。生涯発達の観点、意識に関する科学的理論の進展や
哲学的な視点からの学びも大切にしています。



篠ヶ谷 圭太 教授

(心理学専攻)

教育心理学

■研究テーマ

学習方略や動機づけに関する心理学の知見にもとづ
いて、自立した学習者を育てる方法を追究しています。特に家庭学習に着
目して、効果的な予習や復習のあり方や、家庭学習と授業を連動させた指
導のあり方について研究してきています。「教育現場に役立つ心理学研究」
を行うことを大切にしており、自身の教育実践や、学校の先生との協同実
践を通じて得られた知見を、理論と結びつけながら積極的に発信していま
す。



宮崎 弦太 准教授

(心理学専攻)

社会心理学

■研究テーマ

親しい人間関係を構築・維持する中での心理・行動
について、相手との関係性や社会環境の影響という観点から研究を行って
います。最近の主な研究テーマは、恋人関係や夫婦関係において「相手
のためになること」をするときの動機が本人とパートナーに及ぼす影響につ
いてです。親密関係の理想とされている動機（共同的動機）が本人やパー
トナーの well-being に常に良い影響を及ぼすわけではないことについて、
特定の関係にいる本人とパートナーの心理・行動、そして、それぞれの日々
の心理・行動というマルチレベルデータを収集し、研究しています。



山本 政人 教授

(心理学専攻)

発達心理学

■研究テーマ

乳幼児の認知・言語発達、コミュニケーションの発達
と、愛着など乳幼児と親をはじめとする養育者とのかわりが発達に及ぼす
影響を主なテーマとしています。特に最近では成人も含めた他者とのかわり
の障害について愛着理論の観点から検討しています。また、ピアジェ、ワロ
ン、ヴィゴツキーら20世紀のヨーロッパの研究者の発達理論を見直し、現
代の発達の問題への対応に生かせるものを探り出そうとしています。



教育学専攻

授与する学位

博士前期課程：修士（教育学）

博士後期課程：博士（教育学）

▶ 専攻の特色

今、学校教育が大きく変貌しはじめています。社会の大きな変化、科学技術の急速な進展の中で、新たな学校教育の在り方が模索されています。学校教育の制度も、目的も、内容も方法も大きく変わろうとしています。

今後の国家間の競争においては、国民の創造性が大きな役割を果たすという認識が広がり、世界中で従来の「知識伝授型の教育」から「学習者中心の学び」への大転換がじわじわと進行しています。探究型の学習やプロジェクト型の学習が学校教育でもどんどん取り入れられるようになってきています。また、学校教育の規制緩和や分権化も多くの国々で進行しています。公的な統制力を弱め、地方や学校の自由度を高め、地域間、学校間の競争を促すことで活性化を図ろうという動きが顕著です。

このような変化の中で、教師の役割も大きく変わろうとしています。教師にはインストラクター（＝教授者）という役割だけでなく、ファシリテーター（＝促進者）という役割も求められはじめています。

教師教育においても高度化と専門化を迫られており、すでに欧米諸国はもとよりアジア諸国においても大学院レベルでの教師教育が一般化してきています。日本においても国立の教員養成系修士課程が教職大学院に移行したほか、現職教師の再教育や教職生活全体を見通したキャリア形成が教育改革の課題になっています。保護者の高学歴化が進行するなか、また教師が備えておくべき能力・技術等が高度化するなか、大学院レベルでの教師教育が標準になっていくのは必然の流れとなっています。

学習院大学では2013年度に文学部教育学科を創設しました。教育学科は小学校教員の養成を目的とし、未来志向型の教師教育を推進しています。そして、2015年4月に開設した教育学専攻においても、教育学科と同様に未来志向の教育研究を進めるとともに、以下に掲げる独自の教職専門性基準を設け、その達成を目指した質の高い教育研究と教育実践の専門家の育成を行います。

＜本専攻の掲げる教職専門性基準＞

1. 教職の公共的使命を深く認識し、子どもの学びの委託に応える教育科学と学習科学を体得している。
2. 学問的教養と教職教養を基礎として、教科の内容と学び方について深い理解を形成している。
3. 学校と教室の文化的・社会的文脈について認識し、創造性と協同性を啓発する方法で教育実践を遂行する。
4. 教育実践について反省的で系統的な研究を行い、専門家共同体の一員としての同僚性を発揮して学校経営に参加し、教育の質の向上に貢献する。
5. 市民性や多文化共生、持続可能性の教育など現代の課題を担い、地域の保護者や市民、他の専門家と協同して学校教育の創造的革新を推進する。

このように、変化の中で新たな教育の在り方を創造し、また、変化に対応できる教師教育を担うことができる教育研究者、大きな変動にしっかりと対応した学びに導くことのできる教育実践者（初等中等教師、教師教育者）を養成していくことが、本専攻の最大の特色と言えるでしょう。

本専攻のもう一つの特色は、このような変化をしっかりと受け止め、正面

から立ち向かおうという変革意識の旺盛な教授陣がそろっていることです。もしも古い体質の学校教育が身に染みついた教授陣が大勢を占める大学院であったら、大きな変化に対応できる教育研究者・教育実践者の養成は困難でしょう。未来の学校教育のあるべき姿をしっかり捉え、そのためにどのような教育研究が求められているのか、どのような教師教育が求められているのかを探究している教授陣をそろえることが可能なのは、新しく設置した大学院だからこそです。

▶ 何をどう学ぶのか

本専攻の教育課程には、教育基礎学コース、教育実践学コース、教育創造コースの3コースが設けられています。これら3コースは専門領域を示すというよりも本専攻の教育課程の三つのコアを表現しており、実際の学習においては3コースを越境して総合的に履修することになります。教職専門の理論的基礎となる「概説」、理論と実践の統合の基礎となる「事例研究」、テーマを絞って深く探究する「特殊研究」によって教育課程を組織することになっています。また、「事例研究」の履修単位数は全体の3分の1以上とするようにしています。「事例研究」を重視する理由は、専門家教育の中心は理論と実践の統合にあるからです。そこを起点としてこれからの学校教育はどのように変化していくのか、どのように変えるべきか、そしてどのような教育実践を追究すべきか、そのためにはどのような教師教育が求められるのかを、教授陣を交えながらも、入学者自身が互いに探究し、議論し合い、研究を深めていくことを期待しています。

▶ 設置科目

博士前期課程授業科目

必修科目

修士論文指導

選択必修科目

教育基礎学コース

教育史概説	教育史事例研究Ⅰ	教育史特殊研究Ⅰ
教師教育概説	教師教育事例研究Ⅰ	教師教育特殊研究Ⅰ
教育行政概説	教育行政事例研究Ⅰ	教育行政特殊研究Ⅰ
特別支援教育概説	特別支援教育事例研究Ⅰ	特別支援教育特殊研究Ⅰ

教育実践学コース

授業研究概説	授業研究事例研究Ⅰ	授業研究特殊研究Ⅰ
音楽教育概説	音楽教育事例研究Ⅰ	音楽教育特殊研究Ⅰ
国語教育概説	国語教育事例研究Ⅰ	国語教育特殊研究Ⅰ
社会科教育概説	社会科教育事例研究Ⅰ	社会科教育特殊研究Ⅰ
図画工作教育概説	図画工作教育事例研究Ⅰ	美術教育特殊研究Ⅰ
英語教育概説	英語教育事例研究Ⅰ	英語教育特殊研究Ⅰ

教育創造コース

算数とICT概説	算数とICT事例研究Ⅰ	数学とICT特殊研究Ⅰ
体育と健康・スポーツ科学概説	体育と健康・スポーツ科学事例研究Ⅰ	
体育と健康・スポーツ科学特殊研究Ⅰ		
理科と環境概説	理科と環境事例研究Ⅰ	理科と環境特殊研究Ⅰ
生活科と総合学習概説	生活科と総合学習事例研究Ⅰ	
総合学習特殊研究Ⅰ		
家庭科と食育概説	家庭科と食育概説事例研究Ⅰ	
家庭科と食育概説特殊研究Ⅰ		

専攻共通

教育学特別研究Ⅰ 教育学特別演習Ⅰ

博士後期課程授業科目

必修科目

博士論文指導

選択必修科目

教育基礎学コース

教育史事例研究Ⅱ	教育史特殊研究Ⅱ
教師教育事例研究Ⅱ	教師教育特殊研究Ⅱ
教育行政事例研究Ⅱ	教育行政特殊研究Ⅱ
特別支援教育事例研究Ⅱ	特別支援教育特殊研究Ⅱ

教育実践学コース

授業研究事例研究Ⅱ	授業研究特殊研究Ⅱ
音楽教育事例研究Ⅱ	音楽教育特殊研究Ⅱ
国語教育事例研究Ⅱ	国語教育特殊研究Ⅱ
社会科教育事例研究Ⅱ	社会科教育特殊研究Ⅱ
図画工作教育事例研究Ⅱ	美術教育特殊研究Ⅱ
英語教育事例研究Ⅱ	英語教育特殊研究Ⅱ

教育創造コース

算数とICT事例研究Ⅱ	数学とICT特殊研究Ⅱ
体育と健康・スポーツ科学事例研究Ⅱ	
体育と健康・スポーツ科学特殊研究Ⅱ	
理科と環境事例研究Ⅱ	理科と環境特殊研究Ⅱ
生活科と総合学習事例研究Ⅱ	総合学習特殊研究Ⅱ
家庭科と食育事例研究Ⅱ	家庭科と食育特殊研究Ⅱ

専攻共通

教育学特別研究Ⅱ 教育学特別演習Ⅱ

秋田 喜代美 教授

学校教育学、授業研究、カリキュラム研究

■研究テーマ

学校（園）における子どもと教師の発達およびその過程における対話と学びの環境のあり方、またメディアとしての絵本や読書の研究をしています。教室談話や校（園）内研修のあり方について、学校でのアクションリサーチとして、フィールドでの観察、関与、協働省察の中でネットワークを形成しながら研究を進めています。



飯沼 慶一 教授

環境教育、自然教育、生活科教育、理科教育

■研究テーマ

「子どもと自然」をキーワードに、環境教育の実践研究・歴史研究や動物の生態調査や教材開発に取り組んでいます。学校現場や社会教育の場で、子どもたちの自然体験の大切さや自然保護をいかに伝えていくかがテーマです。環境問題が叫ばれる中、私たちはいかに地球生態系の中で自然や生き物を大切にしながら共存していくかを考えます。



伊藤 亜矢子 教授

学校臨床心理学

■研究テーマ

スクールカウンセリングや教師コンサルテーションなどを通して、臨床心理学の視点から学校内の課題解決を促進するための研究を行っています。特に、学級の心理社会的な性格的な性質である「学級風土」をアセスメントして学級経営を考える学級風土コンサルテーションや、スクールカウンセラーの活動と養成について研究しています。



岩崎 淳 教授

国語科教育、古典教育、表現指導

■研究テーマ

現在は教材研究に重点をおいています。若いときにすぐれた文章に出会うのは幸福なことです。その人の理性・感性のあり方に大きな影響を与えます。小学校入学から高校卒業までに、人はどれくらいの文章を読むことができるでしょうか。教科書の中の文章は学習者に何を伝えてくれるのでしょうか。心の扉を開いてくれるのでしょうか。どんな世界に導いてくれるのでしょうか。そんなことを考えながら研究をしています。



梅野 正信 教授

(2026年3月退職予定)

公民系教育、歴史認識、人権教育、道徳教育

■研究テーマ

いじめ事件、ハンセン病問題、同時代史や歴史認識等、社会的課題の教材・授業開発研究に取り組んでいます。資料調査や課題当事者との出会いは、研究を深めるだけでなく、貴重な財産ともなります。社会的課題に向き合い、知的な出会いを広げる研究生活となることを期待します。



小原 豊 教授

算数・数学科教育、情報教育、STEM教材開発

■研究テーマ

算数・数学教育及び情報教育、STEM教材開発を研究しています。算数・数学は紀元前から紡がれた人間の知性であり、ICTによるイノベーションは現在の教育文化を改変する思想と技術です。大学院では、時代の変化に拠らず守るべきもの（不易）と常に刷新すべきもの（流行）を弁えつつ学ばねばなりません。先人の知見や成果に敬意を払いつつ、新しい時代の要請に学際的に応えましょう。



黒川 雅子 教授

教育法規、教育制度、生徒指導

■研究テーマ

価値観が多様化する社会において求められる学校の教育実践のあり方について研究をしています。学校における教育実践と保護者や地域住民が有する学校観の間で意見の衝突がしばしば生じるようになってきました。こうした衝突に適宜対応していく力が学校に求められている中、スクール・コンプライアンスの具体的内容について研究を重ねています。



佐藤 陽治 教授

体育学、健康教育学、運動生理学、スポーツ科学

■研究テーマ

身体活動の「Energetics」、スポーツ戦術の一般化など競技スポーツに関する科学的分析のほか、野外（冒険）教育と情操など、身体活動が心の健康に与える影響などを研究しています。



嶋田 由美 教授

(2026年3月退職予定)

唱歌教育史研究、音楽科教育、幼児期の表現活動に関する研究

■研究テーマ

1900年頃からいわゆる「唱歌調」の唱歌が日本の学校における音楽（唱歌）教育の主教材となる過程を中心に、唱歌教育史研究を行ってきました。その発展として最近では、幼児期の歌唱におけるリズム変容の問題にも取り組んでいます。また音楽教育の今日的課題として、歌唱教材、特に「共通教材」のあり方に関しても、「共通教材」の歴史的背景、学習指導要領における各期の取り扱いを中心に研究を推進しています。



須田 将司 教授

日本教育史、地域教育史、教育会史

■研究テーマ

特に1930～60年代を対象に、貧困・戦争・復興・成長といった激動期における教育史を研究してきました。近代化後発国であるがゆえに、「先進」と「伝統」の双方に関心が高い日本社会。その狭間でいかなる教育政策・教育実践が生み出されてきたのか。地域・教員団体・学校などに眠る史料を探索し、当事者の思いや願いを再現し、現代と重ね合わせる研究をすすめています。



宮盛 邦友 准教授

教育学、臨床教育学、教育法学、子どもの権利論

■研究テーマ

親子関係を基軸とした子どもの権利の観点から、「国家と教育」の関係を批判的に再構成する取り組みに挑戦しています。現代国家は教育に関して、なぜ、これほどまでに興味・関心をもっているのか、を解明するために、教育と教育行政の理念としての〈子どもの権利〉・〈学校の公共性〉を原理論的・計画論的に研究しています。そのテーマは、戦後教育史と戦後教育学、日本国憲法・教育基本法・子どもの権利条約法制と国民の教育権論、そして、総合人間学です。



アーカイブズ学専攻

授与する学位

博士前期課程：修士（アーカイブズ学）

博士後期課程：博士（アーカイブズ学）

▶ アーカイブズとは何か？

アーカイブズ（ARCHIVES、英語）という言葉は、ギリシャ語のアルケイオン（ARCHEION）を語源とし、本来、二つの意味をもっています。一つは、人間が社会の中で生み出してきた重要な記録のことであり、もう一つはそれを保存し活用するシステムや施設のことです。人間は、このアーカイブズを大切に、有効に使いこなすことによって社会・文化を維持・発展させてきました。

現在では、世界中の先進的な国々において、政府、企業、大学等研究機関、NPOなど様々な団体組織がアーカイブズを設置し、自らの記録を体系的に保存し、創造的活動の資源として活用しています。この業務を担う専門職は、アーキビスト（ARCHIVIST）と呼ばれ、レコードキーピング・システムの設計・運用から、アーカイブズ資料の収集・整理・記述、保存措置、そして利用者サービス等までを行います。

日本では、文書館、公文書館、あるいは史料館などの名称をもち、国・地方公共団体や大学等に設置されています。また企業においても、数え切れないほどのアーカイブズ・プログラムが運用されています。そこには、前近代の古文書・絵図等から、現代の写真、図面、録音資料、映像資料、オーラル・ヒストリー、公文書、そして種々の記録類や電子的情報などが系統的に保存されています。これらは、1) 個人や組織の法律上の権利を守り、2) 効果的な組織管理と経営に寄与し、そして3) 人間の文化・歴史と記憶を保護・継承することに、幅広く用いられます。この意味においてアーカイブズは、真に自由で開かれた社会にとって欠くことのできないシステムであると言えます。

▶ アーキビストという存在

このようなアーカイブズとしての記録を、個人や組織、国・社会の垣根を越えて、学術研究、ビジネス、市民生活などの場で自由に使うことができるようになった時、私たちは社会の豊かさや人間性を改めて認識し、未来への進路を確かめていくことができるのではないのでしょうか。

ところが、現実とは逆を向いているように見えます。政府や地方公共団体のさまざまな公文書管理は言うに及ばず、科学者や企業経営者、メディアによる証拠の隠蔽やデータの捏造・改ざんなどは、現在でも後を絶ちません。むしろデジタル時代においては、記録となる情報に対する「確からしさ」が失われ、かえって疑わしいものへと変わってしまうおそれすらあります。

アーキビストは、様々な分野、業界、団体、コミュニティでアーカイブズを開設・運営し、記録を中心とする情報資源を構築します。そして、人々が開かれた真正な記録に依拠して過去を省察し、自らの使命をしっかりとつかみ取り、そしてまた現在と未来のために、自らの行動を記録によって示しながら活動していく、という回路を社会の中に生み出す存在です。これによってアーカイブズは、先のような問題を一掃するだけでなく、新しい情報資源の拠点として未来を創造

的に切り拓いていくことが可能となる。このようなしくみの構築が、日本では著しく立ち遅れてきました。

▶ 私たちが目指すもの

日本のアーカイブズ関連機関において、アーキビストは必要性が認められながらも、これまで十分に配置されてきませんでした。その主な理由は、アーキビストを養成する充実した機関や資格制度が存在せず、人材を供給できなかった点にあります。1987年に日本ではじめて公的機関のアーカイブズについて規定した「公文書館法」は、国と地方公共団体に対し「歴史資料として重要な公文書等の保存および利用に関し、適切な措置を講ずる責務を有する」とし、「専門職員」を置くことを定めました。これは全ての行政機関にアーキビストを置く根拠となります。ただし、「専門職員を養成する体制が整備されていないことなどにより、その確保が容易でないため」に「当分の間」は地方公共団体での配置は必須ではないとされ、アーキビストの専門性や備えるべき技能についての国としての検討は前進しませんでした。

以来二十有余年、日本のアーカイブズ関係者は、国文学研究資料館や国立公文書館などのイニシアティブのもと、全国歴史資料保存利用機関連絡協議会、企業史料協議会、日本歴史学協会、記録管理学会、全国大学史料協議会、日本アーカイブズ学会などに集い、アーキビスト養成のための議論を深めてきました。また国際アーカイブズ評議会（ICA）の専門職教育研修部会（SAE）等に参加して、国際的なアーキビストやアーカイブズ学者と学術交流を重ね、諸外国の事例と国際的な標準・ガイドライン等について研究してきました。2006年10月には、第2回アジア太平洋アーカイブズ学教育国際会議（SAEほか主催）が学習院大学を主会場として開催され、この地域におけるアーカイブズ学教育の発展と課題について研究・討議が重ねられました。

こうした長年にわたる議論の所産の一つとして、アーカイブズ学専攻は2008年4月に、日本では初めてとなる大学院教育課程として開設されました。専攻では、本格的にアーカイブズ学（ARCHIVAL SCIENCE）の研究に取り組むことを通して、博士前期課程においては専門職に相応しい学識・技能およびそれを適用・応用する知的枠組みを身につけたアーキビストを、そして博士後期課程ではアーカイブズ学をさらに発展させ、次世代を担う専門職を教育することもできるアーカイブズ学研究者・教育者を育成します。

本専攻は、行政・企業等において記録管理やアーカイブズ関連業務に携わっている現職者、図書館・博物館等でアーカイブズ資料を取り扱っている司書・学芸員等、あるいはデジタル情報社会の中でアーカイブズを核とした新しい情報基盤の構築を目指す社会人等も、積極的に受け入れています。なぜなら、本専攻で身につけたアーカイブズ専門職の学識・技能が、社会の様々な現場・職域において適用され、応用されることによって、既存の業務がより確かなプログラムに発展したり、あるいは新しいスタイルのアーカイブズが開発されたりすることが期待されるからです。

このようにアーキビストの育成とアーカイブズの開発・発展は相互的な関係にあります。しかも、情報技術の発展に伴う大変革の時代の中にあって、日本では今、この両輪が動き始めています。未来のために、過去と現在の記憶を活用しようとする限り、欧米・アジア諸国などにおいてそうであるように、専門職に対する確かな需要が生まれつつあるのです。

▶ 教育課程の特徴と構成

近年では、アーカイブズ学教育・研究とアーカイブズ・プログラムの両面から、国際交流の機会も増え、国際化が進んでいます。このため教育課程は、ユネスコおよび欧米・アジア諸国のガイドラインやカリキュラムを分析・評価した上、授業科目の内容・バランスなどの点で、国際的標準に適合ものとしています。

もちろん、国によって背景となる歴史や文化は異なります。日本の場合には、アーカイブズ制度が未発達であり、市民の認知度が低いことや、前近代以来の膨大な古文書・絵図、行政文書、個人文書等が散逸の危機に瀕していること等が挙げられます。したがって本専攻においても、地域社会や組織団体の中で、整理・記述・保存や情報化等を実践していくことができる能力、デジタル時代においてもアーカイブズの理想を学問的・実践的に普及・啓発していくことのできる力の育成を重視します。

「コア科目」は概論を起点に、記録とアーカイブズを探究する認識論、管理のための知識と技法を学ぶ管理論、デジタル時代の新たな課題に向き合うデジタルアーカイブズ、これらを支える基盤となる理論研究からなり、アーカイブズ学の中核的知識を体系的に学ぶことが可能です。特にアーカイブズ管理及びデジタルアーカイブズについての演習科目は、現場における実践力の養成に留意したものです。

「学際科目」では、図書館情報学・博物館情報学の世界を知ること、より広い情報資源学という領域からアーカイブズ学をとらえる視点を獲得します。

「応用科目」は、学位論文に向けた研究を進める総合的な演習と、アーカイブズ施設の現場においてキャンパスでの学びの意義を確認し、あるいはその適用・応用のあり方を体験する実習からなります。特に博士前期課程の必修科目である「アーカイブズ実習」は、実践・実務重視の観点から、修了までの間に2週間以上の施設実習を2回行うことが求められます。

授業については、現職者・社会人等が履修しやすいように、平日の6時限目（午後6時より7時半まで）や土曜日を中心に配置するなどの工夫をしています。これにより仕事についておられる皆さんでも、博士前期課程を在学年限の2年間で修了することが可能になっています。

▶ 資格制度に対応するカリキュラム

アーカイブズの保存とアクセスを確立する専門職の重要性を広く認知させるため、2012年4月に日本アーカイブズ学会によって「登録アーキビスト」の取り組みがスタートしました。本専攻はこのような仕組みも積極的に活用して、数多くの優れたアーキビストを安定的に国・社会へと送り出してきたところです。

さらに、2009年に制定された公文書等の管理に関する法律にも刺激を受けながら、日本のアーカイブズ制度に実体を与えるために、主として公文書館で活躍する専門職の養成を目指した公的資格認証が2020年からスタートしました。本専攻のカリキュラムは、この「認証アーキビスト」制度にも対応しています。

本専攻の博士前期課程において所定の科目を履修し、アーキビストとして必要な知識・技能等について体系的に学ぶことで「准認証アーキビスト」となり、さらに一定の実務経験等を重ねることで、「認証アーキビスト」の資格を得ることが可能です。

なお、アーカイブズ学について博士後期課程まで学ぶことができる国内では唯一の大学院であり、高度専門職あるいは次世代を担う専門職を育てる研究・教育者を目指し、博士（アーカイブズ学）の学位を取得することも可能です。

本専攻にとって本当の財産となるのは、ここに学び、研究を高め合い、それぞれに羽ばたいていく大学院生たちです。出身学部・分野、老若男女を問わず、アーカイブズ学研究に意欲をもち、専門職としてのアーキビストを強く志望する者、またアーカイブズを核とした文化と社会を構築するために研究・教育を志す者たちが集まることを楽しみにしています。

▶ 設置科目

【コア科目】

アーカイブズ学概論I・II

アーカイブズ学理論研究I（アーカイブズとアーキビストの歴史）

アーカイブズ学理論研究II（海外文献講読）

記録アーカイブズ研究I～III（日本および東アジアの記録とアーカイブズ）

アーカイブズ管理研究I（記録管理法制）

アーカイブズ管理研究II（記録管理とレコードキーピングの理論と実践）

アーカイブズ管理研究III（記録の保存と修復）

アーカイブズ管理研究IV（視聴覚アーカイブ）

アーカイブズ管理演習（整理記述の理論と実践）

デジタルアーカイブズ演習（情報科学の適用と実践）

デジタルアーカイブズI・II（システムデザインとサービスの構築）

【学際科目】

情報資源論I・II（図書館情報学／博物館情報学）

【応用科目】

アーカイブズ学演習

アーカイブズ実習

指導教員および研究分野など

久保山 哲二 教授

計算アーカイブズ学

情報科学(機械学習・データマイニング)

■研究テーマ

アーカイブズ学に機械学習、情報セキュリティ、情報圧縮、情報検索等の情報科学の知見を取り入れ、新しい方法論を構築することを目指している。現在は、画像を含む大量の電子資料の保存、分析、組織化、検索、閲覧、メタデータの付与等に、人工知能の要素技術である機械学習やデータマイニングの手法を援用し、アーキビストを支援するための研究に取り組んでいる。



下重 直樹 教授

記録・アーカイブズ研究

記録管理制度論

■研究テーマ

アーカイブズを構造化された知的情報資源として取り扱うための方法論的研究を中核としながら、近現代日本の政治・行政機構の構造と政策形成プロセスを動態的に捉え、記録に対する評価と理解を深めることを課題の一つとしている。さらに、中長期的な制度設計と改善策を展望する観点から、日本を中心とした公文書管理史と制度に関する研究を両輪として進めている。



武内 房司 教授

(史学専攻と兼任)

記録・アーカイブズ研究

■研究テーマ

中国・ベトナムを中心とした東アジア・東南アジア世界における記録システムの研究や、特に中国の国家・民間社会集団の残した記録資料群の構造を研究してきた。近年では、阮朝期および植民地期ベトナムのアーカイブズの構造やその特質についても関心をもち、ベトナム国家アーカイブズセンターやフランス国立文書館海外館等に所蔵されているアーカイブズ資料などを用いて、中国の事例と比較しつつ、研究を進めている。



千葉 功 教授

(史学専攻と兼任)

記録・アーカイブズ研究

■研究テーマ

近現代日本における政治・行政機構の構造と特質を、記録作成システムの分析から研究する。従来は外交史料館所蔵の外務省記録を対象にして、戦前期日本における公文書管理制度の展開とその問題性を研究してきたが、これからは他の機構の公文書をも対象としていきたい。また、近現代の政治家の家に残された私文書(「私文書」とは言いながら、書類などの「公文書」が多く含まれていることが特徴である)の翻刻と構造分析にも興味があり、アーカイブズ学の中に私文書論も組み込んでいきたい。



保坂 裕興 教授

アーカイブズ管理論

アーカイブズ学演習

■研究テーマ

近世日本から現代社会に至る様々な記録・アーカイブズ、例えば村落共同体、寺社等宗教団体、大学・学校、博物館・資料館、官庁、地方公共団体、企業等が産み出す記録資料・公文書等を研究し、未来への展望をひらくようなアーカイブズ施設／プログラムを開発・構築することを主眼としている。また記録・アーカイブズに関する原理、国際標準、世界各国のアーキビスト教育を探究している。



身体表象文化学専攻

授与する学位

博士前期課程：修士（表象文化学）

博士後期課程：博士（表象文化学）

▶ 専攻の特色

学習院大学大学院にはすでにさまざまな古典的枠組みの専攻課程があります。しかし、20世紀後半から、そうした個別化した専攻では十分に扱いきれない学問の領域が明らかになってきました。それを私たちは「身体表象文化」と名づけ、その領域を横断的に研究する専攻課程を創始しました。

19世紀的な学問の中心にあるのはテキスト（文献、言葉）です。しかし、現代文化は表象（イメージ）抜きでは論じることができません。20世紀に発展した映画、アニメーション、マンガなどの芸術は、現代文化のなかに巨大な位置を占めていながら、これらをお互いに関連づけ、また、先行する演劇などを含め、表象芸術の新たな展開として研究する場所がほとんどありませんでした。私たちの「身体表象文化学専攻」はその空白を埋める学問の場所です。

生身の役者が世界を表象する演劇、スターの身体が魅力的に映しだされる映画、「キャラクター」が時空を超えて活躍するマンガ・アニメーション。これらはすべて身体とイメージを重要な出発点とし、現代のメディア環境や産業にまで大きな影響を及ぼしています。そこではいったい何が起きているのか？「身体表象文化学専攻」は、この実感としては分かっているが、学問的には依然未知の領域の探究に乗りだそうとするものです。

そして、言葉と理性の絶対化からは見えてこないイメージや身体の文化的可能性について、研究の基盤を提供することも本専攻の目的のひとつです。そのために、身体表象文化の歴史や理論も深く学んでいきます。特に身体表象はそれを生み出す社会のジェンダー観と密接に関係しています。舞台芸術、映画、マンガ、アニメーションなどによって表象される「身体」は、その時々のジェンダー観を増幅・強化するだけでなく、時には既成のジェンダー観を攪乱し変化をもたらします。このような身体表象の社会的作用を分析する鍵となるのが、「ジェンダー文化論」で学ぶジェンダー理論です。

この遠大な目的のために、本専攻はさまざまな分野で活躍する一流の研究者を揃えました。学生の皆さんもその関係のなかに飛びこみ、現代文化の最先端とその本質を自分自身の身体と頭脳でとらえてほしいと思います。

身体表象文化学は舞台芸術、映像芸術、マンガ、アニメーション、ジェンダーを対象とし、イメージ媒体として身体が作り上げてきた文化的意味を問い直す新しい学問領域です。舞台芸術、映像芸術、マンガ、アニメーション、ジェンダーという領域を言語、地域、専攻領域を超えて、身体と関わる文化学として有機的に組み合わせ、より幅広く、より深い奥行をもって学ぶことが本専攻の特色です。

したがって演劇、映画、マンガ、アニメーション、ジェンダーに関心のある方で、これらの対象を身体と関わる文化背景から研究してみたいという方には最適の専攻です。

▶ 何をどう学ぶのか

本専攻は①舞台芸術、②映像芸術、③マンガ・アニメーション芸術、④ジェンダー文化論という4つの分野を柱としています。本専攻に所属する学生はこの4つの分野から具体的な研究対象を選択して研究を行い、修士論文および博士論文を執筆することになります。

①舞台芸術、②映像芸術、③マンガ・アニメーション芸術の分野では「演習」と「批評研究」の2種類の科目を設置しており、演習科目では専門分野における基本的知識の確実な習得、批評研究科目では応用能力の開発と批評技法の習得を目指しています。この4分野以外にも、身体表象の制度的な枠組みを研究する「表象文化制度論演習」を設置しており、現場からの視点など、身体表象文化へのより広い、より具体的な視野を獲得することができます。

▶ 修了後の予想される進路

本専攻は演劇、映画、マンガ、アニメーションの領域において、批評研究活動を行う人材をシステムティックに育成する全国でもきわめてユニークな教育機関ですので、将来この領域で国際的に情報発信する人材の育成が期待できます。

▶ 設置科目

博士前期課程授業科目

舞台芸術批評研究
映像芸術批評研究 A
映像芸術批評研究 B
マンガ・アニメーション芸術批評研究
舞台芸術文化論演習 A
舞台芸術文化論演習 B
映像芸術文化論演習 A
映像芸術文化論演習 B
マンガ・アニメーション芸術文化論演習 A
マンガ・アニメーション芸術文化論演習 B
ジェンダー文化論演習
身体表象文化史演習
表象文化制度論演習 A
表象文化制度論演習 B
修士論文指導

博士後期課程授業科目

舞台芸術批評研究
映像芸術批評研究 A
映像芸術批評研究 B
マンガ・アニメーション芸術批評研究
舞台芸術文化論演習 A
舞台芸術文化論演習 B
映像芸術文化論演習 A
映像芸術文化論演習 B
マンガ・アニメーション芸術文化論演習 A
マンガ・アニメーション芸術文化論演習 B
ジェンダー文化論演習
身体表象文化史演習
表象文化制度論演習 A
表象文化制度論演習 B
博士論文指導

▶ 大学院生の研究テーマ

【博士前期課程】(例)

- ・アメリカ映画における日本人表象
- ・実相寺昭雄論
- ・今敏のアニメーション作品における「演じる女性」の表象
- ・イングマール・ベルイマン研究
- ・是枝裕和作品研究
- ・セックスワークとその言説・表象
- ・テニスマンガ『ベイブリーステップ』研究——そのリアリズムに着目して
- ・新海誠研究——背景に生命を吹き込むモノローグと音の技法
- ・インターネット文化における「メンヘラ」現象——女性の周縁的アイデンティティ

【博士後期課程】

- ・ポール・クロデル研究：リズム演劇構想の成立と展開
- ・フランスにおけるロマンティック・バレエの隆盛と衰退
- ・近代視覚文化としてのマンガ—その文化史的位置づけと美学的意義について
- ・19世紀西洋演劇におけるジャポニズム—「日本」の表象の変遷
- ・映画における屠畜・食肉の表象—フランスとアメリカの作品の検討を中心に
- ・日本のマンガ・アニメにおける「戦い」の表象
- ・マンガ版『風の谷のナウシカ』における生成論的研究—コミックス成立時における改稿から見た作品分析
- ・空間創造と位相の身体—オスカー・シュレンマーの舞台芸術理論

指導教員および研究分野など

佐々木 果 教授

マンガ・アニメーション芸術文化論

■研究テーマ

「マンガ・アニメーション芸術批評研究／芸術文化論演習 A」を担当。マンガやアニメーションおよびその関連領域について広く学際的な関心を持って研究しています。マンガの編集者として創作の現場に関わっていた経験から、作品の成り立ちや文化的な問題には関心がありますが、それ以上に歴史研究に力を入れて取り組んできました。マンガやアニメーションなどのメディアを日本だけでなくグローバルな観点から歴史としてとらえ、その上であらためて現代的な問題に切りこんでいきたいと考えています。



須藤 健太郎 准教授

(フランス文学専攻と兼任)

映像芸術文化論

■研究テーマ

「映像芸術文化論演習 A」を担当。専門は映画批評。フランスのヌーヴェル・ヴァーグを中心に、古今東西あらゆる映画に関心を持つことを心掛けてきました。ヌーヴェル・ヴァーグへの関心はひとまず『評伝ジャン・ユスターシュ』に結実し、時代や地域にこだわらずさまざまな種類の映画について論じた文章は映画批評集『作家主義以後』にまとめました。現在は、「編集(デクパージュ／モンタージュ)」の問題に着目し、映画と諸芸術の関係をめぐる考察を進めています。



田丸 理砂 教授

(ドイツ語ドイツ文学専攻と兼任)

ジェンダー文化論

■研究テーマ

「ジェンダー文化論演習」担当。「モダンガール」や「少女」「女の子」のイメージに関心をもって研究をしています。文化研究にはジェンダーの視点は欠くことはできませんが、現在では、ジェンダーのみならず、それがセクシュアリティ、階層(格差)、エスニシティなどと組み合わさった交差性に目を向けることがますます求められるようになってきています。授業ではこうした複雑性を現在進行形で考えていきたいと思っています。



中野 春夫 教授

(英語英米文学専攻と兼任)

身体表象文化史

■研究テーマ

「身体表象文化史演習」を担当。国際演劇評論家協会、日本英文学会、日本シェイクスピア協会に所属。身体表象文化学専攻では、身体表象に関する歴史的な文化差異を演劇作品や図像、絵画などから系譜学的、受容史的に分析していきます。これまで指導してきた主な領域・対象は、シェイクスピアや現代英語演劇、2.5次元舞台、ジャポニズム、演劇翻訳(論)、「恋愛」や「花」などの表象史、魔女／悪魔／魔術表象、ガーデニング(史)などです。主要著書は『恋のメランコリー—シェイクスピア喜劇世界のシミュレーション』(研究社)、『シェイクスピアは彼らの同時代人』(『英語青年』連載論文)、『シェイクスピアの英語で学ぶこころの決めゼリフ』(マガジンハウス)。



水野 雅司 教授

(外国語教育研究センターと兼任)

映像芸術文化論

■研究テーマ

「映像芸術文化論演習 B」担当。主に第二次世界大戦期の体験や出来事の影響のなかで創作をしている作家・芸術家を中心に研究をしています。戦争や災害といった事象は、人類の芸術活動のなかでもおそらく最も古くからある普遍的なテーマであり、現在でも多くの芸術家たちが戦争や災害に敏感に反応した作品を生み出しています。授業では、言語化・物語化しづらい体験の衝撃を芸術家たちがどのように受け止め、どのように作品化しようとしているかという点に焦点を当て、(非言語的なものを言語化しようという文学の試みともパラレルな)映像芸術における表現の問題について理解を深めていければと考えています。



自然科学研究科

Graduate School of Science

物理学専攻

化学専攻

数学専攻

生命科学専攻

自然科学研究科の特長

生き生きとした一流の研究を体験する最高の環境

物理学、化学、数学、生命科学という自然科学の四つの柱に対応する専攻がそろっています。規模は小さいですが、研究のレベルはきわめて高く、それぞれの分野での学会の要職経験者や、重要な学術賞の受賞者も多く在籍しています。何人かの教員は、分野の世界的リーダーとみなされています。四つの専攻の間の交流が活発で、専攻を越える共同研究がおこなわれることも珍しくありません。近年、科学者がそれぞれの専門に閉じこもって狭い視野の研究だけを行う「たこつば」化が批判されることが多いのですが、そのような傾向は本研究科とは無縁です。学生と教員の距離が近く、研究科のメンバーどうしの仲がいいのも大きな特徴です。大学院生も教授もいっしょになって明日の科学を夢見て研究を進めています。少し大げさかも知れませんが、自然科学研究の一つの理想の姿が、緑に囲まれた目白のキャンパスに実現しているのです。



定員51名に対して教員は63名です。

本研究科の博士前期課程の定員は51名、博士後期課程の定員は12名、これに対し教員は63名(教授33名、准教授1名、助教29名)です。(2025年3月現在)

大学院生にとっては贅沢な少人数教育が行われます。

また、学習院大学理学部のモットーである「自分の頭で考えて」学問を進める姿勢は、本研究科にも受け継がれています。

大学院生が研究の主力となっています。

多くの研究室において、大学院生は研究の主力になっています。

大学院生が学会で発表するのはごく普通のことですし、国際会議で登壇して堂々と発表することも決して珍しくありません。

研究活動を応援するさまざまな制度があります。

成績優秀者への各種奨学金をはじめ、ティーチング・アシスタント(TA)として教育研究の指導者となるためのトレーニングを行いながら、経済的サポートを受ける制度もあり、さらに国内学会や国際会議で研究発表の際に旅費・滞在費を援助する制度も用意しています。

物理学専攻

授与する学位

博士前期課程：修士（理学）

博士後期課程：博士（理学）

▶ 物理学専攻の概要

物理学専攻には、5つの実験物理学の研究室と、理論物理学の研究グループがあります。実験の研究室には、それぞれ教授または准教授1名と助教1名が所属しています。また、理論物理学のグループには、教授3名、助教3名が所属しています。全体でも、教授7名、准教授1名、助教8名と、専攻の規模は小さいですが、研究テーマは多彩です。いかにも理学部らしい基礎的な物理学から、かなり応用に近いものまで、さまざまな分野についての研究が進められています。さらに、連携大学院協定を結んだ外部の研究機関で物理学専攻の大学院生として研究を行うことができます。

本専攻の最大の特徴は、なんといっても、研究のレベルの高さでしょう。学習院大学の物理学専攻には、時代に流されない良質でユニークな研究を進めてきた伝統があります。今でも、この良き伝統は受け継がれ、この規模の物理学専攻としては異例なほどの堅実で質の高い研究を進めています。それは、学界でも高く評価されており、外部からの潤沢な研究資金の受け入れ状況や、教員の学術賞の受賞歴などにも表れています。さらに、本専攻では、ほとんどの大学院生が、研究成果を物理学会や応用物理学会で発表します。国際会議で発表を行った大学院生も少なくありません。

教員一人あたりの学生数が少なく、学生と教員が親密な関係を築けることも、本専攻の際だった特色です。各々の研究室において、大学院生は共に物理の世界を旅する「仲間」として扱われています。実験の研究室においては、大学院生は研究の主力になっています。

一流の研究が進められる現場に立ち会い、自ら積極的に研究に参加することで、物理学の先端の知識や高度な実験技術を学ぶだけではなく、未解決の問題に立ち向かう姿勢を体得することができます。本専攻では、物理学に興味をもった若者にとって、ほぼ最高の教育環境を提供できると自負しています。

▶ 修了後の主な進路（最近3年間）

ウシオ電機(株)、(株)コアコンセプト・テクノロジー、東芝デジタルソリューションズ(株)、(株)野村総合研究所、富士通(株)、富士通Japan(株)、国立研究開発法人産業技術総合研究所、日本シグマックス(株)、凸版印刷(株)、(株)日立製作所、日本電気(株)、経済産業省

▶ 大学院生の研究テーマ

井田 大輔 研究室

時空の因果構造および位相構造

相対論的宇宙論、時空の量子論

宇田川 将文 研究室

幾何学フラストレーション系

量子スピン液体の素励起

田崎 清明 研究室

孤立量子系における熱化現象

量子スピン系におけるトポロジカル相転移

西坂 崇之 研究室

磁性細菌における走磁性の操作

バクテリアのらせん構造と運動特性の関連

回転分子モーターF1-ATPaseのエネルギー変換メカニズムの解明

平野 琢也 研究室

87Rbのボース・アインシュタイン凝縮

連続変数の量子暗号

パルス光の量子エンタングルメント

町田 洋 研究室

強相関係の特異な量子凝縮現象

絶縁体の極低温熱電現象

松本 伸之 研究室

巨視的な重い振動子の量子制御

量子限界感度を備えた慣性センサーの開発

渡邊 匡人 研究室

国際宇宙ステーションを使用した物質科学研究

浮遊法による高温融体の熱物性測定

連携大学院(宇宙航空研究開発機構)

徳川 直子 研究室

航空機の摩擦抵抗低減に関する研究

境界層流れの層流-乱流遷移の現象解明に関する研究

連携大学院(理化学研究所)

田中 拓男 研究室

大規模電磁界シミュレーションを利用したメタマテリアルの構造設計

メタマテリアルの自己組織化形成法の開発とデバイス応用

▶ 設置科目

博士前期課程授業科目

物性物理学Ⅰ	核物理学Ⅳ	応用物理学Ⅲ
物性物理学Ⅱ	基礎物理学Ⅰ	応用物理学Ⅳ
物性物理学Ⅲ	基礎物理学Ⅱ	応用物理学Ⅴ
物性物理学Ⅳ	数理論理学Ⅰ	化学物理学Ⅰ
物性物理学Ⅴ	数理論理学Ⅱ	化学物理学Ⅱ
物性物理学Ⅵ	数理論理学Ⅲ	化学物理学Ⅲ
核物理学Ⅰ	数理論理学Ⅳ	化学物理学Ⅳ
核物理学Ⅱ	応用物理学Ⅰ	物理学輪講Ⅰ
核物理学Ⅲ	応用物理学Ⅱ	物理学研究Ⅰ

博士後期課程授業科目

物性物理学Ⅰ	核物理学Ⅳ	応用物理学Ⅲ
物性物理学Ⅱ	基礎物理学Ⅰ	応用物理学Ⅳ
物性物理学Ⅲ	基礎物理学Ⅱ	応用物理学Ⅴ
物性物理学Ⅳ	数理論理学Ⅰ	化学物理学Ⅰ
物性物理学Ⅴ	数理論理学Ⅱ	化学物理学Ⅱ
物性物理学Ⅵ	数理論理学Ⅲ	化学物理学Ⅲ
核物理学Ⅰ	数理論理学Ⅳ	化学物理学Ⅳ
核物理学Ⅱ	応用物理学Ⅰ	物理学輪講Ⅱ
核物理学Ⅲ	応用物理学Ⅱ	物理学研究Ⅱ

井田 大輔 教授

相対論、宇宙論

■研究テーマ

本研究室では、重力の理論である一般相対論の理論的研究を通して時空の本質を探ることを目指している。一般相対論は時空自身のダイナミクスを支配する理論形式であり、宇宙創生、ブラックホール、時空特異点、余剰次元といった、ミクロからマクロに及ぶ現象を記述する。最近では、高次元ブラックホール、膜宇宙論などの研究を精力的にすすめている。より長期的には、弦理論など素粒子論分野との相互理解を通して、重力の量子論の構築という現代物理学の最重要課題の解決をも視野に入れている。



宇田川 将文 教授

物性物理学理論

■研究テーマ

本研究室では、固体物性を中心とする多電子系の理論解析に焦点を当てた研究を行う。特に、スピンスピンに代表される幾何学的フラストレーション系、整数および分数量子ホール効果を見本とするトポロジカルに非自明な特徴を持つ系を主な研究対象とする。幾何学的フラストレーションやトポロジーは物理学の広い分野に埋め込まれた、普遍性の高い概念である。これらの概念の理解の深化を通じ、長期的には、スピ液体、準結晶、ガラス等の関連する諸分野への積極的な展開を目指したいと考えている。



田崎 晴明 教授

理論物理学、数理物理学

■研究テーマ

広い意味での自然界から「普遍的な面白さ」をもった現象・ストーリーを読みとり、それらを数理的に理解することを目指して、出来る限り幅広い分野の問題を手がけている。近年の研究テーマは、量子スピン系やトポロジカル絶縁体におけるトポロジカルな相転移、孤立量子多体系の時間発展と統計力学の基礎づけ、非平衡統計力学における普遍的な関係の探索、Hubbard 模型における強磁性の発現など。

久保記念賞を受賞。



西坂 崇之 教授

生物物理学

■研究テーマ

光学顕微鏡は、生命現象の根本を明らかにする潜在力を持った強力なツールである。これを使いこなし、さらに原理まで含め革新的な装置を開発していくには、物理を礎とした思考方法とアプローチが必要とされる。西坂研究室では、独自の技術をさまざまな生体試料（タンパク質・DNA・バクテリアなど）に応用し、まだ誰も見たことの無い未知の世界を画像化する。これまでの研究室の成果は、報道や一流の学術誌（ネイチャー姉妹誌・米科学アカデミー紀要など）に掲載され、広く認められて当該分野に大きく貢献している。



平野 琢也 教授

量子光学

■研究テーマ

光技術を利用し、原子や光自身の量子力学的な性質を制御する実験を行っている。具体的なテーマは、レーザー冷却に関するものと、量子情報技術に関するものがある。レーザー冷却は、レーザーを使って原子を極低温に冷却する技術である。当研究室ではルビジウム原子気体を 1 マイクロケルビン程度まで冷却することにより、ボース・アインシュタイン凝縮を実現し、スピン自由度に注目した実験などを行っている。量子情報技術は量子力学の原理を利用した新しい情報処理であり、量子暗号通信、量子テレポーテーションなどの実験を行っている。



町田 洋 教授

物性物理学実験

■研究テーマ

2018 年に発足した新しい研究室であり、研究室を率いる町田教授は、金属磁性体における自発的ホール効果、絶縁体での巨大な熱電効果などの発見で知られる物性物理学の実験家である。新しい物質を作り出し、量子性や非平衡性から生まれる新奇な現象を探索する研究を行ってきた。流行を追わず独自の発想で研究を進めながら世界的に注目される成果を挙げる実力には定評がある。新しい研究室では、極低温・超高圧など極限的な環境での物質の輸送現象を他に真似のできない精密な技術で測定し、まだ誰も見たことのない新しい現象を発見することを目指す。将来的には研究室で発見した現象をもとに新技術を開発し、社会に貢献することも視野に入れる。



松本 伸之 准教授

量子計測・制御

■研究テーマ

2021 年に立ち上げた松本研究室では、プランク質量（約 0.02 ミリグラム）より重い振動子の変位を単一量子レベルで計測し、振動子の量子状態を制御するための技術開発を進めている。これにより、巨視系における量子力学を研究対象とする新たな分野の創成を目指している。例えば、ブラウン運動の観測から水分子の存在が間接的に確認されたように、量子制御された重い振動子の量子デコヒーレンスから重力子を間接的に確認できると期待されている。計測には近年飛躍的な発展を遂げたレーザー干渉計を利用し、制御としては量子フィルターを使ったフィードバック冷却を行っている。また、量子計測の技術を慣性センサーとして応用する研究にも取り組んでおり、例えば、重力定数の精密測定を目指している。



渡邊 匠人 教授

結晶物理学

■研究テーマ

現在の情報化社会を支えている電子デバイス技術は、半導体結晶物性を基礎としている。半導体結晶は、その融液から育成するため、結晶成長メカニズム解明には融液物性を明らかにすることが必要である。当研究室では、半導体融液物性を解明し、新しい結晶成長制御技術の開発を目指す。半導体融液のマクロな物性と原子レベルのミクロな構造を結びつけるために、放射光を使った液体構造解析や微小重力下における液体物性測定を測定原理・方法の開発から行っていく。



連携大学院

徳川 直子 客員教授

流体力学

■研究テーマ

流線形物体の抵抗は同じ投影面積の鈍頭物体に比べ 10 倍以上小さく、航空機は流体力学的に非常に効率のよい乗り物といえる。しかし、化石燃料の枯渇や地球温暖化等の環境問題を考えると、航空機の抵抗、特に摩擦抵抗の低減が求められる。境界層の層流―乱流遷移過程を理解し、それを抵抗低減技術として確立する研究は物理学を社会実装する典型的なテーマである。



田中 拓男 教授

ナノフォトニクス

■研究テーマ

光の波長より細かなナノメートルスケールの構造と光波との相互作用を利用すると、古典光学では説明・実現できないような新奇な光学機能が生まれる。例えば光の波長の限界を超えた分解能を持つ顕微鏡や、光を完全に吸収する完全吸収体、物質境界面で生じる光波の反射を完全に抑制する表面、紙よりも薄くて軽いレンズなどである。当研究室では、波長より細かな人工構造で構成される「メタマテリアル」という人工擬似光学材料と、それらが生み出す新しい光学現象を利用して光を思いのままに操る光制御技術の実現を目指している。



授与する学位

博士前期課程：修士（理学）

博士後期課程：博士（理学）

▶ 化学専攻の概要

化学専攻の学生は、無機化学系、物理化学系、有機化学系の9研究室のいずれかに配属され、勉学と研究を行います。各研究室は教授1名と助教1名、そして数名の大学院生と学部4年生5～7名からなります。

研究分野は後に記述するように「分子の振る舞いから地球の不思議」まで多岐にわたります。研究室間や大学間の交流も盛んで、他にはない独特な研究プロジェクトが展開されています。学術研究ばかりでなく、研究室で得られた研究成果を基に企業との共同研究も行われています。

マニュアルのない研究は時として困難を伴いますが、最高の研究環境で指導教員の適切な指導を受け、自らの努力により研究の成果を得る喜びは大きいものです。得られた研究成果を国内の学会ばかりではなく、国際学会で発表する機会も多くあります。

▶ 修了後の主な進路（最近3年間）

東和薬品(株)、有機合成薬品工業(株)、理研ビタミン(株)、協和キリン(株)、サカタインクス(株)、綜研化学(株)、藤倉化成(株)、日進化成(株)、セントラル硝子(株)、TOTO(株)、全日本空輸(株)、(株)フルヤ金属、(株)LIXIL、オルガノ(株)、野村マイクロ・サイエンス(株)、(株)リガク、日東電工(株)、キャノン(株)、セイコーエプソン(株)

▶ 大学院生の研究テーマ

秋山 隆彦 研究室

- キラリリン酸を用いた不斉触媒反応の開発
- 光とプレンステッド酸を組み合わせた新たな触媒反応の開発
- 新規なプレンステッド酸触媒の開発
- 新たなラジカル反応の開発

稲熊 宜之 研究室

- 高圧を用いた新規機能性酸化物およびフッ化物の合成と物性
- リチウム電池の活物質および固体電解質（リチウムイオン伝導性酸化物）の探索とその応用
- 可視および紫外発光無機蛍光体の探索と発光機構の解明
- イオン交換等による酸化物への異種陽イオンおよび陰イオンの導入と機能性の付与

岩田 耕一 研究室

- 時間分解分光法による超高速化学反応の観測と機構解明
- フェムト秒時間分解分光法の方法論開発とソフトマターの構造・動力学観測
- 生体膜中で起こる化学反応の機構解明

大野 剛 研究室

- 無機質量分析計による高精度同位体分析法の開発と古環境解読への応用
- 重金属元素の元素比・同位体比を用いた環境解析法の開発
- 微小領域同位体分析法の開発と放射年代測定への応用
- 福島原発事故に関連する環境放射能研究

狩野 直和 研究室

- 新種の結合・官能基・化学種の開発
- 有機典型元素化合物の組合せによる小分子の活性化
- 不飽和化学種の合成と反応開発への利用
- 典型元素化合物の性質を利用した有機反応開発

草間 博之 研究室

- アシルシラン類の光化学的特性を活かした新規分子変換手法の開発
- 官能基選択的有機光反応のための新規触媒系の構築
- 光および遷移金属化合物の組合せによる新規反応活性種の創製と反応
- 天然有機化合物の全合成

梶谷 浩 研究室

- ケイ酸塩および酸化物の高圧高温相平衡
- 地球マントル鉱物の熱量測定による熱化学データの決定
- 熱力学的手法を用いた地球内部物質の高圧高温下における安定性の検討
- 高圧ラマン分光測定を利用した非調和振動効果の推定

河野 淳也 研究室

- 液滴分子線から気相単離した生体分子の分光観測
- 液滴衝突による溶液反応の観測
- 共振増強効果を利用した液滴のラマン分光法の開発

齊藤 結花 研究室

- 近接場光学顕微鏡を用いたナノスケール分光イメージング
- 効率的な光電場増強効果を誘起するナノ材料の探索
- 溶液中に含まれた微量分子の高感度検出に向けたシングルパルスSERS法の開発

▶ 設置科目

博士前期課程授業科目

無機化学特論Ⅰ	有機化学特論Ⅳ	化学物理学Ⅰ
無機化学特論Ⅱ	有機化学特論Ⅴ	化学物理学Ⅱ
無機化学特論Ⅲ	物理化学特論Ⅰ	化学物理学Ⅲ
分析化学特論Ⅰ	物理化学特論Ⅱ	化学物理学Ⅳ
分析化学特論Ⅱ	物理化学特論Ⅲ	実践化学英語
有機化学特論Ⅰ	物理化学特論Ⅳ	化学特別演習Ⅰ
有機化学特論Ⅱ	物理化学特論Ⅴ	化学特別研究Ⅰ
有機化学特論Ⅲ		

博士後期課程授業科目

無機化学特論Ⅰ	有機化学特論Ⅳ	化学物理学Ⅰ
無機化学特論Ⅱ	有機化学特論Ⅴ	化学物理学Ⅱ
無機化学特論Ⅲ	物理化学特論Ⅰ	化学物理学Ⅲ
分析化学特論Ⅰ	物理化学特論Ⅱ	化学物理学Ⅳ
分析化学特論Ⅱ	物理化学特論Ⅲ	実践化学英語
有機化学特論Ⅰ	物理化学特論Ⅳ	化学特別演習Ⅱ
有機化学特論Ⅱ	物理化学特論Ⅴ	化学特別研究Ⅱ
有機化学特論Ⅲ		

※博士前期課程においては、あらかじめ指導教授と相談の上、講義選択科目のうち8単位以内に限り本研究科所属の他の専攻課程の授業科目をもって代用することができる。

秋山 隆彦 教授

有機合成化学

■研究テーマ

触媒的な立体選択的有機合成反応の開発を目指して研究を行っている。我々は、光学活性な有機小分子を設計し、「キラルプレンステッド酸触媒」として優れた不斉触媒活性を示すことを見出した。この触媒を用いた含窒素化合物の不斉合成反応の開発、さらに、より優れた有機分子触媒の創成に取り組んでいる。また、金属錯体を用いた触媒的な合成反応の開発も行っており、酵素反応を凌駕するクリーンな有機合成反応の開発研究を中心の研究課題として研究を進めている。



稲熊 宜之 教授

無機固体化学

■研究テーマ

無機化合物、特に酸化物、フッ化物、酸フッ化物等の無機固体物質を合成し、結晶構造および物性を調べることで、その構成元素、構造、化学結合、物性の相関を明らかにしようとしている。得られた知見を基礎としてイオン伝導性、電子伝導性、磁性、誘電性、電気化学特性および発光を示す新しい機能性化合物の探索を行っている。また、新しい合成手法の開拓にも取り組んでいる。



岩田 耕一 教授

分光物理化学

■研究テーマ

溶液の中では、分子は100フェムト秒 (10^{-13} 秒) に1回衝突している。分子の「運動の記憶」の大半は、数ピコ秒後には失われてしまう。ゆえに、分子に起こる現象をフェムト秒からピコ秒の単位で時間分解測定できる手法を開発することは、現代の科学にとって重要な課題である。われわれは、光の技術を駆使して時間分解分光法を開発するとともに、これらの方法を用いて超高速現象を観測し、「化学反応はどのように進むのか」を明らかにしようとしている。



大野 剛 教授

環境地球化学、分析化学

■研究テーマ

我々の住む惑星がどのようにでき、生命がどのような環境で進化してきたのかを解き明かすため、最先端の分析化学を駆使し、研究に取り組んでいる。高精度無機質量分析計を用いて、試料に保存されている同位体比のわずかな変動を検出することにより、試料ができた年代や経てきた物理化学的過程・生物活動の有無を推定することができる。また最近では、この質量分析計を用いて福島原発事故に関連する環境放射能研究にも取り組んでいる。



狩野 直和 教授

有機元素化学

■研究テーマ

リン、ホウ素、ケイ素等の典型元素を組み込んだ新しい骨格構造の有機化合物を構築し、新規な反応性や機能を引き出す研究を行っている。通常は不安定で世の中に存在しないような構造の典型元素化合物を創り出し、その性質を多核NMR測定やX線結晶構造解析によって調べている。それぞれの化合物の特性を活用することで、機能性化合物の開発や、新反応の開発へと利用している。



草間 博之 教授

有機合成化学、有機反応化学

■研究テーマ

光や遷移金属化合物の特性を活用し、新形式の有機反応を開発すべく研究に取り組んでいる。とりわけ、従来は多段階の工程を要していた分子変換を単段階で実現可能な反応の開発、高反応性化学種の新規発生手法の開拓とこれを活かした新反応開発を目指している。また我々オリジナルの反応を利用して生理活性物質等の効率的な全合成研究も行っている。



糺谷 浩 教授

無機地球化学

■研究テーマ

地球内部の構造や化学組成を明らかにするために、地殻やマントルを構成しているケイ酸塩や酸化物およびそれらの関連物質について、結晶化学的手法や熱力学的手法を用いた高圧高温下での相の安定性に関する研究を行っている。特に、エンタルピーや熱容量および熱膨張率の測定と、ラマン分光測定で取得した格子振動の情報に基づく理論計算とを融合させる手法で、無機固体物質の信頼性の高い熱力学的表現の開発に取り組んでいる。



河野 淳也 教授

気相溶液化学

■研究テーマ

気相中に取り出した溶液の反応過程を研究している。2液混合による反応過程を精密に明らかにするために、気相中に液滴として生成させた反応物液滴の衝突反応を観測している。また、真空中に溶液を直接導入する手法である液滴分子線法によって溶液中の分子を気相中に取り出して、質量分析、レーザー分光法などの実験方法を用いてその構造や性質を明らかにしようとしている。



齊藤 結花 教授

物性分子科学

■研究テーマ

可視光を使った顕微鏡は種々の分光技術と組み合わせることで、材料の形状のみならず構成分子の種類やその性質を明らかにすることができる。私たちは近接場光学を利用して、従来の光学顕微鏡では到達できないナノメートルという空間分解能で試料を観察する先端技術を開発し、ナノ空間特有の光と電子の相互作用やナノ材料の物性を観測する研究を行っている。



数学専攻

授与する学位

博士前期課程：修士（理学）

博士後期課程：博士（理学）

▶ 数学専攻の概要

本専攻の教員には代数・幾何・解析の各分野の研究者が集まっており、数学の主要な研究テーマをカバーしています。本専攻に在籍する大学院生にとっては、前期・後期課程を修了し博士号を取得して数学の研究者をめざす環境が整えられています。また、前期課程で修士論文を完成し修士号を取得したあと、一般企業に就職したり中学・高校の教員になる道も開かれています。修士論文や博士論文を書くことをめざして数学の研究に打ち込んだ体験は、大学院を修了したあと社会で活躍するにあたって大きく役立っているようです。

大学院への入学にあたって、数学専攻では飛び級入試を行っています。すなわち、学部において優秀な成績を収めている学生は、所定の選考過程を経て、学部3年生から大学院に入学することが可能です。

本専攻では指導教員の行うセミナーの他に多くの講義が用意されており、それによって専門的知識を得るとともに、大学院修了のために必要な単位を修得することができます。しかし、多くの良いものに接するためには他大学の研究者や大学院生との交流も有効です。そのために本専攻は「大学院数学連絡協議会」に加盟しており、中央大学・上智大学・国際基督教大学・明治大学・日本大学・日本女子大学・立教大学・東京女子大学・東京理科大学・津田塾大学の大学院数学専攻で開講される講義に委託聴講生として参加し、単位を修得することができます。

▶ 修了後の主な進路

まず、高等学校教員や理数系出版社等を介して次世代の理数教育に携わるキャリアや、大学院博士後期課程進学を介して研究者となる方向性があります。一方で、メーカー、金融業界、保険会社、データサイエンス等、昨今の修了生の就職先である一般企業の多様性からは、数学という専門性が情報化社会の中で多角的かつ重要な役割を担っていることがわかります。

▶ 大学院生の研究テーマ

研究テーマ

離散群の位相幾何
19世紀イギリスの数学教育
射影多様体の双有理幾何
偶数連分数と実2次体の整数論
代数体のイデアル類群
量子力学の数値物理学
グラフ上の作用素のスペクトル解析
同変コホモロジーと局所化公式
リーマン多様体上の解析学

指導教員

大鹿健一
岡本 久
高木寛通
中島匠一
中野 伸
中村 周
樋口雄介
細野 忍
山田澄生

▶ 設置科目

博士前期課程授業科目

代数学特論Ⅰ	確率論及統計学特論Ⅱ
代数学特論Ⅱ	数理科学特論Ⅰ
代数学特論Ⅲ	数理科学特論Ⅱ
幾何学特論Ⅰ	数理科学特論Ⅲ
幾何学特論Ⅱ	数学特別講義Ⅰ
幾何学特論Ⅲ	数学特別講義Ⅱ
解析学特論Ⅰ	数学特別演習Ⅰ
解析学特論Ⅱ	数学特別演習Ⅱ
解析学特論Ⅲ	数学特別演習Ⅲ
確率論及統計学特論Ⅰ	数学特別演習Ⅳ

博士後期課程授業科目

代数学特論Ⅱ	確率論及統計学特論Ⅰ
代数学特論Ⅲ	確率論及統計学特論Ⅱ
代数学特論Ⅳ	数理科学特論Ⅱ
幾何学特論Ⅱ	数理科学特論Ⅲ
幾何学特論Ⅲ	数理科学特論Ⅳ
幾何学特論Ⅳ	数学特別講義Ⅰ
解析学特論Ⅱ	数学特別講義Ⅱ
解析学特論Ⅲ	数学研究
解析学特論Ⅳ	

※博士前期課程においては、あらかじめ指導教授と相談の上、講義選択科目のうち4単位以内に限り本研究科所属の他の各専攻課程の授業科目をもって代用することができる。

大鹿 健一 教授

位相幾何学、離散群

■研究テーマ

クライン群、タイヒミュラー空間、写像類群などを位相幾何学的に研究することをテーマとしている。この分野では、3次元トポロジー、双曲幾何、関数論などが交錯して、大変奥の深い理論が生まれつつある。特に3次元の双曲幾何や複素力学系から導かれる情報を基に、クライン群の変形空間やタイヒミュラー空間を深く理解するのが、当面の私の目標である。



岡本 久 教授

流体力学、数学史

■研究テーマ

流体力学に現れる偏微分方程式の解は非常に複雑な性質を示す。それを解析的に、あるいは数値的に研究している。精度保証計算というコンピュータ技術を使うと、ある場合には解の存在証明ができてしまうこともある。一方、数学の歴史の研究も始めており、特に、関数の歴史に研究すべきテーマが多いと思っている。



高木 寛通 教授

代数幾何・代数多様体の分類

■研究テーマ

3次元ファノ多様体という複素射影多様体の分類を目指して研究している。特異点を持たない場合の分類は、ほぼ20世紀の100年かけて完成した。私はこれまで、特異点を持つ場合の分類に携わってきた。研究手法は、森重文氏らが構築した森理論という現代理論であるが、その過程で古典的な射影幾何学の現象に度々遭遇できるのも、この研究の醍醐味の一つである。これからも楽しみつつ分類の完成に貢献していきたい。



中島 匠一 教授

整数論

■研究テーマ

これまで主として代数的閉体上の代数曲線を研究対象としてきた。代数曲線のガロア被覆を考え、そのガロア群の各種のコホモロジー群への作用を調べるのが重要な手法である。ガロア群の作用の決定は代数曲線の(代数的)基本群の構造や自己同型のリフティングの問題への応用がある。この種の問題は複素数体上では古典的な研究対象であるが、体の標数がガロア群の位数を割り切る時に新たな困難が生じ、それを乗り越える方法の工夫が研究のポイントとなる。また最近では、代数体の類数の研究も行っている。



中野 伸 教授

数論

■研究テーマ

代数体の数論、特に代数体のイデアル類群を主な研究対象としている。古典的な代数体の数論や類対論等を駆使してイデアル類群の構造を探っている。ここ数年の研究テーマは、楕円曲線の有理点を用いた類群の構成問題である。楕円曲線の有理点から生ずる不分岐アーベル拡大の一般論を通してイデアル類群の様子を見ようとするもので、楕円曲線の数論と代数体の数論との絡みが興味深い結果を導くことがある。また、最近の数式処理技術の発達により、計算機を利用した数論研究手法にも面白みを感じている。



中村 周 教授

偏微分方程式、数理物理学

■研究テーマ

量子力学に現れる偏微分方程式や、差分作用素などの性質を研究している。特に、対応する古典力学系の解の振る舞いを通じて、シュレディンガー方程式などの解の性質、粒子の振る舞いを理解しようという半古典解析のアイデアを中心に、いろいろな手法を用いて量子力学系の数学的構造の理解を目指している。



樋口 雄介 教授

離散大域解析学、グラフ理論

■研究テーマ

グラフという離散図形の上での古典および量子酔歩の挙動や離散シュレディンガー作用素のスペクトル構造と、確率論や関数解析の性質や幾何学的性質および組合せ論特有の性質との相関関係の解明が研究対象である。最近は広い分野へ応用すべく、たとえば心的辞書のネットワークとしてのモデル作りにも挑戦している。



細野 忍 教授

複素多様体、数理物理学(カラビ・ヤウ多様体)

■研究テーマ

複素ケーラー多様体で標準束が自明な多様体をカラビ・ヤウ多様体と呼んでいる。カラビ・ヤウ多様体を数多く構成してみるとミラー対称性と呼ばれる不思議な対称性が観察される。この対称性を、カラビ・ヤウ多様体の変形族の性質に着目し、周期積分やそれが満たす(多変数)超幾何微分方程式の解の性質と共に調べている。また、グロモフ・ウィッテン不変量の具体的な計算方法に現れるモジュライ空間の幾何学にも関心を持って調べている。



山田 澄生 教授

微分幾何学、幾何解析

■研究テーマ

幾何学的な問題意識のもとで非線形偏微分方程式を介して様々な空間の定式化を行う「幾何解析学」を専門にする。特に、アインシュタイン計量を持つ時空、リーマン計量およびフインスラー計量のモジュライ空間等の近代科学の文脈において必然的な意義をもつ空間の解明に力を注いでいる。



生命科学専攻

授与する学位

博士前期課程：修士（理学）

博士後期課程：博士（理学）

▶ 生命科学専攻の概要

生命科学専攻は、2008年4月に学習院大学理学部化学学科、物理学科、生命分子科学研究所で生命科学を研究している4名の研究者と他大学あるいは研究所からこの構想に参加する3名の研究者で開始され、2009年には更に3名の研究者が加わり、現在の規模となりました。分子生物学・細胞生物学を共通の基盤として、(1)基礎生命科学(分子生物学、細胞生物学、生物化学、構造生物学など)、(2)統合生命科学(遺伝学、発生学、植物分子生理学、神経生理学など)、(3)応用生命科学(微生物科学など)、という分野で教育・研究を進めています。

生命科学、生物学、生物化学などを主に学んだ学生だけではなく、化学や物理学を主に学んだ学生も受け入れ、最新の分子生物学・細胞生物学の素養が身につくような教育を行い、生命科学の種々の領域で教員と大学院生が一緒に研究することを目指しています。

▶ 修了後の主な進路(最近3年間)

(株)NTTデータ・アイ、日本ハムファクトリー(株)、(株)DNPデジタルソリューションズ、セイコーソリューションズ(株)、富士通(株)、(株)富士薬品、(株)日立システムズ、アドバンテック(株)、ナカライテスク(株)、イーピーエス(株)、(株)メイテック、ニッセイ情報テクノロジー(株)、(株)エスアールディ、味の素冷凍食品(株)

▶ 大学院生の研究テーマ

安達 卓 研究室

- ・ショウジョウバエにおいて腸ホルモンが寿命・老化を制御するしくみの研究
- ・昆虫前立腺(附属腺)の構造と機能が生殖能力に果たす役割の研究
- ・シュモクバエの形態と行動を制御する遺伝子研究

岡田 哲二 研究室

- ・視覚を担うタンパク質の高分解能構造解析
- ・タンパク質構造可変性の網羅的解析
- ・タンパク質での結合異性化に関する研究

尾仲 宏康 研究室

- ・放線菌の生産するペプチド天然物を基盤とした創薬研究
- ・微生物由来新規生理活性物質の探索

掛川 渉 研究室

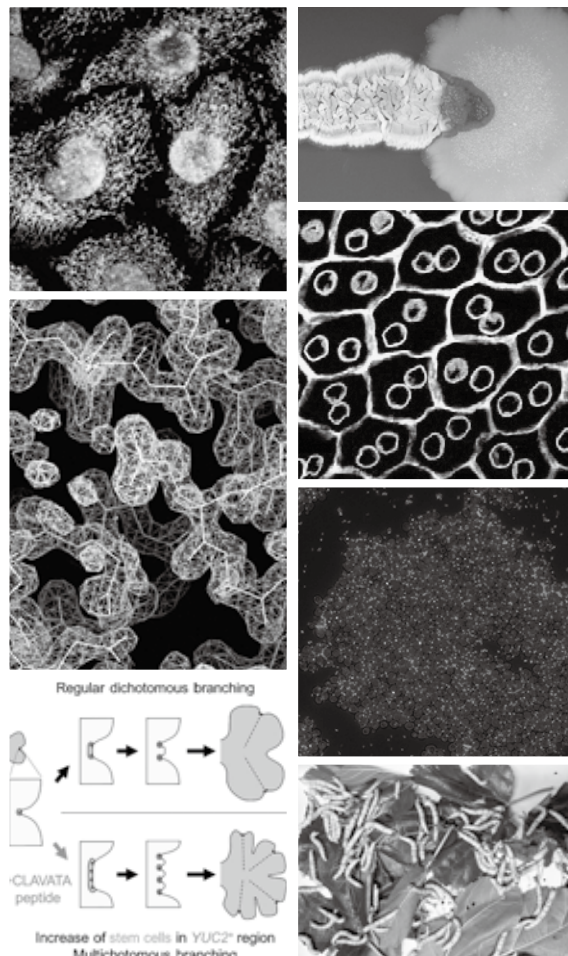
- ・中枢シナプスの形成動作原理の解明
- ・シナプスを標的とした光遺伝学・化学遺伝学技術の開発と応用
- ・記憶・学習の形成および忘却過程の分子的理解と制御

清末 知宏 研究室

- ・ZTL による細胞伸長とストレス応答の制御
- ・陸上植物のメリステムにおける、ペプチドホルモンの機能解析
- ・LRR 型受容体キナーゼのシグナル伝達機構の解明

嶋田 透 研究室

- ・昆虫(動物)と寄主植物の共進化機構の解明
- ・昆虫における中胚葉の分化を支配する分子機構
- ・キヌレニン経路を中心とした代謝経路の多様性



菱田 卓 研究室

- ・DNA二重鎖切断に伴う染色体動態制御機構の解析
- ・慢性的なDNA損傷ストレス環境における耐性獲得の分子メカニズムの解析
- ・遺伝子突然変異を誘発する分子メカニズムの解析

柳 茂 研究室

- ・ミトコンドリアダイナミクスの制御機構の解明
- ・パーキンソン病におけるミトコンドリア機能解析
- ・ミトコンドリアを標的にした創薬スクリーニング

▶ 設置科目

博士前期課程授業科目

分子細胞生物学特論Ⅰ	統合生命科学特論Ⅳ
分子細胞生物学特論Ⅱ	統合生命科学特論Ⅴ
分子細胞生物学特論Ⅳ	統合生命科学特論Ⅵ
分子細胞生物学特論Ⅴ	応用生物学特論Ⅱ
統合生命科学特論Ⅰ	生命科学特別演習Ⅰ(必修)
統合生命科学特論Ⅱ	生命科学特別研究Ⅰ(必修)
統合生命科学特論Ⅲ	

博士後期課程授業科目

グローバル生命科学(必修)	生命科学特別研究Ⅱ(必修)
生命科学特別演習Ⅱ(必修)	

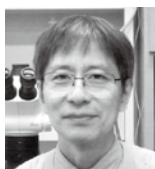
※博士前期課程では、講義選択科目のうち14単位(7科目)を履修しなければならない。ただし、講義選択科目のうち8単位以内に限り、本研究科所属の他の専攻課程の授業科目をもって代用することができる。

安達 卓 教授

動物生理学

■研究テーマ

動物は十分に栄養を摂取すると、そうでない状態と比べて体全体が大きくなるだけではなく、様々な器官の間で大きさの比が変化し、また貧栄養状態では起きない特有の応答を見せるようになる。例えば、栄養を多くとった昆虫では、附属腺という内部生殖器官の細胞が大きくなり、また、個体や消化管の寿命が短縮してくる。このように各器官は単独で機能を果たすのではなく、相互に影響を及ぼし合っており動物は生きている。こうした現象に関与する様々な遺伝子について、ショウジョウバエなどの昆虫を用いて研究している。

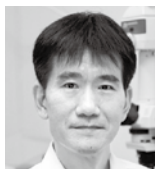


岡田 哲二 教授

構造生物学

■研究テーマ

ヒトの体内で働くタンパク質の約3割は、細胞の表面や内部小器官を形成する脂質二重膜に埋もれた膜タンパク質であることが知られています。水に溶けない性質などのために研究が困難なこれらのタンパク質のうち、特に視覚などの情報伝達に重要なものを対象とした、X線回折や分光測定による立体構造解析を中心として、機能発現メカニズムを明らかにするための研究を行っています。



尾仲 宏康 教授

微生物科学

■研究テーマ

生物の中でも微生物の多様性は群を抜いています。私たちの研究室では微生物の生産する多様な天然物（二次代謝産物）に焦点を当てた研究をしています。中でも土壌微生物である放線菌は多様な二次代謝産物を作ることが知られており、医薬品として開発された化合物も多数存在します。最近、私たちは放線菌が他微生物の影響を受けて二次代謝を誘導することを明らかにし、現在その微生物間コミュニケーションの遺伝学的解析を行っています。また、二次代謝産物を用いた創薬研究にも取り組んでいます。



掛川 渉 教授

神経生理学

■研究テーマ

脳内で神経細胞どうしをつなぐシナプスは、記憶や学習の形成に関与するだけでなく、アルツハイマー病・自閉症など多くの神経系疾患（シナプス病）と深く関わる重要な部位として、近年注目されています。掛川教授は、電気生理学やマウス行動解析を駆使し、シナプス形成の原理を分子レベルで解明するとともに、シナプスを時空間的に操作する新たな技術の開発と応用に取り組んでいます。その成果は、記憶や学習の分子メカニズムの理解を深めるだけでなく、シナプス病の病態解明や治療法の開発にもつながります。脳神経科学や生命の神秘に魅了された情熱あふれる学生たちへ——最先端の研究に挑戦しながら、研究の喜びを存分に味わいましょう！



清末 知宏 教授

植物分子生理学

■研究テーマ

植物は、動物と違って移動の自由がないので、外部環境の変化に敏感に応答して生きていかなければなりません。私達の研究室では、植物が環境からの情報をどのように成長・分化の制御に利用しているのかを、モデル植物を実験材料にして、分子生物学、分子遺伝学、生化学、バイオイメージングなどの手法を駆使して研究しています。そして、その仕組みを上手く改変・利用することで新しい機能をもった有用植物をつくる試みも行っています。



嶋田 透 教授

研究科委員長

生物遺伝資源学

■研究テーマ

日本の伝統的な生物遺伝資源であるカイコおよび近縁蛾類を材料として、ゲノム構造と遺伝子機能を研究している。変異体や地理的系統における形質の多様性を利用して、卵（胚）、幼虫、蛹（繭）、成虫の各段階における形態、生理、感覚・行動、生体防御などを支配する遺伝子と形質発現機構を解明している。また、カイコの祖先がクワを唯一の寄主植物として利用するようになった理由など、長い時間をかけた生物進化と、人類による家畜化の機構を明らかにしようとしている。研究成果の産業への応用にも関心がある。



菱田 卓 教授

分子生物学

■研究テーマ

放射線や化学物質等によって生じるDNAの変化（DNA損傷）は、ゲノムDNA上の様々な場所で常に起こっている。これらの損傷は突然変異や細胞死を引き起こす原因となるため、ヒトでは発がんや老化と密接に関連している。当研究室では、酵母や大腸菌などのモデル生物を用いて、生物にとって普遍的な問題であるDNA損傷ストレスに応答して働く様々な生命機能の分子メカニズムを詳細に解析している。さらに、生物の様々な環境への適応進化に関して、損傷ストレスに対する耐性機能が果たす役割の解明を目指している。



柳 茂 教授

病態生化学、ミトコンドリア生物学

■研究テーマ

ミトコンドリアはエネルギーを産生する重要なオルガネラですが、ミトコンドリアの機能が劣化すると有害な活性酸素種を撒き散らします。過剰な活性酸素種はDNAやタンパク質を酸化して、老化に関連した様々な病気を誘発します。私たちは、ミトコンドリアと老化疾患との関連を分子レベルで解明し、ミトコンドリアを標的にした新たな治療薬の開発を目指しています。



国際社会科学研究科

Graduate School of International
Social Sciences

2026年4月の新設に向け、設置届出中であり、
内容が変更となる場合があります。

国際社会科学専攻

授与する学位

修士課程：修士（社会科学）

▶ 設置の理念

国際社会においては、SDGsに代表されるような地球規模の課題を解決できる人材が求められています。一方で、将来が予測困難でVUCA（Volatility:変動性 Uncertainty:不確実性 Complexity:複雑性 Ambiguity:曖昧性）と呼ばれる現代においては、そのような課題に一つのアプローチから解決策を見出すことは困難です。そこで、国際社会科学部の学問領域（経済学・経営学・社会学・地域研究・法学）をより深く学び、高度な英語運用能力に基づく国際的な発信力を身に付ける場を提供することが社会的使命であると考え、国際社会科学研究所の設置構想に至りました。

▶ 養成する人材像

国際社会科学研究所では、現代の国際社会において必要とされる以下の能力を備えた人材を育成することをめざします。

専門知識

経済学、経営学、社会学、地域研究、法学に関する専門知識。

データ分析能力

エビデンスに基づいて公共政策やビジネスプランを策定する上で不可欠な、膨大なデータを理論的な枠組みで分析する力。

課題設定と解決力

課題を見つけ出し、解決に導く力。

論理的思考力

論理的に物事を考え、判断する力。

創造力

新しいアイデアを生み出し、実行に移す力。

国際的視野

地球規模で考え、社会の変化に柔軟に対応する力。

▶ 特色

国際社会科学研究所では、以下の科目群を用意しています。これらを通じ、国際社会における課題に対して現実的な解決策を提示するための総合力を養います。

グローバル市民社会科目群

経済学、経営学、社会学、地域研究、法学に関する専門知識を習得します。

データ分析科目群

データ分析の汎用的なスキルを身に付けるとともに、社会科学の各分野における応用的なスキルを実践的に学びます。例として、経済学分野のミクロ実証分析や経営学分野のアンケート調査法などがあります。

アカデミック・スキルズ科目群

研究成果を英語で論文にまとめ、国際学会で報告し、国際的な学術誌に投稿する力を養います。

研究指導科目群

習得した専門知識とデータ分析能力を用いて、研究テーマの分析を行います。

▶ めざせる進路

国際機関や日本政府・地方自治体の国際関係部署、コンサルティング会社、商社、銀行、メーカーなど。

▶ 設置科目

▼ 研究指導科目群

研究指導

▼ グローバル市民社会科目群

Special Studies in International Economic Policy

Special Studies in International Economics

Special Studies in Economic Development

Special Studies in International Marketing

国際マクロ経済学特殊研究

Special Studies in International Accounting and Taxation

Special Studies in Asian Economics

国際イノベーションマネジメント特殊研究

Special Studies in Health Economics

Special Studies in Agricultural and Rural Development

Special Studies in International Human Resource Management

人口学特殊研究

比較会社法特殊研究

▼ データ分析科目群

国際経済政策論実証分析演習

International Trade Empirical Study Seminar

Economic Development Empirical Study Seminar

International Marketing Empirical Study Seminar

国際マクロ経済学実証分析演習

Accounting Information Systems Seminar

Asian Economics Empirical Study Seminar

国際イノベーションマネジメント実証分析演習

Health Economics Empirical Study Seminar

Agricultural and Rural Development Empirical Study Seminar

International Human Resource Management Empirical Study Seminar

人口学実証分析演習

比較会社法実証分析演習

上級統計学

上級質的データ分析法

上級計量経済学

上級計量社会学

▼ アカデミック・スキルズ科目群

Academic Reading for Graduate Students

Academic Presentation for Graduate Students

Data Visualisation and Analysis

Academic Writing for Graduate Students

石川 城太 教授

貿易政策、多国籍企業、貿易と環境

■研究テーマ

経済のグローバル化が進み、国際的な依存関係が深まる中で、国々はどのような経済政策を採るべきでしょうか。この解答に必要な知見を与えてくれるのが、国際経済学という分野です。その分野で、ヒト・モノ・サービスの越境移動を扱う国際貿易論に関する研究を主にしています。たとえば、関税以外の手段で自由な貿易を妨げる非関税障壁や、多国籍企業に代表される越境経済活動などが研究対象です。また、貿易や貿易政策が環境にどのような影響を及ぼすのか、逆に、地球温暖化対策のような環境政策が、貿易にどのような影響を及ぼすのかも研究してきました。最近では、デジタルエコノミーの進展にも興味があります。



伊藤 匡 教授

国際貿易論、外国直接投資、産業連関分析

■研究テーマ

現在は、米中貿易戦争、世界貿易における中国の急速な存在感の米国や日本など各国への影響、外国直接投資の要因分析や受入国経済への影響分析、などについて研究をしています。また、過去には、世界各国の輸出商品が価格で競争しているのかそれとも品質で競争しているのか、更には、外国直接投資や産業のサービス化（スマイルカーブ現象）、国際価値連鎖などについての研究を実施しました。



乾 友彦 教授

生産性、経済発展論、国際経済学の実証分析

■研究テーマ

企業や産業の生産性の計測と決定要因に関する分析を行っています。特に経済のグローバル化が企業の生産性や、マークアップ、労働市場に与える影響について分析しています。この研究に加えて最近では、経済発展とサービス化の関係性について分析しています。また製造業のサービス化、サービス産業の生産性、教育や医療の質の計測とその決定要因に関する分析も開始しています。



入江 恵 教授

応用言語学、英語教育、言語学習心理学、研究手法

■研究テーマ

専門は英語教授法（TESOL）ですが、研究の中心は動機づけを中心とした言語学習心理学（Language Learning Psychology）です。人間は母語（第一言語）の到達レベルやスピードに大きな差はありませんが、第二言語は、認知的・心理的・社会的要因によって到達レベルやスピードが人によって大きく違います。この違いについての理解を深めることによって英語教育の発展や、英語学習の促進に少しでも役に立てればと考えています。



白井 哲也 教授

国際マーケティング戦略、ビジネスモデルの国際化、消費者アフィニティ

■研究テーマ

国際マーケティングの中でも戦略分野を研究しています。最近の研究テーマは「ビジネスモデルの国際化」、「消費者アフィニティの動的分析」、「多国籍企業による現地市場制度開発」などです。



オニール・テッド 教授

英語教授法（TESOL）、言語景観、教育テクノロジー、カリキュラム開発

■研究テーマ

これまでの研究テーマは、言語教育、教育テクノロジーと言語景観です。私はオープン教育リソースやデジタルハイブリッド教育学などのオープン教育に特に関心があります。最近の言語景観プロジェクトは、ロシアのウクライナ軍事侵攻への抗議活動にまつわる、大使館に関する研究です。



柏木 昌成 教授

マクロ経済学、国際マクロ経済学

■研究テーマ

マクロ経済学・国際マクロ経済学を専門とし、特にサーチ理論のマクロ経済への応用および開放経済モデルにおける金融政策について研究を進めています。これまで、サーチモデルを用いての住宅価格や失業の変動の分析や、開放経済モデルにおける国際金融政策協調の経済厚生への影響の考察などに取り組んできました。また、日本の金融政策についての実証研究も行いました。



ガルシア・クレマン ス 教授

無形資産、国際会計、国際税法

■研究テーマ

会計全般のデジタル化と租税法関連業務について研究を進めています。ブロックチェーンを使った情報システムの開発や、無形資産の会計処理、暗号資産の識別と評価について研究しています。



金 素延 教授

組織行動、国際人的資源管理、比較経営

■研究テーマ

研究領域の中で、リーダーシップとダイバーシティ&インクルージョンに関する研究テーマに取り組んでいます。特に、東アジアにおける効果的なリーダーシップや女性リーダーシップの特徴、及びそれらがどのように機能するかを解明することを主な研究課題としています。実証研究を行い、定量的なデータ収集のためのアンケート調査や、質的な洞察を得るためのインタビュー調査を実施しています。収集したデータは、統計的手法を用いて分析し、その結果を基に理論的な解釈を行い、知見を深めています。



久保 公二 教授

地域研究（ミャンマー）、アジア経済論、東南アジアの経済と社会

■研究テーマ

私は、東南アジア、特にミャンマーを対象に、開発途上国が抱える経済問題の分析を続けてきました。途上国で起きている、よくわからない現象について、ジグソーパズルを組むように情報を集めて因果推論するのが私の研究スタイルです。研究のトピックは、ミャンマーの外国為替制度やミャンマーとタイにいるミャンマー人移民労働者の懐事情、東南アジア諸国から中国への熱帯フルーツ輸出など多岐にわたります。



柴田 友厚 教授

経営戦略論、技術経営論、イノベーション経営論、製品開発戦略

■研究テーマ

企業の技術・イノベーション経営戦略についての研究を続けてきました。その中で一貫した問題意識は、企業と産業の盛衰をもたらすメカニズムの解明と、環境・技術変化に対応するための戦略転換と組織適応という問題です。日本が強いと言われるものづくり産業を主たる対象にして、様々な企業現場のフィールドワークを積み重ねながら研究を進めています。



玉置 えみ 准教授

社会学、人口学、国際人口移動、家族と健康

■研究テーマ

現在のプロジェクトでは、仕事と家庭の両立が個人の健康に及ぼす影響を、国際比較により検討しています。特に、海外移住をした移民に焦点をあて、社会環境の違いがどのように健康度の違いに関連するか考察しています。また、移民が維持する母国との文化的・社会的・経済的つながりが、彼らの健康に影響をおよぼす可能性についても分析しています。その他には出生力の生物学的・社会的側面について関心があります。



趙(小西) 萌 教授

ヘルス・エコノミクス、中国経済、応用計量経済学

■研究テーマ

経済学の理論に基づいて、人的資本に対する投資行動そのものや、人的資本がもたらす影響などに注目しています。人は、労働生産性を高めるためにどの程度の教育を受けるか、日々どのような健康管理をするか、といった選択行動を通して、人間が持つ能力(いわゆる人的資本)への投資を行っていると考えられます。私はこれまで、計量経済学の手法を中国と日本におけるミクロ経済データに応用した実証研究を行ってきました。目の悪い生徒に眼鏡を支給することだけでより勉強ができるようになるか、健康診断の結果が食事の選択に影響するかなど、研究課題に対して実証研究を行い、中国、日本や他の途上国の経済発展に伴う社会的諸問題の解決策を探求してきました。最近の研究には、社会保障政策、所得格差と健康不平等の関係などをテーマにした研究も取り込んでいます。



星 明男 教授

会社法、証券法、商取引法、国際ビジネス法、法と経済学

■研究テーマ

コーポレート・ガバナンスやコーポレート・ファイナンスに関する法制度を研究しています。最近の主な研究対象は、買収防衛策・アクティビスト対抗策の司法審査、企業買収契約の解釈、裁判における非上場株式の評価などです。



マーチャンド・ティム 教授

コーパス言語学、言語教育、eラーニング、タスク中心の教授法

■研究テーマ

私の研究関心はコーパス言語学、言語教育とeラーニングです。コーパス言語学は社会科学の特徴を多く有しており、言語を研究するための「ビッグデータ」的なアプローチと考えられています。最近では学習者の言語におけるコーパス開発プロジェクトを進めており、特に英語を学ぶ日本人学習者の進歩の段階を分類するためコーパスの分析をおこなっています。



牧田 りえ 教授

開発地理学、ポリティカル・エコロジー、持続可能な生計、農村社会変容

■研究テーマ

我々の生命と直結する極めて重要な経済活動である農業に従事する人々が、なぜ豊かになれず都市部や海外への移住を選択しなければならないのか。この疑問が、修士課程に進んだ頃から今日に至るまで研究の動機になっています。主に、途上国の貧困層の生計向上を目的とした所得創出事業、生産活動そのものを持続可能なものに変換させる試み(有機農業など)、グローバル・バリュー・チェーンを利用して消費者が生産者を支援する方法を探求してきました。研究アプローチとしては、現場から得たデータに基づいて理論構築することに関心があります。近年は、日本の農業・農村社会が直面している問題(耕作放棄地、担い手の高齢化、揺らぐ食の安全性)が途上国農村部にも顕在化している現実を踏まえ、先進国・途上国の二分法を超えた農村研究を志しています。



マクレガー・ローラ 教授

英語教育、映画研究、比較文化、広告研究

■研究テーマ

これまでは広告やメディア、映画研究、映画祭に関するビジネス、語学力試験、カタカナ英語や男女のコミュニケーションスタイル等を研究してきました。現在は、CLIL (content and language integrated learning) やEMI (English Medium Instruction) を提供している日本やアジアの大学のプログラムを研究対象としています。



国際文化交流研究科

Graduate School of International
Cultural Relations

2026年4月の新設に向け、設置認可申請中であり、
内容が変更となる場合があります。

国際文化交流専攻

授与する学位

修士課程：修士（国際文化交流）

▶ 国際文化交流研究科の特長

学際性に富んだ研究・教育内容

「アートマネジメント」「国際協力」「日本学・比較文化」「国際関係・地域研究」の4つのプログラムを用意し、それぞれの分野の実務家・研究者の養成を目指しております。入学時に所属プログラムを決めますが、本研究科では学際的アプローチを重視しており、プログラムを超えて科目を履修することができます。カリキュラムとしては演習科目、研修科目、実務演習科目、特殊研究科目に分かれており、中でも、「国際文化交流研修」をはじめとする、国内外の文化施設・国際機関・シンクタンク等への様々な研修科目やインターン科目を豊富に提供しております。これにより、文化交流・国際協力、国際機構分析等をめぐる諸課題の理解・解決と、専門家・実務家として必要な実践能力・問題解決能力の向上を図ります。

一学年最大10名の定員という少人数の学生に対して、30名を超す専任教員による多角的視点かつ、きめ細やかな指導を行っていることも特長の一つです。これまでの進路先としては、学芸員や国家公務員などの実務家を多数輩出している一方で研究者としての道を歩んでいる修士生もいます。

長期履修制度

出願に際して希望すれば、3年以上8年以内の長期履修が認められます。修士までに必要な学費の総額は、就業年数に関わらず2年で修了する場合と同一になるよう、履修計画年数に応じて1年あたりの学費が調整されます。

▶ プログラムの特長

「アートマネジメント」プログラム

博物館や劇場をはじめとする、非営利・営利の文化芸術事業のマネジメントに携わる人材を育成するプログラムです。担当教員は各種機関においてアートマネジメントの実務に携わった経験をもつ専門家であり、文化資源、文化経済、文化経営、アーカイブズなど、アートマネジメントの専門家となるために必要な科目を提供しています。

院生の研究対象は指定管理者制度、行政の文化政策などの制度に関する課題、ミュージアムショップ、チケット팅などの文化施設の経営の課題、コミュニティの文化活性化の課題など多岐に渡ります。

修士生は文化行政担当の公務員、文化施設（博物館、美術館、公共ホールなど）の学芸員・企画担当・運営担当、文化芸術の企画会社、企業ギャラリーの運営など、文化芸術の第一線で活躍しています。

「国際協力」プログラム

地域の自然環境や文化・価値体系への配慮、国際関係への理解など、国際協力に必要な専門知識及び能力の養成を目的としています。具体的には、文化遺産の保全と活用や、国際協力におけるNGOの役割、国際開発における「制度」問題、食糧をはじめとした資源の理解とその利用などについて、UNESCO、NGOなどにおける実務経験を有する教員による専門的な指導をしています。特に実務家の養成に力を入れており、途上国の開発協力の現場などでの「インターン研修」の履修を推奨しているほか、「費用便益分析」、「企画立案（文化協力）」、「統計処理法」、「ドラフティング」、「プレゼンテーション」、「プロジェクトマネジメント」など、国際協力の分野において必要となる実務知識や技能を横断的に習得できる科目を提供しています。

「日本学・比較文化」プログラム

「日本学」という名称は、海外の大学で多用されるJapanologyの訳語として定着してきました。海外における「日本学」あるいは「日本研究」の特徴は、文学、歴史、民俗、思想、美術といった広範な学問分野を包摂する概念として存立している点に認められます。そうした学際性を特徴とする「日本学」と、境界横断的な方法論である「比較文化」の視点を組み合わせたのが本プログラムの特徴です。

本プログラムは、文学、考古、歴史、思想、美術の各分野の教員を有しており、日本文化の空間的・地域的多様性に関する研究、あるいは古代以来の伝統文化に関する問題から現代社会や現代文化の動向に至るまで、時間軸方向においても多様な研究ができる科目が提供されています。

「国際関係・地域研究」プログラム

政治、経済、外交、安全保障、法律、経営、メディア、国際機構の側面から国際社会の構造やプロセス、課題を分析する「国際関係論」と、国家・地域・民族の特質を理解する「地域研究」のそれぞれの研究成果を結びつけながら、国際社会についての本質的洞察力、構造的理解力、多角的視野、動態的把握力などを養成することを目指しています。

担当教員には国際政治・国際法等の専門家をしており、日々移り変わる政治関係、経済関係だけでなく諸国家・諸民族の接触による文化関係などの知

見を深めることのできる科目を提供しています。

修士生には国家公務員なども輩出しており、それぞれに国家の最前線で活躍しています。

▶ 研究テーマ例

「アートマネジメント」プログラム

「銀座画廊の密集における歴史の変遷～インタビュー調査による考察～」

「十和田市現代美術館における行政と美術館と地域住民の感覚の差異から見える文化政策の課題」

「日本舞踊の家元制度の今日的意義と問題点の分析」

「横浜トリエンナーレにおける展覧会企画の変遷—第1回展から第5回展まで—」

「国際協力」プログラム

「ドイツの歴史教育では第二次世界大戦をどのように扱ってきたか—ベルリン州の学習指導要領の変遷を巡って—」

「多文化社会をめざす国際交流の価値と重要性—異文化理解と共生意識の育みへ向けて—」

「ネパールの識字と教育」

「我が国政府開発援助の戦略的マネジメントに係わる実態及び課題分析

—海外農業投資及び地球環境問題対応ODAを事例として—」

「煮干しの雌雄・部位・製造工程・産地別の呈味成分比較ならびに教育的意義」

「昆虫食の食育とその意義」

「日本における落の文化的背景と食嗜好に関する研究」

「日本学・比較文化」プログラム

「文学における一条天皇と藤原彰子の関係性 —『栄花物語』と一条天皇聖帝説話を中心に—」

「『源氏絵』における『後ろ姿』の人物像 —徳川・五島本『源氏物語絵巻』を中心に—」

「女性の自由 —欧米と日本の女性の解放運動とJ.S.ミルのフェミニズム—『自由論』と『女性の解放』を中心に—」

「天草崩れにおける『宗門心得違』—布教活動とその慣習—」

「明治末期の小林古径における歴史的風俗画 —古径作「極楽水」から「極楽井」までを中心に—」

「細長の考究」

「国際関係・地域研究」プログラム

「戦前日本（明治～昭和）における政軍関係の変遷と教訓」

「ポスト冷戦期における米国の対中認識から米同盟再確認・再定義に与えた影響」

「建国初期のアメリカにおける生存戦略の試み—1790年代前半の中立政策とジェイ条約に至る過程—」

▶ 入試方式

本研究科の受験に関しては、一般受験と学内推薦があります。募集定員は約10名です。一般受験には2回受験機会があり、筆記試験（英語、専門）に加えて、面接試験によって選考が行われます。また、学習院女子大学国際文化交流学部から学習院大学大学院国際文化交流研究科に進学しようとするときには、所属学科の推薦により選考が行われます。これを学内推薦といいます。詳細はアドミッションセンターに問い合わせてください。

設置科目	
文化マネジメント演習	プロジェクト・マネジメント演習
芸術文化演習	非営利団体演習
日本学演習	P R演習
比較文化演習	文化資料処理法
現代文化演習	統計処理法
国際文化協力演習	文化政策特殊研究
国際地域開発演習	文化法特殊研究
地域資源開発・利用演習	文化経済特殊研究
国際開発協力演習	アートマネジメント特殊研究
費用便益分析演習	国際関係特殊研究
環境コミュニケーション演習	地域社会特殊研究
国際関係分析演習	伝統文化特殊研究
国際メディア分析演習	現代文化特殊研究
地域社会分析演習	比較文化特殊研究
国際マネジメント演習	文化資源情報特殊研究
国際文化交流研修	日本学特殊研究
海外特別研修	言語分析特殊研究
インターン研修	文化経営学特殊研究
企画立案	国際メディア特殊研究
プレゼンテーション	マーケティング特殊研究
ドラフティング	情報メディア特殊研究
プロジェクト評価法	

石澤 靖治 教授

国際コミュニケーション論、米国政治、日米関係

■研究テーマ

国際関係において、メディアや情報、世論が国際間で紛争が生じた際にどのような影響を与えるかについて研究しています。世界の多くの場所が関係してきますが、主としてアメリカが関係してきた紛争を中心とし、米国政治における政権の性格やアメリカを取り巻く国際環境、メディア戦略のあり方を軸にしています。紛争と世論との関連から日米関係について歴史的な分析も行っています。国際関係論、政治学、社会学にまたがる学際的な分野です。



伊藤 由紀子 教授

国際協力、NPO、NGO

■研究テーマ

開発途上国における援助やボランティア活動のあり方、とりわけ援助受益者と外部者の関係性に着目し、「援助」が特別視されすぎているかを検討します。さらに、海外での活動を支える国内の取り組みにも注目し、NGO・NPOの役割や課題を通じて、その意義を考察します。あわせて、個人が国内外の活動にどのように関わることができるのかについても探ります。



今橋 理子 教授

日本美術史(江戸絵画史)、比較日本文化論、東西博物学史

■研究テーマ

専門は日本近世絵画史と比較日本文化論です。とくに江戸時代の自然観と密接に関係している博物学が、当時の芸術にもたらした影響の深さについて追究してきました。日本初の洋風画派である「秋田蘭画派」や、江戸末期の京都で桜だけを描いた「三熊派」など、先行研究の少ない芸術家研究にも取り組んでいます。現在は絵画だけでなく、博物学の影響のもとに生まれた工芸作品にも注目し、研究対象の範疇を現代にまで広げて考察を行っています。



岩淵 令治 教授

日本近世史

■研究テーマ

基本的には文献史料を素材として、日本近世史、とくに都市史を研究しています。主に江戸をとりあげ、町の社会構造や商人経営、武家屋敷と町人や寺社との諸関係、都市環境の維持・管理について多角的に検討をすすめています。また、近世考古学との協業にも積極的に取り組み、文化財の指定等にもかかわっています。なお、研究にあたっては、近年のインバウンド観光等を背景とした一面的な江戸の美化とは一線を画した立場をとっています。



ウィン・ゲン 教授

ビジネス英語

■研究テーマ

Field of research focuses on the development and enhancement of business communication skills, with particular emphasis on business writing and presentations. In today's globalized workplace, effective communication across cultural boundaries is essential for building trust, fostering collaboration, and achieving organizational success.



ウーゴ・ミズコ 教授

国際文化協力、建築学

■研究テーマ

文化遺産の保全を対象とした計画は、自然災害や紛争等で被災した歴史的建造物や景観を整備するだけでなく、その地域の持続可能な開発の鍵を握っています。国際協力は、国同士の理解を深める手段でもあります。とくに紛争においては意図的に標的となって被害を受けた文化遺産は少なくありません。このような文化遺産の最も適切な扱い方は何なのか、コミュニティーの復興における文化遺産の役割とは何なのかについて研究を進めています。



内野 儀 教授

表象文化論、舞台芸術(演劇・舞踊)論

■研究テーマ

私が専門にする表象文化論は、人間が生み出すさまざまな表象(イメージ、シンボル、言語、芸術作品など)を通じて、文化や社会の構造、意味、価値を分析・解明する学問分野です。そのなかでも私は、主として現代舞台芸術(演劇、舞踊、オペラ)を分析対象とし、そのパフォーマンスを成立させている多層的な諸制度について研究しています。文化政策・文化マネジメントから、舞台芸術の公共圏といった哲学思想領域についても、考えています。



宇都宮 由佳 教授

食文化、生活文化

■研究テーマ

日本および東南アジアの食文化とライフスタイルの変容について研究しています。特に、日本、タイ、ベトナムにおける食文化の比較や、東アジアにおけるポルトガル由来の伝統菓子の受容について調査しています。また、伝統的な食文化の維持と継承に関して、年末年始の食文化の変化、醤油の地域特性、学校給食における和食・郷土食などを計量的に分析しています。



萱 忠義 教授

応用言語学・英語教育

■研究テーマ

応用言語学および第二言語習得について幅広く研究を行っています。特に、ICTおよび生成AI(Generative AI)を活用した英語教育の可能性を探索し、デジタル技術や生成AI技術が学習者の言語運用能力の発達や英語4技能の習得に与える影響を研究しています。また、個別最適化学習や多様なニーズに対応した教育環境の実現、実践的な教育アプローチの確立にも取り組んでいます。さらに、早期英語教育の研究も行い、子ども向け英語プログラムの開発に携わり、効果的な指導法の構築を目指しています。



木村 直恵 教授

日本近代史・文化史

■研究テーマ

近現代日本を対象として、概念と実践をめぐる歴史について、歴史研究、思想史、文化史、社会学史のはざままで研究しています。新たな概念の獲得は、その社会に生きる人々の社会的・政治的実践にどのように影響し、どのような変容が起こるのかについて、「青年」や「社会」といった概念をもとに考えてきました。最近の関心は、近現代日本における会議や話し合い実践の歴史です。農村地域における「伝統」的話し合い実践と、明治以降、とくに戦後民主化のもとでの地方自治制度改革とのあいだから、デモクラシーと近代的「主体」概念の行方を捉え直すことを試んでいます。



金城 亜紀 教授

経営史

■研究テーマ

経営と歴史を両軸に個別のテーマを多面的に考察することにより本質を捉え、経営学や現実の経営への示唆を探る「歴史経営学」に挑戦しています。具体的には①担保の歴史(担保を切り口とした金融史)、②企業博物館(組織のナラティブ、「歴史」の作られ方、学際的な研究方法論の確立)、③倉庫の歴史(倉庫と金融の相互作用、近世と近代の接続)などです。加えて、「法と経営」の複合領域を開拓しています。



金野 純 教授

歴史社会学・政治社会学・東アジア地域研究

■研究テーマ

現代中国の社会変動やローカル・ガバナンスのメカニズムについて、歴史社会学・政治社会学的視点から研究しています。一党独裁体制下の社会変動やローカル・ガバナンスにおいては政治と社会が深く交錯しているため、多党制民主主義社会の分析とは異なるアプローチが必要とされます。現在は社会学と政治学の複合的視野から中国社会の変動過程、特にローカル・ガバナンスと社会統制の変化に注目した研究を行っています。



工藤 雄一郎 教授

先史考古学、環境考古学

■研究テーマ

先史から古代(特に旧石器時代から縄文時代)の生活文化史を考古資料から復元することを主なテーマとしています。中でも考古学、環境考古学と言われるような、各種の自然科学分析を取り入れた考古学的研究を積極的に推進しています。特に放射性炭素年代測定を活用し、ウルシやアサ、ヒョウタンなどの外来栽培植物利用の起源とその文化史を解明することや、日本列島最古の縄文土器とその出現の背景などを研究しています。



熊谷 英憲 教授

環境科学、地球環境学

■研究テーマ

環境のさまざまな課題を地球システム科学の立場から研究しています。人間圏と自然環境の接点のありようを探求し、中でも地下資源と防災に焦点をあててきました。環境を記述する一次情報(データ)の取得についても自然科学的に実施することを心がけています。近年は、人間圏内のしくみにも関心があります。変わらぬ明日を求めがちな意識の束縛を解き放つためにも、非日常の環境に視座を移す意義があると考えています。



クレイ・サイモン 教授

翻訳・通訳学

■研究テーマ

私は、長年にわたる翻訳者および通訳者としての経験を活かし、研究を行っています。大まかに言えば、「話言葉」の翻訳に関心を持っており、通訳においては現場の通訳者が直面する課題の研究、翻訳においては日本の舞台戯曲の英訳を主なテーマとしてきました。近年は、日本地域翻訳研究の一環として、江戸時代の旅人が残した談話の英訳にも取り組んでいます。また、朗読向けの子供向け絵本の英訳・和訳の研究にも関心を持っています。



北川 香子 教授

東南アジア史

■研究テーマ

主にフランス語とカンボジア語の文献史料を使って、歴史学研究の手法で、ポスト・アンコール時代およびフランス保護国期のカンボジアについて、様々なテーマをとりあげて研究しています。この時代は現在のカンボジアで見られる様々な要素が形成された時期ですが、ほとんど研究されてきませんでした。とくに、カンボジア語の手書き文書史料の研究は全く手つかずといったよい状況にあります。ゆえに現在は新史料の発掘と読解を進めています。



越塚 美加 教授

図書館・情報学

■研究テーマ

図書館・情報学 学術コミュニケーション及び公共図書館の地域への貢献の可能性、私設の図書館や独立系書店について関心を持っています。情報メディアは常に変わりつつあるものですが、近年のインターネットをめぐる動きはあまりに早く、紙媒体のメディアのみならず、コミュニケーション手段、音楽、写真撮影、映像の視聴法等広い範囲で変化、そして世代差が生じています。日常生活を送る上での違和感や驚きを大切にし、関心領域としています。



佐久間 みかよ 教授

アメリカ文学・文化

■研究テーマ

アメリカ文学・文化の特徴について時間性をテーマにアメリカの地理的な拡大を考慮し研究しています。アメリカ合衆国の成立が1776年の独立宣言を契機としており、国民文学の成立は19世紀のため、その作品は制度化された時間と個人の時間感覚の差異が特徴となっています。19世紀作家を中心に作品において時間感覚の矛盾をどのようにあらわされているか、海外文学からの、また、海外文学への影響関係を比較し研究を進めています。



櫻井 大三 教授

国際法

■研究テーマ

国際社会において、国際法がどのように形成されるのかを研究しています。特に、禁反言、黙認、一方的行為が、国家の行動や沈黙を通じてどのように国際法の規範として確立されるのかを分析しています。合意に基づく国際法の枠組みの中で、これらの法理がもつ役割や限界を検討し、国際裁判判例を通じてその実体的側面を明らかにすることを目指しています。



櫻井 宏明 教授

国際経済、公共経済、アジア経済

■研究テーマ

国家公務員として日本国内やタイの経済調査業務に従事してまいりました。こうした背景事情もあり、日本やタイがこれまで解決してきた、あるいは現在直面している課題等を経済学的な論説にあてはめデータを収集して分析を行っています。その結果、経済学的な背景事情とともに正しいと考えられること、誤っていると考えられること等を論文として指摘していくことを中心として研究を進めています。



佐藤 琢三 教授

日本語学(現代語の意味論・文法論)

■研究テーマ

現代日本語を中心とする文法現象を、意味の側面を中心としつつ、幅広く研究しています。殊に、言語現象の基底を支える言語形式の意味が現実世界を形式化したものである以上に、人間のものの見方そのものであるという言語観にたち、人間とそれを取り巻く状況や環境との相互作用において話者が何をしているのかという視点から言語の意味を分析しています。また、このような観点から言語における普遍性と個別性について考究しています。



澤田 知香子 教授

英語圏文学・文化・思想

■研究テーマ

現代イギリス小説を主とした文学が専門です。ミューエル・スパークのテキストを中心に「ポストモダニズム」と称される/関連づけられる現代思想と照らし合わせ、女性の表象、イメージ形成、アイデンティティ形成に関する問題について考えてきました。芸術と人生の相互関係、身体や言語、境界や“home”などを主要なテーマとし、国やジャンルを問わず、神話、おとぎ話、ファンタジー等さまざまな物語や映像作品も取りあげて研究しています。



澤田 匡人 教授

感情心理学

■研究テーマ

他者との関わりの中で生じる痛みに関連する感情を研究しています。例えば、他者の成功を疎んじる「妬み」は痛みを伴う感情ですが、妬みからこそ自分を高める契機にもなりえます。一方、妬ましい相手の失敗を密かに喜ぶ「シャーデンフロイデ」は、邪な感情に思えますが、妬みの苦痛を和らげる機能があるとも考えられます。こうした感情がどのように生じて、どのような役割を果たすのかを、調査データを読み解きながら追求しています。



品川 明 教授

(2026年3月退職予定)

フードコンシャスネス教育、環境教育、科学教育、体験学習法、ファシリテーターとコミュニケーション、海洋生物の生理生態

■研究テーマ

食と人、食と自然など「食」を通したフードコンシャスネス教育を実践します。食とは何か?食育とは何か?食と人との関係、食と自然との関連など食物や食物教育の実践研究を実施します。また、食教育プログラムの開発と実践により、教育効果をテキストマイニングなどを活用して明らかにします。

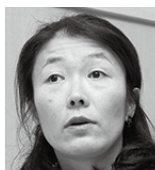


武井 彩佳 教授

ドイツ現代史、ホロコースト研究

■研究テーマ

ホロコースト後の世界の構造について研究しています。600万人のユダヤ人の殺害という事実は、戦後の国際社会の形成にどのように影響したのか、特に法や政治といった制度の構築や、過去の記憶や表象といった文化的側面から、ホロコーストと現代世界の結節点を明らかにします。このつながりを見ることで、例えばイスラエル・パレスチナ紛争など、現在進行形の問題について理解する視座が得られると考えています。



土屋 有里子 教授

説話文学、日本古典文学

■研究テーマ

伝承、伝説、神話などを含む、説話文学の研究をしています。同じ事柄でも、国や時代、宗教などが変わればそれぞれの風土や文化的特色を盛り込み異なった伝承となります。日本では説話文学の黄金時代と呼ばれる中世を中心として研究していますが、説話の比較考察を通して広い視野で世界を見つめ、現代に通じる比較文化研究につなげていくことを目指しています。



時安 邦治 教授

社会学、社会思想

■研究テーマ

批判的な社会理論に強い関心があります。シティズンシップ研究を中心として、社会のなかの多様性とそれによって生じるコンフリクトをめぐる諸問題について社会学・社会思想の議論をふまえながら考えています。特に、グローバル化とともに日本社会の内外で多様性の維持が経済格差や貧困に結びつくとなれば、その傾向に歯止めをかけるために人権とシティズンシップという概念がいかに使えるかについて研究しています。



中島 崇文 教授

中・東欧地域研究

■研究テーマ

ルーマニア語圏(ルーマニア及びモルドヴァ共和国)の歴史、社会、政治、宗教、民族問題を研究対象としています。社会主義期及びポスト社会主義期の歴史教育や歴史認識の問題、ドイツ人やハンガリー人などの少数民族の歴史と現状、合同教会(ギリシア・カトリック教会)の状況、1920年代及びポスト社会主義期における地方行政制度と地域統合、EU内外における両国の移住の状況を研究しています。



畠山 圭一 教授

(2026年3月退職予定)

国際政治、アメリカ政治外交、日米関係

■研究テーマ

アメリカ外交と日米関係を現代・歴史の両面から研究しています。現状分析では米国の政権・国務省・国防省及び議会における安全保障論議と対日政策との関連を、歴史研究では1940年代の米国における政権と軍部の国際秩序構想をめぐる論議、及び、対日戦後政策と占領政策の形成を探究しており、関連成果に、単著:『米国官僚組織の総て』(行研)、『日米新秩序の構想』(行研)、編著:『中国とアメリカと国際安全保障』(晃洋書房)、『テキスト日米関係論』(ミネルヴァ書房)、共著:『戦後アメリカ外交の軌跡』(勁草書房)、『中国をめぐる安全保障』(ミネルヴァ書房)、『台頭するインド・中国』(千倉書房)などがあります。



福島 雅子 教授

日本服飾史・染織史

■研究テーマ

日本の中世から近世を中心とする服飾史および染織史を研究分野としています。日本における中世から近世への移行期には、服飾様式や染織技法の大きな変化が見られるため、特に武家の現存する服飾遺品等を分析し、日本服飾史上の転換期の様相について研究してきました。この成果は、著書『徳川家康の服飾』（中央公論美術出版）や、論文「新出の伝徳川家康下賜「白練緯地葵紋付変り段亀甲模様小袖」について」（『國華』第1533号）等にまとめています。



古庄 信 教授

(2026年3月退職予定)

英語学(シェイクスピアと聖書の英語)

■研究テーマ

今から約1500年前、アングロサクソン人によってブリテン島にもたらされた英語は、どのような変遷を辿り今日の英語に至ったのか、などを過去の文献を基にして探求します。個人的には学生時代に打ち込んだシェイクスピアの、そして聖書の英語における様々な文法や語彙について、また近年はシェイクスピアがどのようにして膨大な語彙を駆使して名セリフを生み出したかなど、修辞法について関心が深まっています。



正本 忍 教授

フランス近世史、社会史、法制史

■研究テーマ

絶対王政期フランスの統治構造を、裁判、警察、軍隊、官僚制などの側面から研究しています。より具体的には、国王の特別裁判所かつ騎馬警察隊であるマレショセに関して、18世紀のオート＝ノルマンディ地方に時代と地域を設定し、国立古文書館、国防省歴史課古文書館、セーヌ＝マリティーム県古文書館など現地の古文書館で収集した手稿史料に基づく実証研究を行っています。



牧野 元紀 教授

博物館学、アーカイブズ学、東洋学

■研究テーマ

東洋学(アジア太平洋の歴史・文化・言語・思想・宗教・芸術・社会などを対象とする諸学の総称)に関わる歴史資料を主な素材として、博物館学・書誌学・アーカイブズ学分野での実践的研究に取り組んでいます。博物館・図書館・文書館における蒐集・整理・保存・調査研究・公開(展示・閲覧)の伝統的な基礎機能が、今日急速に進むデジタル技術やAIの進展によりいかなる変容を遂げているのかをアジア太平洋諸地域における現地の歴史的文脈から考察しています。



羅 京洙 教授

国際関係論、国際移動論、東アジア地域研究、現代コリア研究

■研究テーマ

朝鮮半島を中心とする東アジア地域研究に関わる研究活動を展開しています。具体的には、朝鮮半島をとりまく様々な問題群を検討の対象とし、東アジアの中の朝鮮半島を新しい観点から捉え直そうとしています。また、東アジアの国・地域の社会と文化に内在する類似性と相違性を、比較の観点から複眼的かつ客観的にとらえることを目指しています。とりわけ、東アジアにおける人々と文化のトランスナショナルな移動現象を討究しています。



教育研究施設

▶ 経済経営研究所

経済経営研究所 (GEM) は、1985年に経済学部附属機関として設立されました。活動は、経済学部の専任スタッフが中核となって行っていますが、学外の研究者との共同研究も積極的に実施しています。

GEMは、国内外の研究機関や研究者との交流促進、産業界や官界との接点としての研究活動にも努め、また、内外の研究者を客員として招聘しています。研究成果は、定期的な出版物により発表するほか、セミナーや国際会議を開催し、社会への還元にも取り組んでいます。また、社会の要請に応えるべく、研究プロジェクトやセミナー、カンファレンスを開催するなど、研究活動の学際化、グローバル化、実用化を目指して活動しています。



▶ 人文科学研究所

2001年4月、設立されました。人文科学に関する共同研究を行うことにより学術の進歩発展に寄与することを目的としています。人文科学全般にわたる共同研究プロジェクトが各分野の枠を越えて生まれ、学際的な研究が行われています。2025年度には7件のプロジェクトが活動しています。その成果を刊行するとともに、研究会・講演会・シンポジウムなどを開催します。プロジェクトのスタッフは、所員である文学部専任教員が中心ですが、人文科学研究科の博士後期課程修了者をはじめ若手の研究者、海外を含めた学外のすぐれた研究者を客員所員に迎えています。また、博士課程在籍の学生も研究補助者としてスタッフに加わっています。毎年、課程博士論文の報告会を開いていますが、2011年度からは若手研究者研究助成も行っています。

▶ 生命分子科学研究所

生命分子科学研究所、通称「生命研」は、1991年4月に設立されました。理学部生命科学の学部生や自然科学研究科生命科学専攻の大学院生が当研究所で研究しています。もともと基本的な生命分子である核酸とタンパク質や生物の基本単位である細胞の研究を通して、生命現象を分子の言葉で理解することを目標としています。

現在、8つの大きなテーマで研究しています。その内容を簡単に紹介します。(1)日本の伝統的な遺伝資源であるカイコを用いたゲノム構造と遺伝子機能生物進化の研究、(2)細胞および内部小器官の表面を形成する脂質二重膜中で情報伝達など重要な役割を担う膜タンパク質、特に視覚機能に関与する光受容体の構造・機能に関する研究、(3)新規ケミカルツールと電気生理学・マウス行動学を駆使して、記憶の形成過程やさまざまな神経系疾患の病態発現を理解する脳神経科学研究、(4)ショウジョウバエ等の昆虫を用いた遺伝子解析による、個体・臓器・組織・細胞レベル間の相互作用についての研究、(5)エネルギーを産生する重要なオルガネラであるミトコンドリアと、老化疾患との関連を分子レベルで解明する研究、(6)モデル植物の環境応答と形態形成に関する分子遺伝・生理学的研究、(7)酵母や大腸菌を用いたDNA損傷ストレスに対する相同組換えを介した耐性獲得の分子メカニズムについての研究、(8)抗生物質を作る土壌微生物である放線菌の細胞内での抗生物質合成経路の解明や抗生物質の自然環境中での役割を明らかにする研究。



▶ 史料館(霞会館記念学習院ミュージアム)



令和5年度春季特別展「学習院制服」
服事始出品(大正天皇用制服(夏服))



令和4年度秋季特別展「ある族の100年——宮内省(仁親王)とその時代——展示風景

史料館は、史料の収蔵・整理・保存と公開を目的として1975年に開設されました。2025年3月には、前川國男建築の旧大学図書館に移転し、「霞会館記念学習院ミュージアム」の名称でリニューアルオープンしました。

大学内の研究施設であるとともに、社会に開かれた博物館として、史料を次世代に引き継ぐという役割と史料の公開という社会的使命を果たすため、様々な活動を行っています。

皇室、皇族、華族、大名、公家、村の名主家、および学習院の教育者などから受贈・受託された25万点を超す豊富な収蔵史料を有し、このうち整理や調査研究を終えた史料群については、『学習院大学史料館収蔵史料目録』、『学習院大学史料館紀要』によって、その成果を公表しています。

1985年に東京都から博物館相当施設に指定されて以来、年に2〜3回の展覧会を開催。さらに年3回公開講座を開催するなど、学生や研究者だけでなく広く一般の人々にも開かれた場として機能しています。

学芸員課程事務室と博物館実習室を館内に設置し、学芸員資格に関する業務も行っています。また、これまで多くの博物館実習生を受け入れてきました。

● 史料館ホームページ

<https://www.gakushuin.ac.jp/univ/ua/>



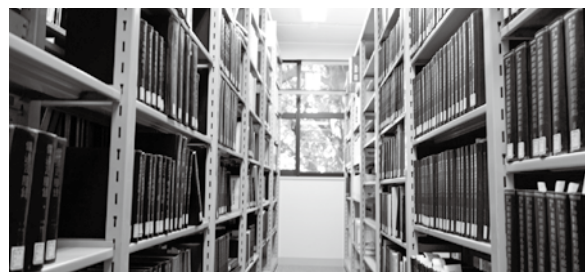
▶ 東洋文化研究所

東洋文化研究所は、1952年に設立された東アジア地域を研究対象とする学際的・国際的な共同研究施設です。歴史・教育・法・思想・政治・経済・言語学などに関するプロジェクト研究では学内の専任教員を中心に、学外(海外も含む)の優れた研究者も参加し、共同研究をおこなっています。その研究成果は雑誌『東洋文化研究』などの刊行物で発表され、大学院生の論文も掲載されています。また、東洋文化講座やその他講演会には多くの大学院生が参加しています。所蔵資料としては主に朝鮮半島・中国に関

する図書が多く、なかでも友邦文庫は朝鮮総督府関係の貴重な資料を多く含み、国際的にも注目されています。また、開架式のレファレンスルームは、多くの大学院生に利用され、東アジア研究のサロンとして機能しています。

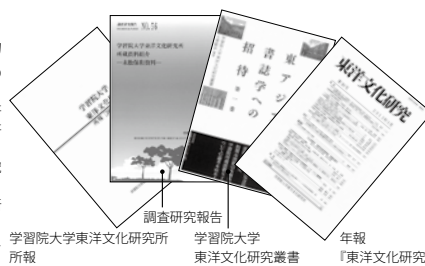
● 東洋文化研究所ホームページ

<https://www.gakushuin.ac.jp/univ/rioc/>



東洋文化研究所刊行物

アジアの諸国・諸地域の政治、経済、歴史、社会、文化、思想等に関する研究成果を、『東洋文化研究』や『調査研究報告』、学習院大学東洋文化研究叢書で発表しています。また、『東洋文化研究所報』を年1回刊行し、プロジェクトの紹介をしています。



▶ 外国語教育研究センター

外国語教育研究センターは外国語に関する教育・研究活動を総合的に行うことを目的とする組織として1997年度に発足し、外国語関連の授業のほか、言語や文化の分野における調査・研究、全学の言語教育活動に対する協力、言語教育に関する全学的調整等を行っています。大学院生も一部の授業は履修可能です。

開講科目は、英語、ドイツ語、フランス語、中国語、ロシア語、スペイン語、イタリア語、朝鮮語、アラビア語、そして外国人留学生向けの日本語です。

また、中央教育研究棟6階の外国語自習室はDVDや多読用図書などの自習用教材が充実しており、多くの学生に利用されています。大学院生も利用できます。

● 外国語教育研究センターホームページ

<https://fltrc.lang.gakushuin.ac.jp/>



▶ 国際センター

国際センターは、所長の下、専任教員とPD共同研究員が所属し、研究や教育に携わっています。

国外の研究集会で研究発表を行う大学院生に対して「大学院学生の国外における研究発表援助」制度を設け、渡航費用の援助を行う一方（詳細は「奨学金」P85を参照してください）、日本に短期間滞在し、本学の教員のもと研究を行う海外の大学院生に対して、「海外大学院学生国内受入研究援助」制度を設け、渡航費用および滞在費の援助を行っています。

また、大学院に所属する留学生に対し、日本大学（院）生がチューターとしてサポートする制度があります（チューター制度の利用を希望する留学生は指導教授を通して依頼する必要があります）。

近年では、文部科学省委託事業として「生活者としての外国人」のための日本語教育事業が採択され、地域日本語教育実践プログラムにおける指導者として大学院生も参加しています。

このように、当センターでは、大学院レベルの国際研究・調査の支援を積極的に行っています。

●国際センターホームページ

<https://www.univ.gakushuin.ac.jp/global/>



▶ 計算機センター



計算機センターは、情報分野の研究・教育を行うための大学附置研究施設として1974年に発足しました。全学の情報リテラシーおよびデータサイエンス教育を担う中核的な組織として、実践的なプログラミング演習から最新のAI技術まで、幅広い教育プログラムを提供しています。機械学習やビッグデータ解析など、データサイエンスの基礎から応用までを体系的に学べるカリキュラムを整備しています。

学内の情報環境の整備にも携わり、学生の学習・研究活動を支援しています。

●計算機センターホームページ

<https://www.gakushuin.ac.jp/univ/cc/>

▶ 図書館

学習院大学は、全学部を対象とした大学図書館のほか、専門分野に特化した資料を提供する学部図書館・研究施設を設置しています。目白キャンパス全体では約202万冊もの蔵書を備え、蔵書検索システム「GLIM/OPAC」等により、これらの膨大な蔵書への容易なアクセスが可能となっています。

また、デジタル情報の利用環境整備を進めており、学内のみならず、学外からもデータベースや電子ジャーナルなどを横断的に検索し^{※1}、目的とする情報をワンクリックで入手できる環境を提供しています^{※2}。

※1 一部対象外有り。

※2 契約しているデータベースを一覧できる「データベースリスト」と、紙媒体・電子問わず学術情報を検索できる「まとめて検索 (Discovery Service)」を備えています。

【契約データベース】

[朝日新聞クロスサーチ (朝日新聞)] [ヨミダス (読売新聞)] [日経テレコン 21] [eol 有価証券報告書全文検索] [LEX/DB (法判例)] [Westlaw Japan (法判例)] [JSTOR] [EBSCOhost] ほか、多数

■大学図書館

東1号館の2階から11階が大学図書館となっており、2023年4月に開館しました。和漢古書から現代の出版物まで多岐にわたる約86万冊を所蔵し、低層階を討議交流のエリア、高層階を自学自習の静粛エリアに定めることで、学習スタイルごとの棲み分けを実現しています。4階にはグループ学習室、7階には個人学習室を設け、学習室予約サイトから予約が可能です。

学外との総合窓口になっているレファレンスカウンターでは、国内外の図書館から論文のコピーや本を取り寄せるサービスを行っています。これらのサービスは、GLIM/OPACの個人機能「My GLIM」を利用すれば、自宅からも申し込み可能です。

また相互利用制度により、成蹊大学・成城大学・武蔵大学・甲南大学・青山学院大学・國學院大學・専修大学・東洋大学・法政大学・明治大学・明治学院大学・立教大学・日本女子大学・聖心女子大学（閲覧のみ）の各図書館で、研究に必要な資料の貸出を受けることができます。

●大学図書館ホームページ

<https://www.gakushuin.ac.jp/univ/glim/>

■法経図書センター（法学部・経済学部図書センター）

東2号館の3階から7階に位置する法経図書センターは、施設・内容ともに学部図書館としては比類ない規模を誇ります。社会科学系の資料を中心に約48万冊の資料を所蔵し、主として研究者・院生・学部生を対象にサービスを提供しています。館内にはパソコンが約80台あり、情報検索や課題の作成に活用されています。また話し合いながらの学習やゼミ・授業に利用できるセミナールームやグループ学習室も設置しています。

他に、法学部・経済学部・国際社会科学部・法科大学院の教員が授業の参考資料を選んだ指定図書コーナーが充実しています。2025年1月現在、103人の教員が指定した約5,100冊の資料で構成されており、非常に利用の多いコーナーです。GLIM/OPACの「指定図書検索」からは各学部・学科、教員ごとの指定図書リストをご覧いただけます。

●法経図書センターホームページ

<https://www.gakushuin.ac.jp/univ/le-lib/>

■理学部図書室

理学部図書室は、南4号館1階の物理・化学・生命科学に関する専門資料を所蔵する理学部図書室（物理・化学・生命）と、3階の数学に関する専門資料を所蔵する理学部図書室（数学）に分かれています。2つの図書室を合わせ、約7万冊の蔵書に加え、自然科学系の電子ジャーナルを多く備えています。

●理学部図書室ホームページ

<https://www.gakushuin.ac.jp/univ/glim/sci/>

■国際文化交流学部図書センター

（2026年4月新設予定。国際文化交流学部は設置認可申請中のため内容が変更になる場合があります。）

戸山キャンパスの8号館に位置し、自然光にあふれた開放感のある2階建ての建物には約22万冊の資料があります。机には全席コンセントを設置済みです。予約制の半個室型の席（個人キャレ）や食事が可能なフレッシュルーム、リラックスできるソファ席もあります。息抜きもしながら長時間研究に集中できる環境を整えました。

サービス面では、ニーズに即したガイダンスを始めとした利用者支援に力を入れています。



大学院の概要

学習院大学大学院は、「法学研究科」「政治学研究科※3」「経済学研究科」「経営学研究科」「人文科学研究科」「自然科学研究科」「国際社会科学研究科※1」「国際文化交流研究科※2」の8つの研究科から構成されます。研究者を目指す者、教育者を目指す者、国際社会で活躍することを目指す者など、一人ひとりが自らの目標へ向かって、より深く学問を探究できる環境がととのっています。

▶ 大学院の研究科・課程・入学定員

修士課程	定員	博士前期課程	定員
● 国際社会科学研究科 ※1		● 法学研究科	
国際社会科学専攻	6名	法学専攻	10名
● 国際文化交流研究科 ※2		● 政治学研究科 ※3	
国際文化交流専攻	10名	政治学専攻	10名
		● 経済学研究科	
		経済学専攻	10名
		● 経営学研究科	
		経営学専攻	10名
● 人文科学研究科		● 人文科学研究科	
哲学専攻	10名	哲学専攻	3名
美術史学専攻	10名	美術史学専攻	3名
史学専攻	15名	史学専攻	3名
日本語日本文学専攻	20名	日本語日本文学専攻	3名
英語英米文学専攻	10名	英語英米文学専攻	3名
ドイツ語ドイツ文学専攻	5名	ドイツ語ドイツ文学専攻	2名
フランス文学専攻	5名	フランス文学専攻	2名
心理学専攻	6名	心理学専攻	2名
臨床心理学専攻	12名	臨床心理学専攻	3名
教育学専攻	20名	教育学専攻	5名
アーカイブズ学専攻	15名	アーカイブズ学専攻	3名
身体表象文化学専攻	10名	身体表象文化学専攻	3名
● 自然科学研究科		● 自然科学研究科	
物理学専攻	15名	物理学専攻	3名
化学専攻	15名	化学専攻	3名
数学専攻	6名	数学専攻	3名
生命科学専攻	15名	生命科学専攻	3名

掲載内容は発行時点(2025年5月)のものであり、今後変更となる場合があります。
※1 国際社会科学研究科は設置届出中であり、今後、計画が変更になる可能性があります。
※2 国際文化交流研究科は設置認可申請中であり、今後、計画が変更になる可能性があります。
※3 政治学研究科は収容定員変更に係る学則変更届出中であり、今後、計画が変更になる可能性があります。

▶ 専攻別在籍者数

2025年5月1日現在

博士前期課程		(人)			
研究科	専攻	1年次	2年次	3年次	合計
法学研究科	法律学専攻	1	1	－	2
政治学研究科	政治学専攻	7	11	－	18
経済学研究科	経済学専攻	2	3	－	5
経営学研究科	経営学専攻	0	2	－	2
人文科学研究科	哲学専攻	3	6	－	9
	美術史学専攻	5	4	－	9
	史学専攻	9	8	－	17
	日本語日本文学専攻	8	9	－	17
	英語英米文学専攻	1	6	－	7
	ドイツ語ドイツ文学専攻	1	1	－	2
	フランス文学専攻	0	3	－	3
	心理学専攻	3	0	－	3
	臨床心理学専攻	9	13	－	22
	教育学専攻	6	4	－	10
	アーカイブズ学専攻	9	7	－	16
	身体表象文化学専攻	9	7	－	16
	計	63	68	－	131
自然科学研究科	物理学専攻	9	10	－	19
	化学専攻	27	28	－	55
	数学専攻	6	4	－	10
	生命科学専攻	11	23	－	34
	計	53	65	－	118
博士前期課程	合 計	126	150	－	276

博士後期課程		1年次	2年次	3年次	合計
研究科	専攻				
法学研究科	法律学専攻	0	0	1	1
政治学研究科	政治学専攻	0	1	3	4
経済学研究科	経済学専攻	0	0	2	2
経営学研究科	経営学専攻	2	2	8	12
人文科学研究科	哲学専攻	0	3	4	7
	美術史学専攻	2	7	6	15
	史学専攻	4	2	11	17
	日本語日本文学専攻	1	3	6	10
	英語英米文学専攻	1	0	6	7
	ドイツ語ドイツ文学専攻	0	1	2	3
	フランス文学専攻	0	1	1	2
	心理学専攻	0	0	2	2
	臨床心理学専攻	2	6	15	23
	教育学専攻	1	2	10	13
	アーカイブズ学専攻	0	1	5	6
	身体表象文化学専攻	0	2	9	11
	計	11	28	77	116
自然科学研究科	物理学専攻	1	0	0	1
	化学専攻	1	0	1	2
	数学専攻	0	0	1	1
	生命科学専攻	0	1	3	4
	計	2	1	5	8
博士後期課程	合 計	15	32	96	143

奨学金

▶ 学内奨学金

学習院大学大学院博士後期課程給付奨学金

大学院博士後期課程に在学する大学院生を対象として、納付金負担を軽減し若手研究者の研究活動を奨励することを目的に、授業料の3分の1相当額を奨学金として給付します。

[奨学生の資格]博士後期課程に在籍する学生のうち、次の①または②のいずれかに該当する者

①本人および配偶者の収入金額合計が所定の収入金額以下であること。②学業成績が優秀かつ研究心に富む者。

給付額:年間授業料の3分の1相当額。

学習院大学家計急変奨学金

修学の意欲があるにもかかわらず、家計の急変により学業の継続が困難な学生を支援することを目的とした給付奨学金です。

[奨学生の資格]次の3つの基準を満たす者。

①家計基準／世帯収入(生計維持者である父母の収入合計)が家計急変事由によって著しく減少し(半減以上)、別に定める収入基準額以下であること。

②成績基準／標準修得単位数以上の単位を修得し、最短修業年限(休学期間を除く)で卒業が見込まれる者。

③家計急変事由／別に定める家計急変事由が申請日から6ヵ月以内に発生していること。

給付額:年額15万円(在学中1回限り)

奨学金等の併用:[高等教育の修学支援新制度]による授業料減免との併用不可

学習院大学学業優秀者給付奨学金

本学学生の学業成績優秀者を表彰することを目的とし、副賞として奨学金を給付するために設けられました。各研究科委員長から、それぞれ学長に推薦され決定します。

[奨学生の資格]特色ある研究活動を行う者

給付額:年額300,000円

安倍能成記念教育基金大学院奨学金

故安倍能成元院長の功績を永く記念し、その精神を後世に伝え、学術および教育の興隆に寄与する目的で設けられた優秀学生に対する奨学金です。

研究者の育成を目的として給付される奨学金です。

[奨学生の資格]大学院に在学する学生で、学業成績・人物ともに優秀

であり、また将来、研究者たり得る資質のある者

給付額:年額450,000円

関育英資金奨学金

故関義長氏(元学習院理事)の遺志により設けられ、電気ならびに原子力関係の研究者(大学院生)に対して給付されます。

[奨学生の資格]自然科学研究科学生

給付額:月額30,000円

給付期間:1年

学習院末松奨学基金奨学金

故末松保和学習院大学名誉教授のご遺族より寄付された基金を運用し、その基金から生じる果実等から給付するものです。

[奨学生の資格]人文科学研究科史学専攻学生

給付額:年額100,000円

学習院大学教育ローン金利助成奨学金

金融機関から、学費等納付を目的として教育ローンを借用した場合、在学中に支払った金利の一部(上限5万円)を申請により給付する制度です。

人文科学研究科特別研究費

人文科学研究科に在籍する大学院生の研究を支援するため、博士前期課程においては5万円、博士後期課程においては20万円を申請者全員に研究費として給付しています。

▶ 学外奨学金

日本学生支援機構奨学金(貸与)

日本学生支援機構は、独立行政法人日本学生支援機構法に基づいて設立された機関で、学資の貸与その他学生等の修学の援助を行っています。

2024年度実績

(単位:円)

奨学金の種類	博士前期	博士後期
第一種	50,000、88,000	80,000、122,000
第二種	50,000、80,000、100,000、130,000、150,000 の5種類から選択(前後期共通)	

財団等(給付)奨学金

財団法人等による給付奨学金の応募については、本学からの推薦枠が大学院生を含めても1名~2名と少ないため、4月上旬に「事前登録制」をとっております。

詳細は、学生課奨学金担当までおたずねください。

●奨学金等一覧(採用数は2024年度実績)

制 度 名		金 額 (円)	採用数 (名)	募集時期	貸・給別	備 考
学習院大学大学院博士後期課程給付奨学金		授業料の $\frac{1}{3}$ 相当額	61	5月下旬	給付	採用1カ年
学習院大学家計急変奨学金		年額 150,000	申請者なし	6月上旬 11月中旬	給付	採用1カ年 (在学中1回限りの給付)
学習院大学教育ローン金利助成奨学金		在学中に支払った金利の一部 (上限5万円)	1	1月中旬	給付	採用1カ年
学習院大学学業優秀者給付奨学金		大学院生 年額 300,000	30	(推薦制)	給付	採用1カ年 各専攻からの推薦制
安倍能成記念教育基金大学院奨学金		年額 450,000	14	(推薦制)	給付	採用1カ年 推薦制
学習院末松奨学基金奨学金		年額 100,000	1	(推薦制)	給付	採用1カ年・人文科学研究科史学専攻からの推薦制
関育英資金奨学金		月額 30,000	1	(推薦制)	給付	採用1カ年・自然科学研究科からの推薦制
日本学生 支援機構	大学院 修士・博士前期	第一種(月額) 50,000、88,000 第二種(有利子) 5種類から選択	23 4	一次:4月 二次:10月 予約採用:11月	貸与	採用決定(予定) 一次6月中旬・二次12月中旬 予約採用決定3月下旬
	大学院 博士後期	第一種(月額) 80,000、122,000 第二種(有利子) 5種類から選択	7 2			
学習院大学海外留学奨学金		年間 400,000 以内	5	12月及び 6月	給付	
学習院大学海外短期研修奨学金		70,000 以内	1	9月及び1月	給付	
学習院大学北米への留学促進奨励金		150,000 以内	0	9月及び2月	給付	
学習院大学語学能力試験受験の助成		12,000 以内	2	4月~1月上旬	給付	
大学院学生の国外における研究発表援助		100,000 以内	11	4月上旬~ 1月中旬	給付	
学習院大学外国人留学生奨学金及び奨励金		奨学金 300,000 以内 年度毎変動有 奨励金 300,000	38 5	4月上旬	給付	採用1カ年
学習院大学外国人学生に対する授業料減免		授業料の 30%*	35	4月上旬	減免	採用1カ年
私費留学生用学外奨学金		各奨学金により異なる	若干名あり	随時	給付	推薦または個人応募制

*大学院博士後期課程3年次で取得単位満了の者で、博士論文執筆または審査のために在籍する外国人学生は、100%減免(2024年度実績:6名)。

学位授与数

●学位（修士）授与数
（年度別・種類別）※旧表記
1954年～1990年

	計
法学修士	60
政治学修士	26
経済学修士	14
経営学修士	20
文学修士	990
理学修士	643
合計	1,753

●学位（博士）授与数
（年度別・種類別）※旧表記
1954年～1990年

	計
法学博士	
政治学博士	2
経済学博士	
経営学博士	
文学博士	2
理学博士	119
合計	123

※法学研究科博士前期課程は、2004年の法科大学院の設置に伴い、いったん廃止された後、2016年に再開されるまで、修士課程在籍者は存在していません。

※美術史学専攻、
アーカイブズ学専攻、
身体表象文化学専攻は2008年度開設

※臨床心理学専攻は2009年度開設

※教育学専攻は2015年度開設

●学位（修士）授与数（年度別・学位の表記別）

※新表記

年度	修士 (法学)	修士 (政治学)	修士 (経済学)	修士 (経営学)	修士 (哲学)	修士 (美術史学)	修士 (史学)	修士 (国文学) (日本語日本文学)	修士 (イギリス文学) (英語英米文学)	修士 (ドイツ文学) (ドイツ語ドイツ文学)	修士 (フランス文学)	修士 (心理学)	修士 (臨床心理学)	修士 (教育学)	修士 (アーカイブズ学)	修士 (表象文化学)	修士 (理学)	合計
1991	2	4		4	13		8	4	4	2	2	6					24	73
1992	6		4	6	12		11	13	8	6	1	4					28	99
1993	7	1	1	3	19		13	10	5	3	5	8					35	110
1994	8	6	4	9	12		9	25	10	5	1	10					45	144
1995	7	1	5	4	18		18	17	6	3	3	12					45	139
1996	7	5	4	6	14		14	18	7	6	6	11					51	149
1997	5	3	3	9	12		14	20	5	7	3	9					30	120
1998	7	3	2	5	12		12	15	6	3		14					29	108
1999	5	4	3	7	20		17	15	6	4	3	12					32	128
2000	8	2	4	7	11		14	19	4	1	2	14					32	118
2001	4	6	6	6	14		10	15	7	4	5	13					36	126
2002	5	8	2	7	20		7	20	6	4	2	10					41	132
2003	8	2	4	8	13		17	21	6		2	13					30	124
2004	4	2	2	5	11		14	24	6	2	2	11					41	124
2005		1	3	5	15		18	9	6	1	2	13					47	120
2006		4		5	13		14	14	2	4	3	9					41	109
2007		11		7	8		12	13	6	2	4	12					32	107
2008		12	2	3	2	8	6	11	7		1	8					42	102
2009		6	1	7	9	3	9	12	9	5	4	7			5	2	29	108
2010		6		8	4	8	11	15	9	2	6	2	11		8	7	39	136
2011		9	5	11	2	11	5	11	4	3	2	1	14		5	7	55	145
2012		10	3	9	3	12	9	8	2	1	4	1	10		4	4	35	115
2013		10	2	8	5	13	15	15	4	3		1	12		2	6	38	134
2014		9	2	2	5	10	9	15	4	1	2	2	10		5	6	53	135
2015		4	5	3	6	6	12	21	2	3	1	1	14		3	6	33	120
2016		7	2	5	5	9	13	20	5	4	3		15	6	11	5	49	159
2017		4	3	8	5	11	8	9	2	1	3	2	10	7	3	4	36	116
2018	1	2	4	8	5	7	6	15	4			1	12	10	9	6	51	141
2019		4	6	9	8	9	13	12	10	1	3		9	4	5	5	51	149
2020		5	1	5	3	8	8	16	4		4	1	11	3	9	2	50	130
2021	2	3	4	12	1	6	6	12	6	1	2	1	11	14	5	4	33	123
2022		3	2	7	1	5	6	10	4	2	3		9	2	3	5	46	108
2023		6	2	4	5	7	7	6	1	1	4		11	7	3	4	58	126
2024		3	3		1	7	9	4	5	1	2		10	5	4	5	52	111
合計	86	166	94	212	307	140	374	482	182	88	90	209	169	58	84	78	1,369	4,188

	法学研究科	政治学研究科	経済学研究科	経営学研究科	人文科学研究科	自然科学研究科	合計
新・旧体制合計	146	192	108	232	3,251	2,012	5,941

●学位（博士）授与数（年度別・学位の表記別）

※新表記

年度	博士 (法学)	博士 (政治学)	博士 (経済学)	博士 (経営学)	博士 (哲学)	博士 (美術史学)	博士 (史学)	博士 (国文学) (日本国文学)	博士 (イギリス文学) (英語英米文学)	博士 (ドイツ文学) (ドイツ文学)	博士 (フランス文学)	博士 (心理学)	博士 (臨床心理学)	博士 (教育学)	博士 (アーカイブズ学)	博士 (表象文化学)	博士 (理学)	合計
1991		2																2
1992	1	2										1					3	7
1993	1	1		1													3	6
1994					1												3	4
1995		3			2		3										4	12
1996							1										2	3
1997		3		1			3	3									2	12
1998		2		1	1			1									8	13
1999		2	1	2	2		3										5	15
2000			1	2			2	2									6	13
2001	1	1					2	6									1	11
2002		2			1		3	5									1	12
2003	1			1	2			2		2							5	13
2004		1	1	1			4	4				1					1	13
2005			1	1	2		2	1	2								4	13
2006	1			1	1		4	1				2					3	13
2007		1		3	5			1									7	17
2008		1	1	2	5		4	3	1		1						4	22
2009		1	1	2	5		3	3	1		1						4	21
2010		2	3	2	2		6	4	1						1		1	22
2011	1	3			3	2		3				1					5	18
2012			1				4	2								1	1	9
2013		1				1	1	4		1		1				1	1	14
2014		1	1	1			1	2	1	1						2	6	16
2015	1	1		2		1	1	2								1	1	10
2016				1	1			1				1	1			1	2	8
2017				1	1		2			1			1		2		2	10
2018		2					1	1				1				1	5	11
2019		1	1			1	5	2	1								3	14
2020		1				1	2	1					1		1		1	8
2021	1					2	2					1			2		4	12
2022			1	1				1								1	3	7
2023	1		2	1		2	2					1	2				3	14
2024				2	1		1	2	1		1			1	1	1	3	14
合計	9	34	15	29	35	10	62	57	8	5	3	9	4	3	9	8	109	409

	法学研究科	政治学研究科	経済学研究科	経営学研究科	人文科学研究科	自然科学研究科	合計
新・旧体制合計	9	36	15	29	215	228	532

教員免許状

●本大学院において取得できる教員免許状の種類および免許教科

免許状の種類 研究科・専攻		中学校教諭 専修免許状	高等学校教諭 専修免許状
政治学研究科	政治学専攻	社会	公民
経済学研究科	経済学専攻	社会	公民
経営学研究科	経営学専攻	社会	公民
人文科学研究科	哲学専攻	社会	公民
	史学専攻	社会	地理歴史
	日本語日本文学専攻	国語	国語
	英語英米文学専攻	外国語（英語）	外国語（英語）
	ドイツ語ドイツ文学専攻	外国語（ドイツ語）	外国語（ドイツ語）
	フランス文学専攻	外国語（フランス語）	外国語（フランス語）
自然科学研究科	物理学専攻	理科	理科
	化学専攻	理科	理科
	数学専攻	数学	数学
	生命科学専攻	理科	理科
人文科学研究科	教育学専攻	小学校教諭専修免許状	

*原則として、中学校・高等学校教諭専修免許状は中学校・高等学校教諭一種免許状を既に取得している者に、小学校教諭専修免許状は小学校教諭一種免許状を既に取得している者に授与される。

入学者受入れの方針（アドミッション・ポリシー）

●入学者受入れの方針（アドミッション・ポリシー）は、以下のQRコードよりご確認ください。

法学研究科	政治学研究科	経済学研究科	経営学研究科	人文科学研究科
				
自然科学研究科	法務研究科 (法科大学院)	国際社会科学研究科※1		国際文化交流研究科※2
				

*掲載内容は発行時点（2025年5月）のものであり、今後変更となる場合があります。

※1 国際社会科学研究科は設置届出中であり、今後、計画が変更になる可能性があります。

※2 国際文化交流研究科は設置認可申請中であり、今後、計画が変更になる可能性があります。

INFORMATION インフォメーション

● 大学院学生募集要項の請求方法

要項・願書は本学Webサイトにてダウンロードすることができます。

※必ず事前に本学Webサイトにて出願期間・募集要項をご確認ください。

学生募集要項についてはQRコードを読み込むか、学習院大学Webサイト

(<https://www.univ.gakushuin.ac.jp/admissions/graduate-exam/>) をご確認ください。



● 人文科学研究科説明会のお知らせ

人文科学研究科は、大学院説明会を8月2日(土)と10月18日(土)に対面もしくはオンラインにて実施予定です(10月18日(土)は史学専攻・フランス文学専攻・心理学専攻・臨床心理学専攻を除く)。

また、一部専攻では、下記日程でも説明会を実施いたします。

- ・心理学専攻：6月3日(火) ※対面開催・オンライン同時配信予定
- ・臨床心理学専攻：6月3日(火) ※対面開催・オンライン同時配信予定
- ・史学専攻：6月14日(土) ※対面で開催予定
- ・教育学専攻：7月21日(月) ※オンラインで開催予定
- 12月1日(月) ※オンラインで開催予定

今後変更の可能性がございますので、人文科学研究科Webサイト、各専攻Webサイトにて必ずご確認ください。

● お問い合わせ

お問い合わせは、学習院大学アドミッションセンター(目白キャンパス西5号館4階)にて承ります。

電話 03-5992-1083・03-5992-9226

URL <https://www.univ.gakushuin.ac.jp/admissions/>

開室時間 9:00～11:30、13:00～16:30(月～金) 9:00～12:00(土)

アクセスマップ



目白キャンパス

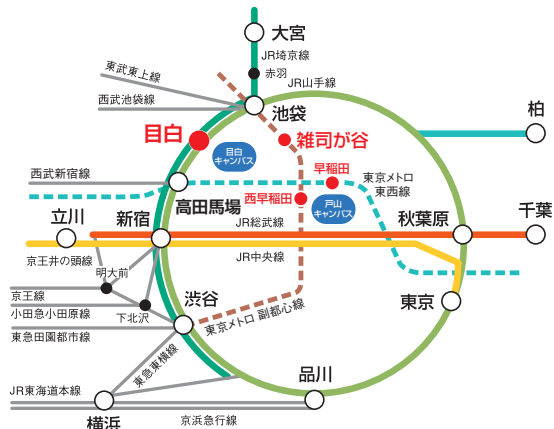
〒171-8588 東京都豊島区目白1-5-1

■法学研究科、政治学研究科、経済学研究科、経営学研究科、人文科学研究科、自然科学研究科、国際社会科学研究科 ※1

JR山手線「目白」駅より 徒歩30秒

東京メトロ副都心線「雑司が谷」駅3番出口より徒歩7分
都電荒川線「学習院下」・「鬼子母神前」駅も利用可

※1 目白キャンパスに所在する国際社会科学研究科は、設置届出中であり、今後計画が変更になる場合があります。(2025年5月)



戸山キャンパス

〒162-8650 東京都新宿区戸山3-20-1

■国際文化交流研究科 ※2

東京メトロ副都心線「早稲田」駅

3番エレベーター口より徒歩1分

東京メトロ東西線「早稲田」駅2番出口より徒歩9分

JR山手線・西武新宿線「高田馬場」駅 戸山口より、徒歩13分

※2 戸山キャンパスに所在する国際文化交流研究科は、設置認可申請中であり、今後計画が変更になる場合があります。(2025年5月)



学習院大学大学院

お問い合わせ先：学習院大学広報センター
TEL.03-5992-1008
〒171-8588 東京都豊島区目白 1-5-1
<https://www.univ.gakushuin.ac.jp>